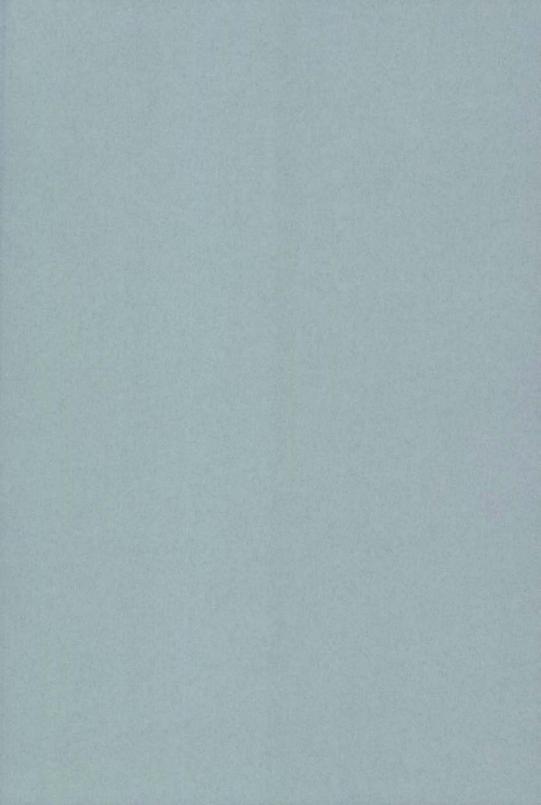
山岳

第三十二年



山

岳

第三十二年第一號



山間のアイヌ語

黑部奥山と奥山廻り役(一)

東日本に於ける狩獵者とその狩獵

「北陸游記」より

故 宍

戶

昌

三

郎

高

橋

文

太

中

島

E

文

金

田

京

助

---耳

艺

(1)

月例理事會一 新評議員推薦-新入會員-會員計報-退會者

會

務

報 告 ゥ

25

ストン師の壽像建設について(建設委員)

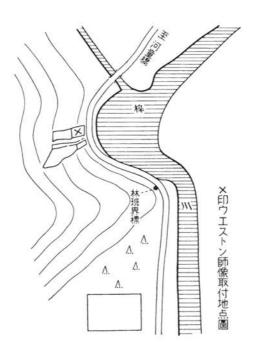
至

一

解體に從事する人々と柴	解剖のお祭り	熊穴の燻し	スリズエに倚つて構へたる獵師	スリズエ	栩の山神木	朴の山神木(第一圖)	新川郡海岸分間繪圖(嘉永五年)	奧山御境目丼谷々川筋等略繪圖(文化初年)	奧山御境目文化御繪圖	奧山御境目見通山成川成繪圖(享和二年)	奧山御境目見通繒圖(元祿十三年御改)	越中新川郡松儀氏古文書	ウェストン師濤像(扉)	圖版	
100	100	九五	九五	加加	如	加加	三五	三四	프 등		<u>=</u> ;	향		對頁	
勘左衛	能の中	黑部山	黑部片	同	同	同	当州	ウェス			ウェス	双眼鏡	メアテ	能の中	熊の
「衞門グラの卷符・	熊の皮剝の槪念圖	黑部上奧山概念圖	黑部下奧山概念圖	(火打ケ岳より	(後立山)	(錫杖ヶ岳より	量闘籍より(雪	トン師壽像取付地	挿		1	双眼鏡を手にせる獵師	(卷倉)	熊の皮張り(背面)	皮張り
										區					
・概念圖				(火打ケ岳より鷲羽ケ岳まで)		(錫杖ケ岳より餓鬼ケ岳まで)	三州測量圖籍より(雪倉ヶ岳より大蓮花まで)	地點圖	حم	4	ン師壽像取付現場圖				
Ξ	==	114-114	六 —	武八——武	四个一四七	四一四	三—完	扉			亚	1:10	1:10	10元	10%



REV. WALTER WESTON



山間のアイヌ語

金田一京助

橋君の採集された山ことばを見ると、やはり、クサノミ、 ザワウ、雑炊をゾロ、風をソヨ、蓑をヤチ、笠をテッカ、男根をサッタテといふ、等の類であるが、今、高 統のもの る珍らしい牧獲だつた。 谷村の獵師に就て、 くところがないものだから、どうなつてゐることかと思つてゐると、高橋文太郎氏が、此の度、 『北越雪譜』の『山ことば』といふのは、米を草の實といふ、味噌をツブラといふ、鹽をカヘナメ、燒飯を 越後の鈴木牧之が寛政の『北越雪譜』に、『山ことば』のことが始めて見えて、その後、これに就てまた明 ム殘存物であることが辿られて興がある。尤も、 同地の山ことばといふものを採集して來られたことは、吾々をして目を見張らせるに足 カイナメは味噌とあつて、鹽の方はアヂワイ、ま カイナメ、サッタテなどがあつて、 明かに同じ系 北蒲原郡赤

た笠はアマブタ、

蓑はソヨギなどの相違も存在する。それは方言的差異でもあらうか。

山間のアイヌ語

金田

(1)

合はせだけ、極めて近いものを有つてゐる。 藤)、鹽が秋田にカリアハセ、津軽にカリ、又は、 詞でも、越後と奥羽との地方的相違でもあらうか。味噌が、秋田 に サ ギ(sangi)(杉浦)、 津 輕 秋田の方の山詞にも、 米をクサノミといふことはあつて、但し、味噌、鹽の全然違ふのは、 カリアハセ(後藤)とあつて、この二縣の方は、所も隣り 津軽にサネ 同じ山

さて、然しながら、それらにも増して實に驚くべきことは、犬をセッタ(またシェダ)、頭をハッケといふ

は は 隆氏に基く高橋君の發表に據る。北秋田の阿仁のは、 palee「あたま」にあたる言葉であることである。山形(西置賜郡の金目でセタ、石瀧でシェタ)のは大島正 類である。此は山形から秋田及び津軽に亘る山ことばで、而もまがふ所もないアイヌ 語 りセタ及びハッケがその通りに見えてゐる。倘後藤君に由つて杉浦健一氏採集の北秋田郡荒瀨村根子の山 り犬がセタで、 頭がハッケであることが知られる。 津軽のは、 早川氏の『方言』誌上の發表に據る。それに據るとや 後藤興善氏の西津輕赤石村での採集で、 の seta 「犬」及び

これらの諸氏に從ふと、實に、この裏日本の山詞に、まだし、アイヌ語の殘存の拾はれることは、驚くべ

言葉をも合考することが出來た。

(2)

が、越後へ來ると全く違つて「水」はサイであること、奧羽と越後との間に可なりの開きがあることがこく 方言學者を驚倒したのは、遂との程のことであつたが、それが西津輕ワッカ、北秋田ワッカ、 水以外へも廣く摘用されて、雨水・涙・尿・湯・酒までも意味されることがあるのは少し濫用の傾きがある 水」を津輕の杣が今尚ワッカ(アイヌ語に「水」を wakka といふ)と云ふことを北山長男君が報告して 何れも、飲料

にも亦はつきり見える。 「雪」はアイヌ語ウパシ (upash) であるが、ウハシからウワシ――ワシまでは自然に行きさうであつて、津

輕・秋田に、共に雪をワシといふのがそれらしく思はれる。 で、耳金がミミガニから、ミンガニ、終にミンガリ、ニンガリとなつてゐる類である。 ともあつたらしいが、 頭を津軽でハッケ(後藤)、ハッキ(後藤)、秋田でハケ(杉浦)、ハッケイ(早川)、越後でハッケ(高橋)と云 木」はアイヌ語チクニ(chikuni)であつて、秋田・津輕の山言葉には、ツクリ、或はツクイと聞こえるこ チが東北辯ツになつてゐることは當然である。 語尾のニとリとの互換は有り得る變化

> (3)

生物が生きてゐる限り動いてゐる所である爲め、獵人生活者には特に注意を惹いてゐた所の

ふのはアイヌ語の頭をパケ (pake)といふのを思ひ出さす。

臟 ものである。 サンベ(後藤)、 アイヌはどこのアイヌでも之をシャンベ又はサンベといふものであるが、 或はサベともあるのは、ひとつものの兩様に書かれてゐるに過ぎないものと思はれる。 津軽の・ Ш 詞でも、

1

Щ 問

のアイヌ語

金田

Ш

で採集されたのはやはりサンベであつた。早川氏の發表の中にも、文章中ではサンベ「心臓」と見えてゐる。 と云つたのを、それらに類推してサンベまたサベと兩様に書き留めたものにほかならない。高橋氏が北秋田

0 の差はあるが、この交替は極めて普通にあり得る變化である。 朝日」とあつて、 Ш 日月はアイヌ語でこれを一つに云つて、南方方言ではチュブ (chup) 北部方言ではトンピであるが、 .詞、「日月」をトッピといふのは、偶合では無ささう。秋田にも此の語があるが、杉浦氏 尚トッピ、カナルは「日があがる」、トッピ、ボチタは「日が入る」とある。 の報に、 撥音と促音と

トッピ

は驚く。アイヌで、屢ょ「大」と「多」と通ひて、『今年は雪は多い』などいふことを、ウパス・ボロといふ ふ様に、又ワッカ ものであるが、 津輕 ・ホロといふらしい。そのほか、「海」を、 ・秋田でワシ・ホロといふやうである。「大水」などにも、アイヌ語でワッカ ホロ・ワッカ(「大水」)などは、應用して擴張さ

「大」及び「小」はアイヌ語では poro 及び pon であるのに、津軽・秋田の山詞に、「大」をホロといふの

シナリとか、シナレとかいふのが一寸似てゐる。「帶」のことなども、オビシナリ・オビシナレなど。 結ぶ或は縛ることをアイヌ語にシナ(shina)といふものであるが、津輕・秋田の山詞に、「繩」や「紐」を

着物は、もと毛皮だつたので舊いアイヌ語にウル「毛皮」であつたが、「皮」はまたカップ・カッポともい

れて行つた造語であらうが、偶アイヌの方にもボロ・ワッカは洪水などにいふ。

(4)

ふが、 青森・秋田の山詞の着物をカッポといふのは、ひよつとしたらこれ

Ξ

此等のアイヌ語の殘存は一體何を意味することであらうか。

第一に考へられることは、この地方の山間の獵師の人々は、實際先住民の子孫であるからであらうといふ

々が現在生存してゐることであるから、今日寧ろ直接に逢つて見て、その體質から判定する方が本當であら ことである。但し、さうなると問題は人種のことになり、血の關係の問題になる。血の關係ならば、その人

うから、それを差措いて、變易性の多い言語から推斷することは慎みたいのである。尤も、二百年前までア

イヌの風貌をしてゐた津輕半島の酋長四郎三郎の後裔が、今日少しも餘所の濱の人々とちがふ所が無いと云

別してその人々の風貌のアイヌそつくりであるといふ様な印象の無かつたらしい事情に鑑みるに、 吾々が内地で往々見受ける多毛の人々ほどの體質的特徴も見受けられないらしいことを考へさせられる また西津軽のマタギや北秋田のマタギに逢つて來られ 恐ら

た前述の人々

(5)

が、

つて寧ろ失望されてゐる事實に鑑み、

<

との際言語の問題は、 可なりに物を言ふ重要な手がゝりとなつて來る。

第二に考へられる事は、 (言語は文化であるから問題を文化關係に於いて眺める事として) 先住民との接

觸、 殊に職業的交渉から、 山間のアイヌ語 その影響に由る残存ではないかといふことである。體質上に格別の相違が無いと

間

25

すると、この考の方が寧ろ可能性がある。

代 始めアイヌに鍋釜を借りて所帶を持つて土地へ居着いて年を取り、 K 0 に交つてゐるといふのが、珍らしい事ではなく、隨分其處此處に見受ける實狀である。これから推すと、前 つて持ちつ持たれつの暮しをして居りながら、尚アイヌ語など口に眞似ようともしないから、 々として曉の星も啻ならざる觀がある。 瀰漫してゐるのであるが、その反對、 高度の文化並に言語は、その頃まだ石器時代にあつた先住民族の生活の全面へ滲透して大水の畔を涵す ・前々代・その前からの事もほどわかることであつて、以て吾々の國語の中にアイヌ語の案外存してゐな 水の低きに就く如く、文化も高い方から低い方へ流れるのが常道であるから、金屬を知つてゐた大和民族 大和民族の方へ入つて來たと認められる先住民族の文化の要素は零 それは現に北海道へ渡つてアイヌ部落へ割り込んでゐる內 腰が曲つて子や孫も出來、 一語も知らず H. 10 世話 地 人が、 にな 程

魚叉をマレク、 ヌ語 イヌを澤山徴集してその勞働力を利用した關係上、こちらから行つた勞働者も鄕に入つては鄕に從へ、アイ て中央の言葉の上には中々アイヌ語などは見出せないのであるけれど、併し、 般社會はその様に、 とも意識せずに、 網の浮をアパ、程階をタカマ、 可成りにアイヌ語を使つてゐるものである。舟をチブ、小舟をモチブ、 (産物など或は所の名などでも無ければ)さう (アイヌ語などをば口 海豹をトッカリ、鱏をイチャヌイ、 漁場などに於てはもとくア 山刀をタシロ、 にせず、 小刀を

V

事

情がうなづける。

沼をトー、 濱をオタ、磯をシラリ、筋子をチポロ、心臓をシャンベ、水をワッカ、犬をセタなどは極

めて普通に漁師の使ふ語彙である。

間 13 海岸に住 には、 数のアイヌ語を残存したのではあるまいか。 濱と山との相違はあるが、 同様な事情が、 獵師の山詞に、セタ(犬)、ワッカ(水)、サンベ(心臓)、以下の それは、 元來アイヌは漁獵の民で、士農工商の別なく、凡て

似るか、 類推的に說く根據を確立し得たものであるから、學問上に、可なりに大きな功績であるといふべきである。 あつたことを知ることが出來たのである。これに由つて、本州の地名を、 肅な資料で、建國の歴史と共に我が東境の隣人として現はれて二千年、遂に熟化して永久に消えた本州アイ 方言は不幸にしてその一語も文献にのぼることなく、從つて如何に今日の北海道アイヌの かくして殘存したアイヌ語の今日發見せられたことは、以つて本州アイヌ語の片鱗をのぞかせる極めて厳 永久の謎だつたが、多少は相違するにしても、まづまづ明かに今日の北海道アイヌ語と同 全部がアイヌの後裔でなくつても、倘アイヌ語が混じて使はれ得たであらうことは想像しがたくは んで夏は誰でも漁夫となり、冬は誰でも獵師だつたからその山間に専ら獵師を生業とした部落民の 今日の北海道アイヌ語地名を以て 言 語と違ふか、 じ言葉で

(7)

黑部奥山こ奥山廻り役

中島正

文

は

から

3

依らず是の純乎たる農民の手に依つて早くから拓かれて居た事である。そしても一つの喜びは山岳諸家に今迄未到 の地を些少とも扠き得たと云ふことである。この二の喜びが遅筆の余を鞭つて是の一篇を成さしめたのである。乍 愛護に任じたのであつた。然かも余を最も喜ばしめたものは、處女地奧山の高山大岳が外國人や僧徒や雜輩の手に 今日の登山者に劣らざる純な山の愛好者として、登山を樂しみ、山岳を愛し、俳諧連歌に想を述べ、山内の諸物の **陰調査せられて居た事蹟を發表したものである。この農民達は英明な藩主の激勵に感奮し責務に精進すると共に、** 是の一篇は誰れにも前人未踏と信ぜられた黑部奥山一帶が今を去る三百年以前より越中農民達に依つて隈なく探

古繪圖舊記類は汎ね余の文庫の所蔵に依る)

山の譏を冤れ難い。何づれ古繪圖を按じ書記錄を調べ再登山を試みて訂正の機を得たいと思ふ。(本篇に引用せる 叱正を贈らんことを。尚又奥山一帶は十數年前汎んど余は足跡を印したるものゝ、今に到つて論ずれば卽ち机上談 然本篇の根幹をなす古文膏舊記は今に稀少であつて爲めに余の謬誤、偏見、獨斷を交へた所が寡くない。願はくば

目

次

黑部奥山の研究

奥 Щ

0 濫

觴

奥山の地境と名稱

奥山の國境と山道

Щ 0 森 林

奥

奥 Щ 0 諸 相 (以下次囘)

五 四 Ξ

奥山年表と關係舊記解說

奥山廻り役の研究

黑 部 奥山 の研究

奥 Щ 0) 濫 觴

越中の國黑部吳山の起源は誠に空々莫々としたもので、推斷を許されない。其古記錄舊記等は古來殆んど 世人の耳目にふるゝものゝ無い狀態である。黑部と云ふ字の語源も何處に根據して起り、

瞥見を許されず、

黑部奥山と奥山廻り役

中島

何 九 の時代より 文書に 現れ、 何れの記錄舊記等に使用明示せられて來たつたか、寮聞にして吾人の定 かにし

得ない

想起せらる」のである。 る越中の鄕土研究家は曰く「黑部とはアイヌ語のグルベツより出でたるものである。グルベツとは 今吾人の手許に持つ慶長の越中古地圖には 「黑部とは山 高く木立の眞黒に生ひ茂る日の目も見えぬ邊を指して言ふ言葉より出たもの」と云ふ口碑を 但し此「黑邊」と云ふ文字も古文書には往々當字として用ひられて居るのだ。 「黑邊川」と録せられ居て、 明かに現時立山地方の人々 魔 0 0 叉或 信ず 川と

0 所々に數多くの名稱を殘存して居るに徵して附會の說として一蹴すべきでない。 每に荒し廻つて居る。けだし魔の川の所以である」と。此の論も仲々趣きがあるのである。

アイ

ヌ語は越中

を年

(10)

云ふ言葉であつて、妖怪も籠るてふ黑部八百八谷の水を合せて、愛本より下流は奔放自在新川郡の平

には 又 多量に生育する關係上遂に黑部と音律的に轉化したるならん」との意も又全然捨て去るべきでなから 説に「黑部奥山 の機は俗に黑部杉と稱せられ良材として讃へられ、 機は父黒檜とも云はれ、 元來奥山

が之は全く一 倘 又傳說には 笑に附してよいと思ふ。 「黑姫山より流れ出づるもの右なるは姫川となり、左するは黑部川となる」と云はれて居る

以上各説は一 様に葉て難い根據を有するものの、 含味すれば只一面を語るのみであつて、 俄かに採つて以

あるが、 0 つて正當となし得る確證の無いことが遺憾に堪へない。只第二說のアイヌ語のグルベツより轉化し、第三說 クロベ説を混淆したるものを以つて、やゝ吾人を首肯せしむるものあり、説述の體裁をも認めらるゝので 尚後日の考證を待ちたい。

集り來つた。 有賴)に依つて開山せられた。爾來佛教の興隆に伴ふて、年々多數の立山禪定の人々がこの峰頭を目指して さて黑部が人文を有せざること数千年、文武天皇の大寶元年との黑部の一角をなす立山が慈興上人 人々は峰頭より遙か東方日出づる後立山連嶺の壯觀を眺め、 御來迎を拜しては只々佛緣の歡喜 (佐伯

地獄谷の異變を巡つては、因果應報の畏るべきを知る許りであつて、脚下の大黑部に對しては神官

旬も無くて去つて行かれた。長享年中の堯惠上人の吾妻紀行もわづかに黑部峽口內山村の桃源の景色を述べ 立 山の峯を歌ひ早月片貝の流に吟咏をやつた、萬葉の歌人大伴家持卿も、 遂に國境の秘境黒部には片言隻

僧侶、

中語、

禪定者は等しく不知不言の地として、妖異を説くばかりで、

事の真をも傳へ得なかつた。

(11)

に咽び、

(吾妻紀行)の状書

流と相映して幽邃桃源も比す可からず。 四国秀峰に圍繞せられ恰も是れ壺中の小天地、 黑部川其東北を流れ花時に至れば一眸紅ならざるなく黒部川の碧

黑部奥山と奥山廻り役 中島

又字奈月五千僧に堂塔伽籃があり戦國時代まで存在したと云はるゝものゝ、 今何處に其の遺跡其の記

=

尋ね得べくもない。

12 を驚かすのである。 越中富山の城主佐々成政が十一月立山の新雪を蹴つて佐良越を敢行し、濱松に徳川家康を訪ねた史實が吾人 他日危急の際萬一 くて奥山は暗黑の内に年を重ね來つたが、戰國の末に到つてこの秘境に最初とも云ふべき快記錄、 成政はこの前年天正十一年八月立山權現に四百五十俵の地を寄進して尊崇を表すと共 の通路をこの嶮絶の地針ノ木峠に取らんと、 秘かに 衆徒懐柔の計を施したのであつ 即ち

越遊行囊抄

た。

立山權現動行無。懈怠。旨被。申越一之通承屆候、彌不、可、有。油斷

合四百五十俵、全不、可、有。異儀,候、若堂塔橋以下大破二付而者、 禮如『先規』可』被』入』情之趣二十三人之詣判得』其意,侯、就」其爲。新寄進」岩倉之內三百俵、以』寺田之內百五十俵) 天正十一年八月二十日 六 角 坊 可以被 相相一候旨、 佐 急度可,申遺,候、 内 滅 成

多 中 院主御坊

坊 坊

王

藏 住

坊

H 財

蓮 知 坊

坊 坊

無 船

勒 乘 坊 坊

實 物 員

祀

无

林

坊 坊 坊

乘 藏 光

坊 坊 坊

以上二十三人

明 楞

寶 千

道 賀

常

坊

野堂本願

蓬

門

長吏御坊

林 持 坊 坊 坊

> 嚴 靜

> 花 藏

> 藏 積

坊 坊

助

仍狀如一件

政 判

(12)

|候、就中立山之儀從|神代|無"其隱堂建立|並祭

(大閣記

雄卿可、被、遷、御本意、謀を盡し可、及、歸國、也。 策て汝等に志らせ度は思ひけめと、於、賀州、無、沙汰、様にとふか 此義を知せつ、毎日膳をもすへ常々有やらにこしらへおきしなり。かく思ひ立つてよりは只急がんより外よろしき 等心やすくあらんほとゝ引出物給へしと云しかはそれよりいとねんころにもてけうしけり。越中外山の城を十一月 ほしくて柴折くぶる煙たえ~~也。いざ煙を心あてに下りみむとかんしきと云ものに乗ておとしけれは真忠の心さ 事はなきぞとて雪になつまぬわかきはらを百人はかりめしつれ大山之嶺わきに黎上り南を見れば上下に里有りとお 意五六日あらんや、上下二十日には歸城すべし其間は病と號し伽之者五六人かよひの小姓十人計には起請をかゝせ く忍び出しに依て左もなかりしなり。富山を出てより十日計は前田知まじ、ほの聞てより決定之間五日かくて陣用 は何の地をさして思召立給ふぞやと從ひし士共間ひしかば遠州へこへ行家康へ相勸申來春は羽柴筑前守を討亡し信 をおこし秀吉卿に敵對せり、天正十二年霜月下旬深雪をもいとはすさら~~越とて嶮難無双の山路に行迷ひぬ。是 干越中守護されば先君の恩惡を不忘して一とせ信雄卿與秀吉卿及鉾楯有しとき信雄卿御味方に與し越中にして義兵 十疋傳馬百疋迎ひとして被仰付宿等に至るまで一として不如意なること露もなきやうに徳川殿さたし給ひしに依つ す入しかば老たる樵天膽を消し是は變化のものそかし今此雪中に人間のわさにはあらしと不審しあへりぬ。小姓之 しを天感し給ふにや思ひの外やす~~と麓の里に著にけり。民のかまとに立入らん事のうれしさにあんないをもせ 二十三日に出て十二月朔日午の刻に上。諏訪に著したり。是より家康へ飛脚を以申達しければ駿州府中まで乘馬五 佐々内蔵助剛。真忠、雪中さら~~越之事。抑佐々内蔵助成政、元は尾陽春日井郡平之城主たり、其後信長公被封 建部兵庫頭と云し者いやとよ越中より信州深志邊へ心さす人にてあるそ宿をかしまいらせ道の案内をもせよ汝

(13)

黑部奥山と奥山廻り役

中島

かひなき義を守り何事も徒になつて越中四部を三部羽柴肥前守へ前田利長)に給り一部佐々に與へられ候し。 りけりかく義を守り信を厚くせしに依て、秀吉卿とは不和にそ成にける。其後信雄卿與:秀吉卿;和睦有しかは佐 樣に相鞿し翌朝打立濟洲之城に至つて御禮申上これかれ評議を盡し則令請暇又深雪に山路をたとり〈〈 て雪中の勞苦を忘れつゝ十二月四日遠州濱松之城に至り家康卿へ對面し羽柴筑前守秀吉を討亡し信雄卿之達本意候

(家忠日記

(當 十二月二十五日丁卯越中之佐々内蔵助濱松へこし候吉良信雄様鷹野に御座候、 代 記 御禮申候むかいにてふる舞候。

同十二月佐々陸奥守濱松へ下、干時信雄吉良騰野シ玉フ 頼テ歸國上下信州ヲ通

森記、 景周は其著「越登賀三州志」に於て、成政の佐良越は七月なるべしの評論を掲げられたのである。 12 記述に些少の相違があるが多期横斷は等しく認めて居るのである。然し他方天正十二年十月信雄と秀吉の て家康と計つて共に秀吉を討んと策するものと、秀吉が已れを繫んことを恐れて援兵を乞ふが如 の記述は主として大閤記より出發して居ると見られ、 和睦成立したる事實より推斷せば大閤記の記述は事實の顚倒せるを覺ゆる。此點を指摘して加賀藩 此 の外寬永諸家系圖傳、武德大成記、武德編年集成、 微妙公御夜話等其他幾多の書中に於てこの成政の勇壯なる雪中佐良越の記述を見るのである。これ 其間成政の濱松に到着せる日時 神君年譜、 御庫本三河記、 前田創業記、秀吉譜、末 の相 遠や又目的 苦 \$ 士富 0 VC 等 關 間 0

引證スベカラズ。 ラ越ヲコエ十二月四日遠州濱松ニ至リ神君ニ謁ストシ七國志、武徳大成記等ニモ十二月成政遠州ニ至ルトス、 平相濟ムナレハ霜月臘月深雪ヲ踏別ケテ行クヘキ理ナシト云々。景周按スルニ三壼記ニ十一月二十三日成政サラサ 計策ニ及ヒタルコトナレハ六月七月ノ間ニコソ尾州遠州へモ行ツラメ其上今年十月ニ至ツテ秀吉公ト信雄卿トノ和 前田公ト戰フ起リハ七月ノ末ヨリシテ九月ニ至ッテ能州未森ノ城攻後卷等ノコトアリ沙羅々々越コシテノ後加州 ニ登ルコトハ絶テナキコトナリ不動堂マデハ上ルコトアリト云、十一二月ノ比人ノ通フコトナシ、其上今年加州 出タルナルヘシサテ大閤記ニ十一月下旬ニ越中ヲ立テ十二月ニ歸城トアルハ不審カシ、芦峅ノ者ニ問フニ冬日立山 テ又上ル風雨ニ逢フ時へ進退度ヲ失フ夜宿セントスルニ民屋モナク洞穴ニ息フノ由ナリ、信州野口村ト云山家へ出 り立山へハ北ノ方左へツク沙羅沙羅越ハ右へツク其末ハ知ラス人ノ常ニ通フ道ニハアラズ、深谷大キニキレテ下ツ 其道激水ヲ涉リ、 云簑マテハ平地也、 ナリ、 有澤永貞云若キ時越中ニ居住シ立山禪定シテ其道ヲ嚮導ニ問フ、コノ山峻絶ニシテ道只一筋ナリ、 芦峅ヨリ十一里許アリト云傳フ、爰ヨリ松本へ出人馬ヲヤトヒテ木曾路カ伊奈通リヲ行キテ遠州カ尾州 是ハ十一月ト七月ト字體相似タルヲ謬寫セルコト疑フヘカラス、諮書ノ誤リ皆大閤記ヲ因襲シテ 嶮岨ヲ傳ヒ、 **爰ヨリ三里許險路ヲ行テ中宮ヲ芦峅ト云、爰マテハ馬モ通フ也、爰ヨリ立山御前マテ九里余也。** 岩ヲ踏ミ米ニ上ル亦難所ノ比スヘキナシ、至險五里許上リテ不動堂ト云ニ至リ爰ヨ 新宮ヲ岩倉ト

推測して合理的であると云はれ、今日も鄕土史家の信賴を受けて居る。乍然この七月說もこの季節の成政 した事に依り、 七月説を堅持する景周の所論の主點は、 濱松行きの效なき事より判斷して居ることである。この説は成政の今年八月以降 冬季山岳通過の不可能なること」、十月信雄秀吉の間 に和 の行動より

黑部奥山と奥山廻り役

中島

之二及フト見ユ。

0

議成立

(15)

末森の決戰に破れ朝日山の攻防又利あらず、 0 濱松行は忽ち人々 難點を有する。 これに比して前記十一月説の所論の優點は信州 の耳目を聳て、 且つ前田方を刺戟して警戒せしめ、 かてゝ加へて秀吉信雄の間に和議成立の報あり、形勢漸く已れ へ極秘の内に往來出來ること、 且軍勢を進むるの掛念ある等 然かも今年 0 軍事上

VC 譜 慶長五年十一 に不利なるを以つて、 缺 御庫本三河記の記述ぶりが此間の消息を物語つて居るではないか。 くる所なくば今日では左まで難事ならぬ事ではないか。 月より十二月の候に於て軍勢を引率して新雪かさむ朝日山 急速信雄、家康の意向を打診し奮起を乞ひ且越中への援軍を求むるに在つた。 と云ふのである。 又雪中の佐良越は天候に恩まれ 系 (海拔六千尺) 後說に付いては、 三十餘里を踏破し 志 田 神君年 義 秀が 準備

邊の危急に際し最も深く考慮しての結果なりと判斷し、大閤記の記述を採るのが當を得たものでないかと思 ふのである。 て米澤城に退いた記事 佝異論としては四月に決行せられたと云ふ説も存在するが、 (「山岳」第二十九年第二號) に徴して、或は成政の霜月佐良越も可能にして然かも身 これは只里人談に過ぎない様であ

越針 等である。 ノ木峠道 この成政 の外に の壯擧は有名な火け古來より傳說的色彩が中々に濃いのである。 劔嶽の北方ブナクラ越を通過したといふ説。 又越中境川の奥あげろ路を通つたと云ふ説 微妙公御夜話には佐良

越とあげろ路を混同して居る。

時節に上

記

の如く敷説あるに對し佐良越の道筋に關しても敷設がある。

即ち人口に膾炙する現今の佐

良

(16)

地のことく成により却つて道よく候と申傳候旨承候。 申様に承候、 夫より罷歸申上は黑部川原に付て罷越松本へ出申候、あけ路越と申は此通と承候。佐々内藏助越候はさらくく越と 或時中納言樣越中立山之後に道あり、佐々內臟助信濃へ越る道も有能見て可參とて岡田助三郎、 左様之道は見不申候。 被遺、 芦峅十三郎爲案內者、 但正月四日尾張內府へ参候は足輕二百人先に立雪を踏せて参に山の谷雪吹埋陸 食物鍋を人夫に爲持、道の樣成河原をひたと行、 信州松本へ出る也。 大橋甚兵衞

の事業を記し乍ら内容は全く混同して記るされて居る。 筆者に佐良越の智識が無かつたのか、叉との秘境の詳細は人々に語るを憚られたのか、切角中納言利常公

態の下に突破したるや、吾人の最も知らんと欲する點が朦朧として傳說的になり終つて居ることである。 得て、驚嘆を禁じ得ない。只錢念なる事は成政が如何なる用意の下に幾何の日時を費して如何なる山 上各關係古文献を通して、吾人は佐々成政が風雪の期よく嶮難の間を踏破して往來したる史實を確認し 日中の狀

(17)

以

詣 過して來つた丈け、はばかる所あつて傳へられず湮滅してしまつたと見るべきであらう。 つただらうと云ふことは想像に難くない。 の岩魚釣り、盗材者、密貿易者、 り等 成政のこの佐良越の史質は、既に此の時代ざらくく越の存することを明示したものであつた。當時信州 は 前立 0 岩峭 寺や中 宫 1の蘆岬 間諜、立山禪定の拔け詣り等の者共が針ノ木峠を越して西に東に嶮路 寺が自己の存立上絕對に許さなかつた爲め記錄の絕無なるは致し方の無 これ等の記録や口碑にして見ても、奥山立入嚴禁の藩政 叉立 山禪 時代 定の抜け を辿 の通

黑部奥山と奥山廻り役

中島

い事である。

天正八年以來新川郡を領知して居た佐々成政は天正十五年に至つて肥後に轉封せられて去り、 新川郡は提

く前田家の制令下に置かるゝ事とはなつた。さて賢明なる利家侯は佐々成政の佐良越の事實等を見聞し げて前田利家の預り領となり、次いで文祿四年秋名實共に利家に領知せしめられた。於是との黑部奥山も長 た人

べき間道なることに鑑み、藩國の東方防衛の重要地區として黑部奥山の等閑に附すべからざるを痛感せられ

たことは自然のことであった。

丈けに、

此の嶮絕無双なる山岳地帶にも尚且數條の細徑を通し、

然かも其道たるや信州に最も近く往來し得

(18)

問された。 侯は是の秘境の詳細を知り、且警備に關し慶長三年二月黑部峽口浦山村の百姓傳右衛門を大阪に召して諮 侯は傳右衛門より種々奥山の狀況を聞いて滿足された。

(下新川郡史)

越中新川郡黑部奧山之儀委敷開喜敷候謹言。

慶長三年二月

利家在判

浦山村

傳右衛門

この傳右衛門は元和年中越後の浪士數百名が黑部峽口內山村に立籠りたるをも密訴して大事に至らしめな

六

かつた功者とも云ひ傳へらる。次いで三代利常侯は寬永十七年十二月黑部奥山に精通するこの松儀氏を召し

出して諮問せらるると同時に、拔擢して奥山取締りの内役なる役儀に任命せられた。

侯は松儀氏に鏡、 砚、 扇子等を與へ、然かも乘馬まで発許して役儀の重要なること、其勞苦に對する恩遇

並々ならぬことをも表明せられた。

0

(下新川郡史)

愼不知不慮可相勤事。

山越二他國路通路之徒等者於有之、召捕可訴出候將鏡硯扇子令拜領候(寫眞文字不明)內役儀無怠慢心懸尤口外相

新川郡黑部奥山之儀見聞觀喜之事ニ候併深山之内□□等有之儀不審成事之候條是以後モ浪人山賊躰之者忍居敷壁

附乘馬尤鬼許事 寬永十七年十二月

中納言 利 常

在

判

(19)

新川郡老百姓

浦山村 松 儀 傳 右 衞

門

於是內役なる黑部奥山管理の役儀が發生して將來の加賀藩奥山廻役の濫觴をなした。卽ち奥山の濫觴も此

處を以つて其基本となすべきである。

の狀況を聞き訂し、今囘は藩吏を附して探險調査せしめられた。次いで同人に扶持米を給し、銀子、御帷子を 此松儀氏の歿後慶安元年六月、ざら~~越黑部橫斷路たる立山口の鷹畔村三左衛門父子を召し出 して奥山

黒部奥山と奥山廻り役

th 島

0

拜領せしめ奥山廻りを命ぜられた。 尚同人に鐵砲一挺に玉築等を添へて渡され、此のざら√<<

越一帶奥山

警戒を命ぜられた。

廣峭村十三郎由緒書

罷登旨被爲仰出候により同十八日ニ親三左衞門、私兩人小松江罷登玄著殿江相詰候へへ御城江被召出候、 候へとの被仰渡ニ付同年七月三日ニ右ざら~~越仕夫より信州野口村領之内馬留と申所迄右御三人案内仕り同七月 大島甚兵衞殿金森長右衞門殿被爲遺候間親三左衞門、私兩人ニ案內仕能越又黑部愛本より奧の樣子何とそ見候而歸 先年權現棣遠州濱松=被爲成御座候時分佐々陸奥守殿上下御通被成候ざら〈 こえの道筋爲御見分岡田助三郎殿 微妙院様 (利常侯) 江戸より御登ノ刻慶安元年六月津幡ニ而津田玄蕃殿御取次ニ而私、 親三左衞門小松へ可 被仰渡候

十一日小松江龍登右ざらくくこえの次第黑邊谷之様躰繪圖仕上申侯。

十二日ニ蘆峅へ罷歸り夫より黒部愛本の奧內山村へ罷越黒邊谷奧わかべ、つりがね、つか山と申所より罷歸七月二

方被下御鐵砲新持筒壹挺玉三千蘗三貫目小道具色々致拜镇難有炁致頂戴今以所持仕罷在申候。 小松に於て毎日兩度御城江親、 私相詰申候所二應安元年八月朔日私共二御銀、 御帷子拜領其上私二四人扶持

通 0 境黑部奥山にも一導の光明を點じ黎明が訪れた。當時出來上つた調査の記錄繪圖を以て吾人は黑部奥山 りである。 出發點とするのである。 熱心なる利常侯の奥山探究の態度が右の由緒書の上にいかに彷彿として居るではないか。此の結果、 この開明期に於ては戰國を去る日淺きまゝ奥山の施設も先づ攻防の戰略的意義を有する警備第 この慶安の調査のことは微妙公御夜話にも記載され て居ることは前々に記るした 暗黑

端的に表現したものには小山田覺書がある。 義を以て主としたものであつた。 松儀由緒、 十三郎由緒は多分にこの意味を持つものである。最もこれを

ノノー上日本の世界

下其外農具等被下作取に被仰付候。若水之境を何者ニ而も忍て越る者あらば打捨仕申ニ而境守仕候旨ニ而所ノ者申 越中越後山境に上ノ山と云ふ村あり三日市より入境川の源を越る也。 只今は三十軒斗ノ村也。越後關山へ出候旨足輕市島久左衞門申候。 微妙公御代に其所の百姓五人に鐵砲五

令を第二義として役儀勵行し來つた。 られたる際も、 の禁令を發布したのであるが、奥山廻役は別段其職律に變化を受けず隣國境界の警戒を第一義とし七木の禁 此後奥山廻役も二名となり三名となつて維新に到つた。寛文五年に加賀藩は林制たる山廻役を設け七木 の打捨御免の思想は當時の常識であつて未開に律する前田氏の周到なる用意と云つて讃へずばなるま 彼等の勞苦廻避も去り乍ら固く利常侯の遺戒を守つて警戒第一義を申し立て、難色を示した 後年黑部奥山に木材伐採の議起り藩廳より奥山廻役に 意見具申を命ぜ

(21)

達 したのだつたが、 以 上概述せる如く黑部奥山の濫觴は警戒第一義の下に生れ、 取締りの嚴重さは年月を閱して變らず明治開放期に達したのであつた。 中期に至つて林制上の各施設を取り入れて發

のであつた。

此 間 是の警戒第 義 も廣汎なる黑部奥山に行き屆かず各所に破口を生じ、 頻りに信州の大盗伐者や岩魚釣

黒部奥山と奥山廻り役

中島

=

行三十餘名の大登山隊を繰り出し、 の越境密行者を發見し、 周章狼狽を演じ、 大正、 昭和の登山者が人跡未倒と騒ぎ立てたる黑部奥山 遂に天明以降每夏本藩より特派の横目足軽を加ふる山奥廻役の 一帶を虱つぶし

奥山の 地 境と名稱

に探査すること」なった。

山なる言葉は隨所に使はれたる常用語であつて深山幽谷を指すもので黑部のみが専有する言葉ではない。 るに加賀藩では使用上明確に區別を付けてしまつた。 黑部奥山なる言葉は慶長三年前田利家侯の手簡に依つて現れ、 續いて各書に散見する所である。

加賀藩御定書

越中加賀兩國奧山之事。

、奥山と申は吉野〈註、白山溪谷〉より奥之分。新川郡立山を奥山と申旨。

である。然し便宜と云へども使用は立山を中心とする深山以外には越中に於て奥山と呼ばるゝものは無 Щ 即ち奥山を立山と呼んで其地方一帶を指して居ることが略ぼ首肯し得る。 又は新川郡蘆峅寺奥山なるものは、立山と云ふ御定書の稱呼より擴大して便宜的に使用せられて來たの 後世の稱呼黑部奥山、

0

である。

(22)

然

想ふに奥

境をなす山 奥山」の 々、後立山連峯、 稱呼あり從つて地境は如何。元祿十三年の「奧山御境目見通繪圖」には越中境川の奥より黑部 飛州境の山々より神通川縁りの緒谷村に至る間の山々谷々を記載して居るが

題の如く奥山の一語に一括せられて居る。この繪圖の奥山を裏書するものに當時の奥山廻りの覺書がある。

岩 城 記 鉄

御座魚釣人も相見不申候、 目筋相替義無御座候以上 よりさら越見分仕りはりの木谷大川出合ニ而いはな釣申小屋掛置魚釣申かと一兩日逗留見分仕候へ共小屋之跡も無 私共儀每々之通奧山廻り與六月十八日より境川奧、 信州境を見分仕り夫より黑部水上飛州境迄能越見分仕り八月十四日に能越候、 黑部奥山見分仕リ七月二日に罷歸り申候、 同七月廿三日

元祿六年八月十五

内山村

郞

左

衞

門

(23)

當御領境

る。 圖」にも同様に黑部峽谷より信越飛の國境を成す山々谷々さては立山連峯を畫き神通川縁りに到つて居る。 驒御境目相 江村善右衛門覺書に「一、 この覺書の範圍を辿つて見れば略ぼ前項の繪圖と一致するではないか。 奥山なる範圍を極めて自然に物語つて居るではないか。降つて享和二年の「奥山御境目見通山成川成繪 廻り申候以上」と端的に述べて、 私儀奥山廻りに而毎年奥山廻り御奉行所より被仰渡登山仕候得共是は越後信州 境川より神通川に至る間の國境線を巡囘する 尚享保-十一年十月奧山廻 由を表明して居 役太田 飛

此の繪圖は奥山廻役の使用せるもので文化以後天保年間

早月谷、常願寺谷まで記載

せられ

石 黑信

て居て是又奥山の稱呼に

括せられて居る。

黑部奥山と奥

山廻り役

中島

又文化初頭

0

奥山

御境目並谷々川筋等略繪圖」も以上に加へて片貝谷、

ある。 を中心として上流地方を上奥山と云ひ、下流地方の山々を下奥山と稱呼するのである。 吾人は文化初頭より奥山の稱呼は立山中心として擴大して使用せられたることを知る。 H られ の二字を冠すれば黑部 の測圖完成まで概して變りはない。石黑翁とても奥山廻の古圖を参照せられたる故些少名稱の變化を加 この黑部奥山に上奥山なる言葉と下奥山なる言葉と二つの名稱がある。 たに過ぎず明治に將來して居る。然し奥山の範圍は石黑翁と云へども一指を染めて居られない。 川峽谷を形成する山々谷々を指すこと」なるは前文より歸結して當然過ぎる事 これは中 必然的にこの奥山 ノ瀨平(註平ノ小屋)

明 治に入つた後は此等黑部奥山の大部分は國有林に編入せられ現在では大阪營林局署の管下に入って居

其廣袤は宇奈月より上流一帶鷲羽岳まで黑部峽谷の本支流の全部凡そ東西五里、

南北七里の重疊たる山

(24)

岳地面積七萬町歩と稱さるゝ擴大なる地域である。

る。

の見分も其水準を如何に昇げ來つたか。本項の研究の主力も此處に費さなければならな さて此 の黑部奥山 と呼ばれて居 た藩政 時代の奥山は如何なる狀態であつたか。 塞々谷々は如 何。 奥山廻役

越 である。 中 國 一政以 占圖 前 此頃 は立山は立派に記載せられ の奥山繪圖とは何んなもであつたか? の繪圖も奥山の智識もこの程度が本當のものであつたろうと思ふ。 て居るが、 其背面は全くの白紙である。 恐らくはそんなものは存在しなかつたであらう。 從つて立山 即ち越中で立山と云へば が國境 線 K 在る 長



越中新川郡松儀氏古文書 (下新川郡史稿所截)



奥山御境目見通繪圖 (元祿十三年御改

遠謀 行の繪師半兵衞に畫かしめた繪圖は吾人の耳目にも奧山記錄として最も古い所である。 侯の命を奉じた大島、 奥山をも含むと云ふ観念は常識であつたに違ひない。この蒙を啓いたのが加賀三代利常侯である。慶安元年 より出た所と認られ、 岡田、 十三郎由緒書又は微妙公御夜話等にも載せられて居ることは 金森の三奉行は蘆峅村十三郎等を案內役として奥山深く調査した記錄 前述 此の調査は侯 0 通りであ の深 又は同

の多くを數へらる」のは少なからず驚かさる」のである。 繪圖方として山の繪師半兵衞も同行せしめた。彼等一行に附隨する從者人夫も今に殘る文書上にて六十餘名 の三奉行が特派せられ、 此 0 調査隊 の規模の大は長く前後に比を見ない所である。藩より大島甚兵衛、 地元より蘆峅村十三郎、 同人父三左衛門、弟權右衛門の三名、案內役として先導し、 岡田助三 郎 金森長右衛門

彼等 ノ小 二十名を歸還せしめ一行は此處に 量を續けて中 立山下溫泉を對岸に眺めて刈込池を通過、 た。一行は藤橋を渡り黄金坂より材木坂、 慶安元年七月三日一行は蘆岬村に勢揃ひ は歩一 星 生の附近) 步二十間縄を以つて測量に從事したのであつた。 ノ谷を下り、 に達し、 Ш かりやすかんまく時 幅 一十五間の激流を渉つてはりの木峠に掛つた。 野宿 した如くである。 ざら川 した。 ぶな坂を經て彌陀ケ原野に入り、追分より轉じて、 a; との佐良越はりの木峠の調査は餘程精密を期したらしく、 (註湯川の奥) に付いて溯り、佐良峠の頂 苅安峠)を經て、ぬくい谷に入り此處にて不用 次いで再び作業を續 先づ姥堂前の 一本榎を基點として測量を開始し け黒部・ 行は針の木谷の美林には驚 大川 端 0 4 上に 松尾峠を下り 瀬 達し尚も測 4 0 企註 人夫

と奥山廻り役

中島

たのである。「左右は御材木山有。」と帳面に特筆大書した。かくして遂に針ノ木峠の絶頂に達した。

(奥山廻役喜右衞門記錄

富士山、信州松本ノ平なども詠見仕候。蘆峅寺姥堂より堺目迄但略間にて合壹萬九千百六拾五間あり。之を里に直 はりの木峠の峯但信州と越中と御境目山但此峠より信州へ下る。北へ向つて下る也。但此峯より駿河國

殘念である。 た繪崗は相當に立派なものと相像さるゝが、 示して居る。 口村太郎に出會つたと記して居る。この越境の測量はこの調査の重大で且つ完璧を期したものなることを明 行は峠麓の馬留に到達して河北岸の栂の大木を目印として漸く測量の終點と定めた。帳面には此處にて野 彼等一行は針ノ木峠の頂上たる國境に止まらず、尚も測量を續けて、峠を下り信州路を野口村に向つた。 す但三拾六丁〆。八里三拾壹丁貳拾間有。 此の一行に繪師牛兵衛が同行して見取繪圖作製に當つたのであるが、 今日僅かに手元に殘された當時測量の貴重なる成果書の一節を揚げて當時の人々の苦心に敬意 (後略) 此の記念すべき繪圖は今何處に探し求むべきや定かでない この時利常侯に呈 され のが

(26)

奧山迎役喜右德門記錄

を捧げたい。

越中ノ御境山の名目針ノ木峠と云ふ

信州ノ御境山の名目信濃峠と云ふ。

右の山境正峯より但貳拾間總ニ而三三三+三三三+三三三+三三二+三三二メ四拾八總ノ內七割ハ雪アリ此所右

屋壹問有但河北ニ有之三三三+此所對に5有也三三三+二此所河北杣ノ板小屋三間有並河南ノ方より小谷出ル三三 て〆五千拾六間有り是を里に〆貳里拾壹丁三拾六間有。 三此所北に少し平有三三十三二此所左右に平有二二十同斷下りは右の方に小谷あり二十此所ニ野口村ノ杣共ノ板小 に丸ヶ岩屋といふ岩屋有三此所川ノ南に平有三+一此所下れは左より出る谷川有二三二此所迄川北ノ方は平也一+ 有二二くたれば川左に平有一+三三川左り平あり三+一此所下ル右手ノ川詰に小丸山有三三二+三下れば川ノ左手 堺峯但峠より五町程下ニ則雪ふゞ通ル也おり詰則是ニ泊リ所あり。|||三|三+||三三+||三三+此所くだれは右ニ平 +三三三十此所馬留といふ所也。是迄〆貳百貳拾八繩有り河北に栂叉ノ木ノ大木有越中堺より信州馬留迄略間

大島甚兵衞樣御內侍

74 郎

殿

才 久 德

門

郞

郎

長

衞 殿

岡田助三郎様御內待

六 郞

兵

衞 門 助

右

長 新 角

元

金森長右衛門樣御內侍

(27)

六

仁

六

助 助

兵 殿

繪師、

富山

华

十三郎、弟

權 Ξ

右

衞

門

蘆峅村

左

衞

門

善 大 澤 右 I. 次 作 門

町袋村

木: 村 助

漏 寺村三郎右衙門

長 平

一つりかね」(註、鐘釣か)、「つか山」まで遠く調査して七月二十一日歸國、 との一行は七月十二日蘆崎寺へ歸り、再び行路を改めて黑部峽口方面愛本より山又山を越えて「わかべ」、

加賀小松城なる利常侯の許に委

ざらく一越の次第黑邊谷の様躰繪圖仕上申候」と書いて居るのを見ても、 曲報告した。今日彼等一行の愛本の奥を調査した記錄は知る由もないが、 此の方面も相當に測量もせられ、 蘆峅村十三郎由緒書に依つて「右

繪圖も出來上つた事と推察せらる。利常侯は只一囘の此の調査には滿足せられず屢々繪圖を修正して實地に

適應する樣に努力せられた樣である。其後潛廳に於ても是の意を奉じ頻りに繪圖を重修して國境の紛爭に備

承應の御繪圖、寬文の御繪圖、又は延寶の御繪圖の名稱が隨所に發

へた。藩公用の公文書に正保の御繪圖、

(28)

見されるが、是等繪圖も現在は名稱を聞くのみで吾人の耳目外にあるのは遺憾至極である。

奥山國境の諸相を闡明にせんと努力した。元祿十三年三月二十三日奥山廻役三名を藩廳に召し出して、 修正せよと命じた。此の時彼等は奥山御境目見通繪圖なる圖略と覺書を呈した。 用場奉行野村五郎兵衞等の連署にて奥山御境目山々の實相を諮問し覺書を呈出せしめ、 を脱するに至らなかつたので、 化した事は云ふまでもない。 繪圖等の大修正を行ひ速かに國境問題の囘避解消を決意した。 寛文年間加賀藩は白山所屬の争議に敗れ、境界問題の如何に解決至難なるかを痛感した關係上、 この奥山は慶安以來奥山廻役等に諮問して修正 元祿十年より頻りに奥山廻役を召致して其準備に着手し彼等より覺書を徴 於是國境線の一番不確實なる黑部奥山 に修正を重ねたが、 御繪圖に誤りあらば 未だ想 今までの が 像圖 問 題

(奥山廻岩城記錄)

、越後境寺山ハ越中大平村を東之方ニ當リ申候。此間道程大概三里程御座候。

同下駒ヶ嶽は寺山ゟ南東之方ニ當リ申候。此間道程大概七里程御座候。

同犬ケ嶽ハ下駒ケ嶽ゟ南ノ方ニ當リ申候。此間道程大概壹里程御座候。

同ゑぶりケ緑へ黒岩ケ嶽を南ノ方ニ當リ申候。此間道程大概貳里程御座候。

同黒岩ケ嶽は犬ケ嶽を南ノ方ニ當申候。此間道程大概壹里程御座候。

黒部奥山と奥山廻り役(中島)一、同はちケ嶽はゑぶリケ嶽を南ノ方ニ當リ申候。此間道程大概壹里程御座候。

元

、同上駒ケ嶽ハゆきくらケ嶽を南ノ方ニ當リ中候。此間道程大概壹里程御座候。

、飛驒境鍋ケ嶽ハ飛州信州境鷲ケ羽嶽ゟ西ニ當リ申候。此間道程大概貳里程御座候。、越後信濃境鑓ケ嶽ハ上駒ケ嶽ゟ南ノ方ニ當リ申候。此間道程大概貳里程御座候。

一、同寺地山ハ越中有峯村ゟ南ノ方ニ當リ申候。此間道程大概四里程御座候。一、同上ノ嶽ハ鍋ケ嶽ゟ西北ノ間ニ當申候。此間道程大概三里程御座候。

、同高幡山は越中長棟村を東南之間ニ當リ申候。此間道程大概半里程御座候。、同から尾峠は有峯村を西南之方ニ當リ申候。此間道程大概壹里程御座候。

同刀双山ハ長棟村ゟ西北ノ間ニ當リ申候。此間道程大概半里程御座候。同高つふり山ハ長棟村ゟ西南之間ニ當リ申候。此間道程大概半里程御座候。

同小かすみ谷は猪谷村ゟ東之方ニ當リ申候。此間道程大概貳里程御座候。同大かすみ谷へ越中猪谷村ゟ東之方ニ當リ申候。此間道程大概貳里半程御座候。

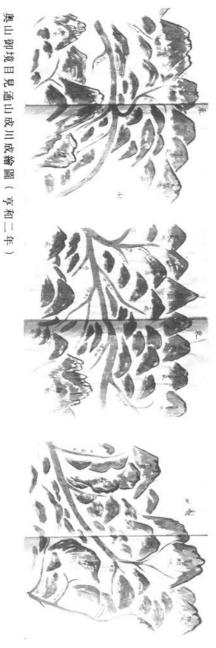
同くしりか谷は猪谷村ゟ東之方ニ當リ申候。此間道程大概壹里半程御座候。同てやくこ谷ハ猪谷村ゟ東之方ニ當リ申候。此間道程大概壹里三十丁程御座候。

、同むしなか尾は猪谷村ゟ東之方ニ當リ申候。此間道程大概壹里程御座候。

、越中有峯村ゟ信濃境鷚ケ羽嶽迄大概拾壹里程御座候。、右書上甲山々名所之義所之者並近征之者茂右之通唱申候。

同大三つ頭山ハ猪谷村が東南之間ニ當申候。

此間道程大概半重程御座候。







奥山御境目文化御繪圖

同有峯村な飛州江越申和佐府道な信濃境迄条通。

右川名之儀所之者並近在之者茂唱申候以上。 柳澤川北又川兩川共ニ越中山を流出末ニ而落合黑なき川と申候。ゆきくらケ緑を南西之間ニ當申候。

元祿十三年三月廿九日

不 破 平 左 衞 門殿

小

塚

善

左

衞

門殿

御横目様御兩人御出御奉行様と御列座 野 村 五. 郎 兵 衞殿

Щ П 源 太 夫殿 小 绘

原

밥

右

衞 門殿

佐 藤 仲 左 衞

御政作率行

御取次

齋

藤

辰

右

衞

新川郡奥山廻 太田本江村 內 Щ 村 宗 Ξ 郞 右 左 兵 衞 衞

門

衞

下梅澤村

īfī

郎

門

同 同

繪 師 喜

長 45

次

郞

同

三

との喜平次は慶安の時の繪師牛兵衛の子である。)

註

黑部奥山と奥山廻り役

物 なし い御算用場の詮義振りが窺はれるではないか。 國境の概念を得るのにかくも慎重を期した。 繪圖に

付いては再答申が呈出された。

(奥山廻岩城記錄)

御國境目之儀二付御尋之品々率得其意御假繪圖拜見仕候。

一、御假繪圖ニ記御座候飛州境上ノ嶽少相違ニ御座候ニ付直シ申候。

鑓ヶ嶽よ信州江越申道之儀御假繪圖:道形無御座候得共先年三郎左衞門信州江龍越申砌此道を罷通り候併さら 御假繪圖ニさら越道形御座候得共相極たる道筋ハ無御座候、私共度々相廻申砌ハ右之道筋大概能越候慥成道ハ 無御座候。

御假繪圖ニ記御座候飛州境上ノ嶽ゟ信州境山々越後境大ケ嶽迄御境目峯通リ候由承傳見覺申候得共双方出合之 所と極たる義ハ無御座候。

越同事ニ極たる道筋ハ無御座候。

御假繪圖ニ記御座候越後境下駒ヶ嶽を同寺山迄ハ客ヲ限双方をかせき仕候ニ付御境相知申候。

一、御假繪圖ニ記御座候越後越中境川之山際ゟ同海際迄相達御座候ニ付直シ申候。

飛州境上ノ嶽ゟ越後境犬ケ嶽迄之内ニハさら越丼鑓ケ嶽ゟ信州江越道之外他國江越道無御座候。併飛州境上ノ

大平村よ越中越後境海際迄往還道之外極りたる道筋ハ無御座候得共川原之義ニ御座候故何方よ茂相越申候。

儀へ無御座候同下駒ヶ嶽を大平村迄之内ニハ他國江越道ハ御座候得共極たる道筋へ無御座候。 嶽の間丼越後境上駒ヶ嶽を同犬ヶ嶽迄之内ニは他國江越申候得共可罷越所可有之様ニ率存候然共私共終ニ越申

(32)

飛州境上ノ嶽ゟ越後境海際迄之内大平村と荒澤川落合境川江流申候此外他國ゟ流申川無御座候以上。

元祿十三年四月六日

不 破 平 左 衞 門殿

塚 善 左 衞 門殿

1

野

村

Ŧi.

鄓

兵

衞殿

奧山廻岩城記錄

芦峰村ら立山泰迄九里八町と先規ら申傳候。

立山客を越中信州ノ境はりの木峠迄私共度々能越候道程大概九里程可有御座と添存候。

、越中境村を越後玉木村迄三百拾三間內貳百六拾六間境村を川端迄。

座與奉存候此兩所道程先年三郎左衞門信州江能越候二付相考記申候。

越中はりの木峠な信濃國大出村迄道程大概三里程並越中信州境鑓ケ嶽な信濃國細野村迄道程大概四里程可有御

但越後之內丁間打申樣難仕境村源六方を見方二而申越候以上。

但川筋之違とる過不足御座候四拾七間境川之內ゟ玉木村迄。

元祿十三年四月六日

黑部奥山と奥山廻り役 中島

> 新川縣奧山廻 内 Щ 村 Ξ 鄓

左:

衞

門 衞

同 同

下梅澤村 郞

右兵 衞

門

太田本江村 市宗

量

喜

新川郡山廻 內 Щ 村 Ξ 郞 左 衞 門

太田本江村 宗 兵

衞

市

郞

右

衞

門

同

小 善 左 衞 門殿 不

破

平

左

衞

門殿

野 村 Ŧi. 郞 兵 衞殿

當時

の奥山の智識を傾到した前記三文書に於て注意せらる「點は、

此の廣大な奥山數十里の間に於て驚

嶽より北方鑓ケ嶽迄は針ノ木峠附近を除いてはほとんど山內國境の樣子が彼等奥山廻役にも判つて居ない樣

である。奥山御境目見通繪圖にしても立山、藥師嶽、鑓ケ嶽等よりの展望想像圖に過ぎない事に氣が付くで

あろう。是の圖に於ては鷲ノ羽嶽より北へは中嶽、赤牛ケ嶽、大打ケ嶽、眞砂ケ嶽、はりの木峠、

がきケ嶽、上犬ケ嶽、不歸ケ嶽、鑓ケ嶽と十一個の山名を見るに過ぎない。谷々でも針ノ木谷川、柳澤川谷

水上谷、犬叉谷位いのものである。

くべきや如何に困惑したことか察するに餘りがある。

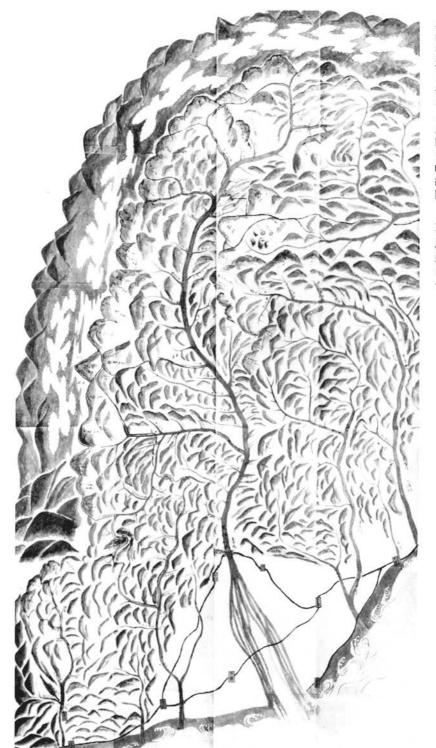
毎年奥山廻りを爲す國境警備の役人にして然り、落廳の役人繪師等も如何なる概念を得、

如何に繪圖を畫

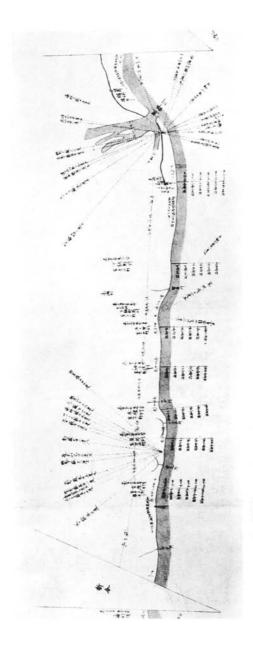
奧山廻岩城記錄

(前略) 右書上申御境山に方角並に道程に付有峯村より信州境道のり立山条よりはりの木峠迄道のり蛭谷村より

後立山、



奥山御境目幷谷々川筋等略繪圖 (文化初年)



新川郡海岸分間繪圖 (嘉永五

信州境鑓ケ嶽迄道のりの義右山々難能越山數多く御座候に付方角道のり等難岡由達而申候へ共いかにも左樣に可有 乍去大概申候へ左なくては御繪圖之義に付御延引之儀成不申候間其方共申段右御率行様方御聞屆候間大概に申

この文書は當時の模様を手記したもので、 奥山廻役の告白に奉行の方でも心得て繪圖の製作上大概 の想

が然し何しても幼稚 る。 JE. 始末で、當時の奥山廻役まで前記の有様では他に方法が無かつたと云へやう。是後も繪圖類は幾度か加筆訂 である。慶安以來手を盡した加賀藩の奥山繪圖にしても、元祿時代には僅かに想像圖を以つて滿足して居る でも好いから答申せよと命じて居るあたり、 せられて行つた如くである。奥山廻役に繪圖方御用として褒美の代官役を授けられたのも此の時 愚直なる彼等は奥山の繪圖に付いては大いに責任を感じ努力を捧げ相當の貢獻した事は間違ひ な智識と測量的の常識皆無の爲め常に見取圖等も百年一日を具現して居るのは止むを得 如何にも當時の狀況を彷彿として吾人に興趣を起さしめるも は無 からであ

(35)

他 の記録も見聞して居ないのが残念である。 **繪圖に關しては吾人の手許に元祿以降享和に到る迄の約百年間のものが存在して居ない。又其間の測量其**

ぬ事であらう。

L の事あり、 此 0 間 10 Œ 寛保元年にも盗伐の事あり、 德 车 にははりの木谷に尾張者入込大盗伐の珍事あり、 安永四年には上奥山にて盗伐を發見し犯人たる信州者捕縛の事 享保十一年には黑部奥山より

黑部奥山と奥山廻り役

中島

三

以南では折谷、 享和圖を一覽してや、失望に近いものを味はされる。 て來た。是れ等の時代を通過して出來た享和二年の繪圖こそ吾人の期待して居るものであるが、 ガ谷、 ノ木峠以南でははりの木嶽、 杉谷、 の事件相次いで起り奥山の地境も好むと好まざるとに係らず明かに、せざるを得ざる狀態となつ 岩苔谷、 ジョ ウグウ谷、 中 織谷、 黑岩谷、 折嶽の新名稱を見出すに過ぎな ヌクイ谷等であり、 ヒロ川原、 大森石等の名稱が出現して來て近代の名稱の起源をなし 以北では一ノ越谷、 山名に於ては僅 S 但し谷 かに後立山 前山谷、 スは相 方面 當に調査せられ 黑なぎ川、 には錫 杖ケ緑 樫薙、 この期待も を現出 ノリク 針 ラ木

石黑翁は文政二年に藩命を受けて三州の測量に着手し文政七年三月「三州郡分略圖」を成就した。 繪圖では文化年間の よく調査せられ 谷々は詳しく記入せられ、 籍である。 六年との略圖と略圖 此 初年の作「奥山御境目並谷 の享和繪圖即ち「奥山御境目見通山成川成繪圖」 此 の後加越能の地闘は長く翁の測圖に準據したものであつた。 て後立山方面の暗黑界を除けば、 の基本をなす闘籍を清記して差し出したのである。 「新川郡繪圖」や、 嶮絕一 々川筋等略繪圖」 世に鳴る十字峽附近も誤り乍らも朧氣に記入せられて居る。 有名な越中の數學家石黑信由翁の「三州測量圖籍」十二冊である。 である。 略ぼ近世の地圖に接近し來つて居るのを見る。 に續いで吾人の手許に在る最も關心を繋ぎ得る繪圖は 此の圖に於ては山名は赤鬼ケ嶽の出 即ち今に殘る郡 明治六年の越中國全闘 分略 圖と三州 其他にも仲 現位 此の以降 8 其後天保 测 量圖

て居る。

0 縣下概測圖も甚しきはずつと降つて大正七年の富山市中田書店より發行の富山縣全岡までが翁の製圖に準

じて居る。

以 上の諸繪圖 に依り、 彼等 0 奥山諸手録に依つて、 彼等は奥山廻り常例道である信越飛境の Ш 徑 8.

嶽なりや蓮華嶽なりや、 稱 を存し乍ら實在を疑問視せられた後立山とは何處の山頂を指すものなりや、 嚴重 つて吾人は今手許に保存せらるゝ繪圖記錄に據つて些か今昔を比較對照し、 なる山 廻りを毎年實施 然して大蓮華と白馬との名稱の異動等を研究して山岳諸家の批判を乞ひたいと考 ì 其奥山の智識も略現今に近きものなることを知るのである。 又信越飛の三國の境界 併せて古來より立派に は鷲羽

并

(37)

る

居 在 源頭に在る朝日岳を指すものではなからうか。 に變りがない。 Ŀ 心るので 駒ケ嶽は古來奥山廻の は 名稱 越中東境なる後立山々脈北端より順次南へ筆を進めやう。 ある。 が取り 違 是等は些 ゑぶりか嶽は現測量部五萬分の一圖上にあるエブリ山には該當せず、 つて居る。 細 必らず登山して北方の山々御境目見分の見渡し場所として重視せられ な事 此の取違ひは なが 6 間 遠が 元祿 正當化 の繪 次の赤男山は變りない様であるが、 して居 岡より現今に至る迄測量部のみが る一例で困つたものである。 寺山、 下駒ヶ嶽、 雪倉ケ嶽と鉢ケ嶽とは現 黑岩ケ嶽は今も昔も名稱 取違ひ 北叉谷の支流惠振 鄠 倉ケ の記入をなして 嶽の南 た所である。 速る 0

黑部奥山と奥山廻り役

(奥山廻岩城記錄

故峯通御境目を見渡罷歸申候 上駒ヶ嶽へ登り下駒ヶ嶽ノ方御境目を見通し候而夫な鑓ヶ嶽へ罷登りがきケ嶽、 後立山此山々難能

嶽 K 國境線をなして屹立し、 越中越後信濃三國の境として標高も最高を誇つて居るが、 を第一義とする奥山廻りには、 峯々を南方へ

點檢して行けば、 鑓ケ嶽より劣る點であろう。 くらが続より 最も高 0 なだらかで隣に屹立する峻峭な鑓ケ嶽と比 然らば此 西方に記入されて居るのには少なからず異様に感ぜられる。 鑓ケ嶽、 測量尚籍である。 く且三國の境として有名なものであつた。この上駒ケ嶽が古來平凡に取扱はれ の上 南 在上駒ヶ嶽西。」と出て居て圖籍に符合して居るのである。 駒ケ 方に當る。 嶽の名稱 是迄三國々境として有名な鑓ケ嶽とそれに續く不歸ケ嶽は國內の山岳として これ等の繪圖では上駒ケ嶽の南腰に三國々境が記入され、 但此道大が 上駒ケ嶽を三 は現今の何れ 白馬岳に於てのみ廣大な見通し云々が可能であるからである。 必然的に白馬岳へ其指頭は向くのである。國境線上の峯 一國の境と認め圖上に表はされたものは石黑信 の峯に該當するだらうか。元禄十三年の覺書 べて少からず見劣りする點であろう。 上駒ケ嶽と呼ばれた時代は却つて其 文政末年の藩撰とも見るべき三州 吾人は現在 南方へ小連花、 8 0 て死 由翁の三州 々山々の見通し見分 0 は國境 の五 E た源 南 白馬岳は現在 萬 駒ケ嶽 分嵐に 因 方の 線 地 大蓮花が は 郡 0 理志稿 鑓 はゆ 分略圖 南 共 駒ケ 望が ケ緑 Ш

事會是 不量一樣 大重犯 清水で、半

三羽沙量圖籍力以A、



6 尚又嘉永年間 0 「新川郡海岸分間 繪圖 の中の入善町堂又川落口左岸より 0 展望方位に上

駒ケ 大蓮花なる名稱 かる K 除ならずと見えて、「元祿上記云。 き 御 Ш る 箇所としても著名なものであつた。天保の信濃國全圖に見ゆる鑓ケ嶽なる名稱も唯一の越中側 n 嶽 山 144 徑を有する點でも古來有名であつた。 點に於て此の著名の名殘と見なすべきであろう。 るものに相違ない。この鑓ケ嶽は古來三國の御境目に聳立する名山として、繪圖上に於ても山 至つて石黑信 さて上駒ケ嶽を白馬岳とすれば、 一線は白 れ以 國 一徑なる由を傳へて居る。 辰廿五度九と記入せられて居る。 籍 降 共先年三郎左衛門信州江龍越申砌此道ヲ K 一馬に、 於ては の越中各地圖は皆この繪圖を踏襲して居るので、 由 小蓮花は杓子に、 1: 翁に依つて越中 駒ヶ嶽の南 然か 降つて三州地理志稿には肝心の鑓ケ嶽は國内に記し乍ら、 16 方へ ・國内の山岳として取扱はれて居る。 鑓ケ嶽有間道通信濃州不有定路」と記して居る。 國 11 之より南に連る文化迄の各繪圖に見ゆる鑓ケ嶽は當然今も鑓ケ嶽と呼ば 大蓮花は 蓮花、 此れ正 「の御境目なる名山と云ふ觀念をも受けついだのである。 前揭元祿十三年覺書 鑓 大蓮花なる名稱が出現 しく白馬岳を指し示して居るではない に當てはめざるを得ない。 能 鑓ケ嶽は又越中 通り候併さら越 明治大正までも三州の境目は上 鑓ケ嶽より信州江越 同事 小川 して居るから、 然らば在 = 溫泉より山又山を越えて信州 極たる道筋は無御 於是古來 來の鑓ケ嶽なる地 かっ 有名 是を以 申道 此の 是の山 な鑓 儀御假繪圖 つて 鑓ケ嶽が文政 座候 力 駒ケ嶽と記入せ 然か 嶽 考 道のことは削 稱呼と共 回りの ふれ なる名稱 と隨 に道 \$ 點 ば、 鑓 は テ続 年間 形無 通 通 見 Ŀ

2 世

(39)

は

と奥山廻り

役

rh

島

Ш 名

の變轉等

や不歸ケ嶽なる古名稱を削除出來ず、 黑部奥山と奥山廻り役 中島 申し譯け的に國內に發立させたのは頗る不可解である。

尚研究の必要がある。三州測量圖籍が大蓮花と云ふ名稱を重視して採用した事は其頃すでに奥山廻役や地方 人に依つて實際的に使用せられて居たと見るべきである。文政以後は蓮花山として通用語となつて居る。

(下奧山御境目廻御用方控) 天保十四年齋木有次郞手記

同十七日天氣也、朝六つ出立いたし蓮花山江登り他國山信州ノ御田地直下に見申候人家も見申候。

山之義は不及申御墳目筋見分仕候而何も大悦ニ奉存候。

は山崎村權之亟、 (下奧山日記) 安政三年竹內常右衞門手記 (前略) 七月四日晴天、麓の小屋辰上刻出立已ノ上刻に蓮花山頂に至る、松原、 同茂兵衞、蛭谷村彌助、 山女村小兵衞也。快晴とは乍申煙雲兎角不晴頂に休むこと一時斗にて漸 竹内、 脇坂、伊藤也。召連候杣

(40)

く御領御境筋見ゆる依而下山。

(後略)

花卽白馬とまで進展したのではないか。又奥山廻りの登山も同様藩政末期には、 との蓮花山が後年に至るに從つて、三國の境と云ふ觀念と共に實際の三國の境上駒ヶ嶽に結び付いて大蓮 上駒ヶ嶽即大蓮花(即白馬)

ふ様になつて居たと思ふ節々がある。

この頃には上駒ケ嶽の高度も相當に認められて居た事と思ふ。大

蓮花が越中人士に膾炙した所以は、鑓ケ嶽と云ふ古稱以來三國の境をなす最高の峯と云ふ觀念の傳統が、上 んでもてはやしたと汚ふべきではなかろうか。越中の大蓮花卽ち信濃の白馬とは近く誰れしも疑はない所で 駒ケ嶽と云ふ小さげな名稱や嚴密な意味の國境地點などを超越して、此のおほらかな大蓮花と云ふ名稱

後世不動なる筈なるに、 是の大蓮花は遠く二百七八十年以前より山廻り役に依つて登山せられ委しく調査せられ、共名稱、 かくも時代に依つて變遷するとは質に不可解千萬である。變遷しないとしても其位 位置。

置が前後左右することは矢張り不可解事である。

部 等に依つて後立山への登路の記入や、 三年の前掲 山廻役にさへ「罷越し難き」山々と云はれ、永く暗黑界として繪岡上に明記を許されぬ所であつた。 分であつて、 さて鑓ケ嶽より以南即ち後年の大蓮花より以南針ノ木峠までの間の狀態は、藩命を以つて毎年踏査する奥 の覺書を見ても此の方面の記載が全然脫漏して居ることに注意せらるへであろう。後年三州圖籍 文化時代までの各繪圖にも劣らぬ不明振りである。 展望方位等が觀測せられたものゝ、 この圖籍が基本となつて長く後世の地圖 谷々川筋は依然として「罷越難き」

(41)

をして後立山方面を想像圖に甘んぜしめたのであつた。

境目並谷 後立山を堀起し、 針ノ木峠 、錫杖ケ 先づ元祿圖なる奥山御境目見通繪圖を見やう。鑓ケ嶽の南へ不歸ケ嶽、 嶽を現 に到る間 々川筋等略繪圖(文化奥山圖と略稱 出 針ノ木峠に至つて居る。享和の奥山御境目山成川成繪崗(享和圖と略稱す)、 には僅 して居る。 かに栂山、 三州測量崗籍 7 スバリなる名稱を新らたに現出して居るに過ぎない。 (圖籍と略稱す)すらも後立山に到る間に赤鬼ケ嶽 すし、 新川郡繪圖 (文化新川圖と略稱す) に於ては不歸 上犬ケ嶽、がきケ嶽と列り次いで 此 文化の奥山 を獨立 の以後は測 ケ嶽の次 さ

黑部奥山と奥山廻り役

部 の五萬分の發行さる」まで別段の變化が無い譯である。

る。 頂上の平坦に畫かれてあるのは、北方より見通したものとしてよくこの間の形狀を示して居るのである。 方へ錫杖ケ嶽を現出してからは、やゝ北の一突起へ移動されたと覺しきものがある。 して現在もかへらずの難所を有する二八一二米附近の山頂を主奉とする一帶を指したものであろう。 ケ嶽は 鑓 之を現在 ケ嶽より南へ續く不歸ケ嶽とは現在の何處か。元祿圖、享和圖、文化二繪圖に依れば國境を成す山岳と 又测量圖籍以降 に求むれば不歸谷の源頭をなす不歸嶽とせずばなるまい。 の諸地圖では上駒ケ嶽、 小蓮花の中間西方に 畫かれ、 國内の山として屹立して居 元禄の見取圖に 中頃 依れ

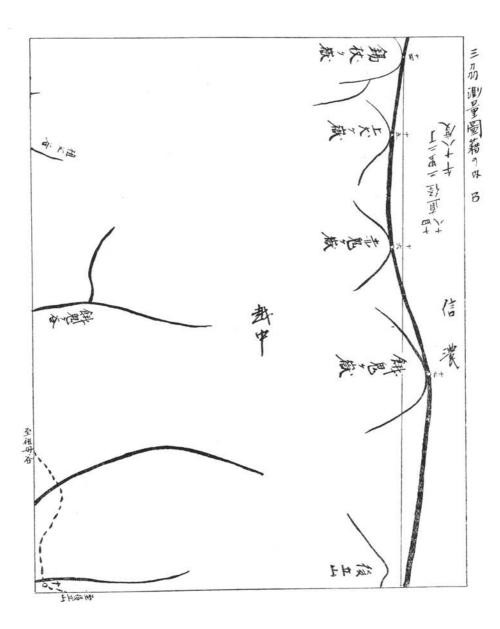
境に並べ立てたのであるが、 2 の時代に依る變化は一寸解決するに困難であるが、 後世事情判明と共に削除もならず合理的に國内へ移轉したものと見るべきであ 元祿以降の奥山事情の不明な時代は無闇 四山 名を國

る。 指して居るものと思ふ。文化奥山圖に依れば此の山にはミカゲガ嶽なる別名の存在して居ることが 遠望は此の三角點を主峯として幾つもの峯を持つ仲々大きい根張りを見せて居る。次に上犬ケ嶽は唐松岳を n る。 享和 次に南に連るがきケ嶽は営然現在に名稱を存する餓鬼谷の源頭なる五龍岳を指すことは異論の無い事 過以降 不 歸ケ嶽が國內 の錫 一杖ケ嶽は前述の通り不歸ケ嶽と共に二八一二米又は其附近の一峯を各々指したものと思は 0) 山として認められた圖籍以降は必然的に二八一二米の峯のことゝ考へる。 知 の山 らる

C

不

ば 南



ある。 現在の餓鬼山は五龍なる名稱の出現に依つて持つて行き所の無い餓鬼なる名稱をたまたま頂戴したに

過ぎないものであろう。

る後立山は當然鹿島槍ケ岳なりとするに躊躇しない。果して鹿島槍ケ岳を古來より後立山と目し來つたか。 求むれば其方位より斷じて大黑五龍となすに憚からないのである。 **皮五、と立派に記るされてこの二山は全然別の山なることを明記せられて居る。今この二山を現在の地闘** 此處に注意すべきことは文化新川圖以降には上犬ケ嶽と餓鬼ケ嶽の間に別に赤鬼ケ嶽の出現して居ることで る」のである。 ある。これ等は別名の古來存在した事を知つてか知らずか、大黑岳の如き小突起に此の名を命名したと思は ゲガ嶽、 文化奥山圖に依れば之の餓鬼ケ嶽に赤鬼ケ嶽なる異名の存在することを知る。享和圖を見れば是等のミカ 赤鬼ケ嶽等異名の方が用ひられて居て、 新川郡海岸分間繪圖中黑部川々口よりの展望方位に、餓鬼ケ嶽、巳二度、赤鬼ケ嶽、 上犬ケ嶽、餓鬼ケ嶽なる本名が見當らないのである。 餓鬼ケ嶽を五龍とせば、 其南方に聳立す 辰廿八

元禄十一年奥山廻記録に

(奥山廻宗兵德留書)

(前略) 藥師ケ嶽より丑ノ方ニ立山。丑寅ノ方ニ後立山。 寅卯ニ眞砂ケ嶽。卯ニ火打ケ嶽。

も足らないが、 かく後立山を目測 後立山 した方位を記するのである。 なる山巓を認識して居ることに注意を拂ふべきである。又方位其ものも相當現位置に 尤も此の時代の幼稚極まる磁石を以つてしたものは 信用

黒部奥山と奥山廻り役

774 774

近いものを指して居るに於ておや。

享和圖、文化新川圖も同様である。文化奥山圖の如きは後立山の主峯と外に三峯も南へ連ね針ノ木峠に到つ 連列して居るが、 て居る。此等は吾人に强い示唆を與ふるものである。 ば、この一帶は鹿鳥槍の一尾根の如き感を覺ゆるではないか。さすれば此の間の無名連峯は長く便宜上後立 れ來つた。實際に於ても赤澤岳以北鹿島槍ケ岳までに拔群の山峯を見ない。 年七月石黑信由翁は立山を測量せられた。 となつた遠因を作つたものであるまいか。この後立山を明確に決定したものは三州測量圖籍である。 山に一括稱呼せられて來たことは疑ひない。之れが又後年に至つて後立山なるものが何れの山を指すか不明 さて繪圖の方の記入振りは如何。 其最高峯のみ後立山と呼ばれ、 元祿圖に於ては後立山を大きく畫き、南方へ一二の支峯を畫いてある。 翁は頂上に於て各山々峯々の方位を決定せられて居るが圖籍に記 残餘のものは無名の山として從屬的 即ち古來針ノ木峠以北がきケ嶽の間には數座 殊に針ノ木峠に立つて北望すれ に後立山 の名に 0 文政四 包含さ Ш なが

るされて居るものを掲げて見やう。

立山ニテ視ル。

餓鬼ヶ岳 ヶ 岳 子十九度半

劔

寅九度 後 I ブリ岳 立. Щ 寅十九度半

辰廿一度 針ノ木南又 已十九度半

(以下略)

地

滅

岳

後立山の位置を右の方位に依つて計つて見れば正確に鹿島槍を指すではないか。

大 薬師ケ嶽にて視る。 蓮 花 丑十九度半

立. 後 立 Щ Щ 寅三度

針 木 峠 寅十度半

赤

鬼

岳

丑三十五度半

丑十六度半 劔 ケ 岳 丑七度半

との方位も略鹿島槍を指して居るではないか。 針木南峯 卯初度 (以下略) 是の三州圖籍には又後立山への登路をも記入して居るので

ある。

東谷山の西方尾根を越えて東谷即ち當時の後立山谷に下り谷を横斷して牛首山の一角を絡んで鹿島槍ケ岳即 嶽道と分岐し猫又山の一角なる猫又峠を越えて祖母谷へ下り、次いで祖父谷より南越を經て餓鬼谷に入り、

略述すれば即ち小川温泉を起點として小川を溯りコイド峠を越えて北又谷に入り、

樫薙谷にて上駒ケ

ち後立山に登るものである。尚注目すべきことは圖籍に畫かれて居る後立山の形狀が北尾根を有する鹿島槍 かれて有ることである。信由翁は實際にとの後立山に登山せられたか疑問であるが、 圖籍

には相當多方面の方位が觀測せられて居る。 黑部奥山と奥山廻り役 中岛

其もの

ム山容に

畫

1751 355

(三州測量圖籍

後立山ニテ視ル。

劔 立. 嶽 Щ 度 别 Щ 申廿四度

信州槍ケ嶽

中

岳六

花 方

子廿度一 未十五度 酉十六度五 築 前 ヶ 嶽

7

赤 牛ケケ 嶽 未廿一度

白 Щ 申十六度五

加州 大

信州淺間山

辰六度

餓 驚 鬼 33 嶽 嶽 未十三度五 子廿五度五

駿河富士山 妙 香 Щ 已十五 丑廿五度五 度

赤 鬼 ケ 岳 子十八度

圖には果然此の後立山登山路が記入せられて居るのである。之を以つて見れば六十餘歳の老齢 候」と記錄は元より繪圖上にも記入せられて來たのである。然るに文政に入つて石黑翁の圖籍 成就以來の繪 に鞭つて钁鑠

古來より文化年間まで是の後立山を中心とする連峯は「此邊後立山に至る迄ノ間至嶮岨ニ而通路相成不申

たる翁が或は初登攀を勝ち得たのかも知れないと想像せらる。奥山廻の見分も此の道を經て後立山まで間

なく伸びて來て居る。

(下奧山御境目廻御用方控) 天保十四年齋木有次郎手記

七月十二日晴天也。踊場出立、がきの谷道下り霊辨當、

登り夫より後立山谷下り此道も雨天の節は通

(前略)

四六



尼帝中交拝。へを

るものである。

後立山登山は積雪の爲めに挫折したものゝ彼等の見方の道筋は旣に後立山に達して居ることを證するに足

らば、 已八度二。上駒ヶ嶽、辰二十五度九。(以下略)」なる記入がある。今同海岸に到つて右の方位を測定するな 村堂又川落口左岸よりの展望に 過ぎなかつた。然して結局 17 である。藩政時代にかく判然として居た後立山も禁斷鄕として黑部奥山深く聳立せる關係上、 とを斷定すると共に、以南針ノ木峠までの峯々は一括して後立山なる名稱に包含されて居たと附 0 つては越中人士にも忘れられ遂に其の山名すら宙に迷ふの狀態に立ち到つた。初期「山 後立 Ш いておや。 現實は誰れ の名稱を巡つて相當討論 後立山と名付られて鹿島槍ケ岳、餓鬼ケ嶽と名付られて五龍岳が吾人の目標に聳立するのである。是 Ш は鹿島槍ケ岳なりとする資料に嘉永五年の新川郡海岸分間繪圖がある、 以上に依つて古來使用せられた後立山なる名稱は鹿島槍ヶ岳に對して附せられ しも否定出來ない。 五 龍がゴリウ の花が咲いたのであるが、 「藥師ケ嶽、 殊に同繪圖は米穀運送の船舶に依つて藩政時代實用に供せられたるものに (後立) 午九度七。大日岳、 に通ずる故を以つて後立山は五龍岳ならんと云ふことを以 何れもコジツケや無智な地方人の言説を布衍するに 午三度三。後立山、 との圖中、 已十二度五。 岳」誌上でも是の後 入善町 たるもの 明治大正に入 言したいの 餓鬼ケ嶽 附近吉原

(47)

黑部奥山と奥山廻り役

中

島

鹿島槍の如き高峯を措きて北方に偏り而かも比較的低少なる此峯に與ふる事となりしか云々。」と大疑問を發 して居らる」のである。之れは實に達識であつて敬服に堪えない次第である。 つて結着となつたのである。但し此當時と云へども具眼の士は「ウシロタテヤマと云ふ總括的の大名を何故

伴はぬものとして上犬ケ嶽と混同の恐れあり、 引くよりミカゲガ嶽の名ありと幼時より教へられたり。」と語られた事である。後立山々脈に古來佛緣の名稱 0 嶽とも云ふ。 多い事より察して、ミカゲガ緑の持つ意味と相對して鹿島槍にふさわしい次第であるが、 尚今一つ新説を紹介するが、立山頂上雄 其故は曉天には旭日鹿島大嶽の肩の邊より昇り夕べともなれば立山の御影が長く大嶽に向 山神社の神官佐 暫く結論を保留して置きたいと思ふ。 伯尚宜 翁は 「鹿島槍ケ岳は鹿島大嶽とも 確實なる文献の カゲガ

くぐり候へば何ほどに候や。(後略)」と無我無中で通過したと告白して居る。 十三年の内 した山峯が無い故、 で、無視したり又は無調査と云ふことは無い様である。只二六〇〇米臺のグラく~した長尾根にて別段傑出 は何の繪圖を披いても同様である。 さて後立山より針 山村三郎左衛門の手記に在る。「(前略)針ノ木峠道、鑓ケ嶽迄の道之儀はい 後立山の大名に包含されたのはやむを得ないことである。この間を通過した記錄は元禄 ノ木峠迄の山々は總て後立山なる名稱に包含せられて居ることは測量闘籍の 然し何れの繪圖にも後立山の主峯を畫き二三の支峯を畫き添へてあるの 此等は如何に嶮難であつ (叢) の内 出來上る迄 を幾 たか 日も

を表明して居るのである。

リ岳はこの古名稱の遺存と思はるゝのである。余をして一地點に求めしむればむしろ赤澤岳を取りたいので る 部 るが、 から、 を意味 圖籍 ح K コ して居るのである。 0 は後立山 スバリなる意味は前記の如きであると思ふ。之を現境に求むれば赤澤岳スバリ岳の間でありスバ 間 K 1 ス の南に栂山が聳えて居る。これは爺子岳のことであらうか、この栂山の南は針ノ バリなる地點の記入がある。コスリバとは「小狹」とも書かれて國境と黑部 スバルとは越中では小さく縮まる、 又は小さく詰められ る意味を有するのであ JII との 木峠であ 最

狹

を超 大道の第一 次は針ノ木峠である。 慶安の 後立山にも比すべき峻峯も長くこの峠の名に包含せられて無名で居たのである。 調 の切所として常に最重要視された地點である。 査の目的 もこの峠であり、 古來奥山ではこの峠程有名な所はないのである。 又毎年兩國の境界として制札を建てたのもこの峠である。 故に現今のスバリ岳、 佐々成政の越えたのもこの峠であ 針 ノ木岳の如く二八〇〇米 後立山よりこの峠 實に奥山

(49)

ある。

のである。 して居るのであるが、 針ノ木峠より南へ進めば元祿圖では真砂ケ嶽となり、 とのこ 一峯共に峠 测 量圖籍では北針 より南 未の方向に一里內外の距離を以つて屹立して居る所よりして、 ノ木嶽が発立し續いて針ノ木嶽を並べ所謂針ノ木の 享和以降の圖では針 木嶽、 折嶽、 南 真砂ケ緑 北 一峯を見る 現在の舟

まで長く山名の無い所以もこれにて諒解せらるゝことゝ思ふ。

黑部奥山

と奥山廻り役

窪、 の展望に 不動に南北針 南又の終點を折嶽として居たのである。故にこの南北の二又に挟まれて居るとも峠上より見られる舟 不動岳を以つて擬したいのである。藩政時代針ノ木谷は北又と南又に分たれ、北又の終點は針ノ木峠 「針ノ木南峯。 ノ木嶽の名稱ある。けだし自然のことではあるまいか。 卯初度」として記され、 山廻り役の定例道はこの南峯を通過して居る所よりして不 測量闘籍の中の薬師ケ嶽頂上より

動と目すべきである。

は仲々峻峭に畫いてあるので、鳥帽子の巨岩を主峯として、南澤岳をも包含して居るものと考へる方が至當 らしいのである。藩末の山廻定例道は折嶽より南澤の下へ下つて居るのである。 いて針ノ木嶽の南へ列る折嶽とは何か。これは南澤と鳥帽子を總括したものであるまいか。 圖籍の山

(50)

(黑部上奧山廻御用方控) 文久三年齊木有次郞手記。

(前略)

折嶽の峯へ上り同所の峯に近年新小屋場に而小屋為打候、針ノ木谷入口より折タケの峯迄里數三里半斗有之至而 キ坂三而一統難儀いたし候。 七月六日、曇天針ノ木谷小屋出發夫より南又の谷へ登り道一里半斗上に而書辨當いたし夫より段々登り (後略)

(上奥山日記) 嘉永二年齋木有次郞手記。

(前略) 二十日曇天也、前日之疲勞甚敷漸々辰刻三吉小屋場出立、折嶽通クヅレの難所上を通り南又へ下り候

(後略

即ちクヅレ の難所を有する南澤、 鳥帽子の邊は奥山廻りに取つても相當に艱まされたらしい。測量圖籍に

10 11 0 は藥師嶽頂上 屋附近と思はるゝが、 折嶽と真 の場所であつて、 砂 の展望の方位に 嶽 の間 天明以後鳥帽子の一角に三吉嶽の俗稱あり、 の鞍部 決定的の場所は今一寸示し難 「折嶽、 には古來より三吉小屋場の名稱が存するのである。 卯十度半」と記されてあるが、 50 此の小屋場は奥山廻役や杣人足の間 叉東澤 正に南澤鳥帽子の間を指して居る。 合流する鳥帽子南側 其位置は多分現 の谷に三吉 10 は隨 在の鳥帽 是

なる名 る故、 呼を有して居て筆者の耳にも聞かされた所であるが、彼等の真砂なるものは野口五郎 居るが、 共に段々と南 卯の方に眞 る所以は本文の O 折嶽の南へ ح この時代この山名は隨分と廣い間 一稱を移 の存することは測量圖籍以後の繪圖を披いて見て驚くことである。 これは大なる誤りである。 0 Ш 砂 ケ嶽」 續く真砂ケ嶽とは今如何。元祿圖に於ては針ノ木以南はこの眞砂が嶽を以つて始つて居るので したとは考 脈中でも三ツ嶽又は野 の方へ押し下げられたものゝ如くである。この真砂ケ嶽は近來まで信州方面 「奥山廻役の研究」の章に於て記述したい。 と記され、 られ な 南澤鳥帽子を中心とする廣い間をも意味して居たが、 50 口五郎 昔の奥山廻は拳通りの著名なる拳頭を採用して山名を附するのが常道 又眞砂ケ を代表して居て、 嶽の 緑に綾 如き傑出せる山頂を捨てゝ單なる一角をなす小峯 V て南方へ列る火打ケ嶽も前記 元祿の頃藥師ケ嶽頂上より展望の方位として、「寅 三吉小屋場叉は三吉谷の名稱 共後奥山調查 の人夫共が の南方の一角を指 0 人夫共の間 云 2 一の進 ふ真 の真 行と 砂 に稱 0

(51)

是は

共に信用

10

附近にヒノハチと稱する一

角が存在するのを目して火打ケ嶽なりと彼等は云ふのであるが、

黑部奥山と奥山廻り役

黑部奥山と奥山廻り役 中島

諸家は別段加賀藩の奥山廻りも御存知なく又峯通り見通しの故實も承知せられぬ故に、 足りないものであると筆者は考へる。 この眞砂、ヒノハチは諸山岳家に依つて幾度か記述せられて居るが、 只漫然と是等人夫共

の言説を受け入れられたものと推察するのである。この間の上奥山日記を一覽しよう。

(黑部上奥山廻御用方控

丹波嶋川淺間山も一見いたし夫より中岳峯通り真砂火打ケ嶽中程より池ノ平へ下り前々小屋へ相向候處雲消候而水 少も無之二付無據中岳下川原先年小屋場江相下り小屋爲掛申候。 早朝三吉新小屋場出立、同日氣色宜敷ニ付峯通リ龍出候處他國地山々一見大町池田邊ノ在所相見へ同

即ち火打ケ嶽より五郎池へ下つた有様を叙して居る。

はない 其方向を指せば些少の異ひがあるが、 展望方位が載つて居る。「眞砂ケ嶽、卯二十七度。火打ケ嶽、辰十二度」是を以つて藥師ケ嶽の頂 **眞砂ケ嶽、火打ケ嶽を最も確實に決定するものは矢張り三州圖籍である。** かる 即ち是等に當てゝ稱するとも大なる過誤ではない様である。 眞砂の方向に三ツ嶽、 火打ケ嶽の方向に野口五郎嶽が聳立して居るで 殊に兩者共相當拔群の高度山容を有 闘籍には薬師ケ嶽の 頂上よりの 上に立つて

してではなく、 さて次は中嶽である。現在の各地點に中嶽を求むる事は實に至難である。 國內の山の樣に赤牛嶽と共に連繫して畫かれてある。享和圖もやゝ之に近く文化圖や文政以 元祿繪圖には中嶽は國境の山と

して居るに於ておや。

居る。 調 降 ことを雄辯に 以降黑嶽は中嶽六方、又は中嶽と呼ばれ依然として中嶽の一部を爲すが如き名稱を繪圖上に於て與へられて 考慮に入れて、 奶 査の進むに從つて國境は此 如く赤牛と連つて國内へ突出して奪ゆる黑嶽のことを指して居たものゝ如くである。 の繪圖になつて始めて國境の山の如く畫かれて居る。之れに依つて考ふるならば往昔は中嶽は其名に示す 是れは何時しか中嶽が分離して國境上の山となりより高く天に発ゆる黑嶽が劍と名稱さるゝに至つた 物語 黑嶽の南方現在 つて居る。 立山に於ける劔岳の關係に似て興味深いで所はないか。 の峯の南方の一角を通過して居ることが判明した結果、 の赤岳を以つて中嶽なりと命名したのではないかと想像するのである。 隣國との境界問題 然し多年段々と實地 文化 をも

上奧山街境目廻街用方控

12 ニ付暫く休居候處其內中地山村孫次郎道相尋夫より一統飛出し中嶽峯通濟候。

同十二日晴天、中嶽下小屋出立朝四ッ半頃六方山

註、

黒嶽)

續中嶽峯へ登り候處俄に霧立行方相知兼

(53)

標高も優れ繪圖上にも一大標點を成して居ること故、 て天際を突いて居る有様は立派に 六方山と云はるゝ黒嶽と中嶽と云はるゝ赤岳とは一續きの峯なることを記るして居る。 是の中 嶽劔 の一番優秀な眺めは上ノ岳方面からであらう。 眺められ、 其名稱ある所以が了解せられ 文政の圖籍に於てもよく各地より方位が測定され 實際劔と呼はる」にふさわしい峻峯が峭立し る 中嶽劔卽ち黑嶽は て居

20 一般より國境線は彎 曲 して元祿圖、 享和圖、 文化圖に於ては直に飛信越 三國 の境界なる鷲羽嶽を崛起

黑部奥山と奥山廻り

役

五四

黑部奥山と奥山廻り役 中島

して居るが、 測量圖籍以後は獅子嶽、 東鷲羽嶽を經て鷲羽嶽となつて居る。

との關係は、現在に於ては鷲羽嶽と三俣蓮華嶽との關係に相對する譯で、 當しやう。大天井又は槍ケ嶽方面より眞黑き岩塊を以つて眺めらるゝものである。次なる東鷲羽嶽と鷲羽嶽 獅子嶽とは何處を云ふものか。之は赤岳の南方に在る一岩峯信州の人夫達の云ふ小鷲と呼ばれるものに該 私は加賀藩各繪圖上三國

て定まる鷲羽嶽を説明し之の關係を明確にして見たい。

本アルプス黎明期の頃である。 鳥水氏に依つて實際的に與へられ、 してある。此の三州の境の山名が蓮華嶽と呼ばる、様になつたのは飛驒山脈に日本アルブスなる名稱が小島 越中飛驒信濃三國の境界は現五萬分の一槍ケ嶽の圖幅を見れば三俣蓮華嶽(二八四一米)なる名稱が記入 に「山名に就て」と題して 小島氏の明治四十四年版の日本アルプス第二卷の中の「日本北アルブス縦斷 日本山岳會の諸氏が相次いで是の山脈一帶の登高に乗り出され た所謂ロ

する所に依ると飛驒の鑞師がこの山で熊を射止めた。そうして熊の膾(膾虁)のつもりで俗稱蓮華膽 から引き出して喰つたので信州の獵師達が嘲つて「蓮華喰"の岳」と云つたのを略して蓮華嶽と云つた相である。 蓮華嶽なる山名はその山の白雪が白蓮華を思はせる樣な所から思ひつかれたといふわけではない、嘉門次の説明 (肝臓)

と書かれてある。

又同氏の北アルプス風景論には

記

(54)

(故に蓮華岳は一名三俣の稱がある) 飛驒の國に屬する日本アルプスの最北はこの蓮華嶽から始まるのである。 立山火山帶、 黑岳山脈、後立山々脈の山支脈を有して居るが此三支線を一線に結束して居るのは蓮華岳である。

と書いて蓮華岳として使用して居らるゝ。

(山岳第七年第一號「北アルブス瑣談」 榎谷徹巌氏)

三叉嶽(當字》つまただけ)三國境上にある蓮華嶽の異名である。私の考へではこの脈中に蓮華が澤山あるから

と書いて居られ三國境上の地點は蓮華嶽と頗る普通に稱呼使用して居らるゝ。大正元年測圖大正四年製版出

版の陸地測量部五萬分の一槍ケ嶽閩幅にては三國境上は鷲羽嶽となつて居るのだが就是某氏の痛烈なる抗議

(55)

この稱呼を用ひた方が便利ではなからうかと思ふ。

を紹介しよう。

(山岳第八年二號「机上談山」)

四米の三角櫓のある峯が鷲羽嶽とか単に驚とか呼はれる峯で目標になるべき鷲羽の池も閩にちやんと表はれて居る なのだと思はれる點である。(中略)槍ケ嶽圖幅を見ると飛信越國の境が驚羽嶽となつて居る。實際は其東北二九二 (前略) 地形はよいが地圖としては頗る輕からぬ不滿な點が二三の圖にあると思ふ。それは地名の調査が不充分

のである、而して三國の境は蓮華嶽なる名で呼はれて居るのである。而して其南地圖に蓮華嶽とあるのは正に雙六

岳に當つて居るのである。これ等の山の名は殆ど一般の通用を持つて居るので決して彼我相混じて使はれる様な事 のないものであるから頗る該圖の名は不都合千萬であつてその地方に行く人々にとつては人足の使ふ名と行遠ひが

出來たりして仲々迷惑を起すことであらうと思ふ。これ等の事の爲めに切角疵の少ない此地圖に實用的なものとし

黑部奥山と奥山廻り役

境に登山せられ なる名稱にしても其發生を至細に熟讀して見るならば之れ信州杣獵師等の偶然事から出發した假名に過ぎな つたのである。 の峯へ記入せられて山岳家の賞讃を拍したのである。こは果して安當な事であつたらうか。 との抗議 それが誤つて傳承し日本山岳會の權威に拾はれて遂に三國々境の重要地點に擬せらる」と云ふ結果にな 信州地方の文獻にも繪崗にもはた又地方權威者の言葉でもない。豈んや古文獻などには何の係 ての疵をつける事は決しく少くないのでこの點大いに何とか御一考を願ひたいと思ふ次第である。 が採用 の諸家は信州方面を基點として同地の案內者に依つて登山せられた結果現在の日本アルプスの各 今かりに山岳諸家をして越中有峯道、 たなれば諸家は必らずや蓮華嶽の代りとして鷲羽嶽なる名稱を拾はれた事と思ふ。 され て三國の境は昭和五年修正測圖より三俣蓮華嶽と改稱せられ鷲羽は東北の二九二四 又は立山 方面より越中の案内者をして先達させ三國 今試

b 8

國境の より 時 の山 確證を得て命名すべきことは論ずる迄も無い事である。 Ш 岳家は山名など實に簡單に命名して居らる」。 はすべ からく兩國 の人々の文書より調べて決定すべきであり、 初期の「山岳」紙上を眺むれば思ひ半ばのものがある。 他國の山々は某國の人々某國の文獻

稱呼はほとんど同地方の人夫、案內者の用ふる稱呼のみを採用して居らるゝ如くである。然かも此の當

举

0

Ш

岳會先達

閑話休題。 、奧山碉役宗兵衞記錄) 三國 々境は蓮華嶽に非ざることを證する越中側の文獻は如何に。

由來日本

信濃飛驒境目は驚ノ羽ケ嶽ノ後右兩國ノ境目ノ由承及申候。

、奥山御境目見通繪圖)

鷲ノ羽ヶ嶽。 但シ飛州信州越中三ケ國からみ。

(奥山廻岩城記錄) 元禄十三年

飛州境鍋嶽は飛州信州境鷚ノ羽ケ嶽より西ニ當リ申候。此間道程大概貳里程御座候。

が緑頂上より測られた方位も「鷲ノ羽ケ嶽、 即ち元祿の頃より三國の御境は鷲羽ケ嶽であつて足跡も此處に至つて居るのを知るのである。 との頃薬師

己の方向」となつて居り些少の違ひはあるが三國

々境の邊を指

加賀藩山廻り役も幾度か して居るのである。 元祿から下つて正德、 不時登山 を餘儀なくせられ、 寬保には針ノ木峠以南の各山峯に於て頻りに盗伐の事 安永年間 には犯人就縛のこともあり、 2 0 方 かい あ 面 は随 つて、 分

と探索調査せられ、 繪圖も修正に修正を重ねた事と思ふが、 三國御境目は別段に變化なく鷲羽嶽になつて居

但し鷲羽嶽の呼稱は古來は鷲ケ羽嶽又は鷲ノ羽ケ嶽と呼ばれて居たが、

次いで文化奥山圖、

文化新川圖も同

文

さ て三國 は鷲羽

確な名稱を與 の境 へて居るものは、 嶽であるが、 現 在 測量圖籍である。 の驚羽 0 池のある鷲羽ケ嶽とは如何なる關係にある 圖籍には三國の境は鷲羽嶽であるが、 \$ c 5 の二山 K

三州

黑部奥山と奥山廻り役 中島

至

一十五丁の間

明

化以降 様三國

は

現在

の如くなつてしまつた。

の御境目は鷲羽嶽である。

以降

.百年の間文書記錄等に於て三國の境に名稱の異變が見えない。

(57)

され、 いて東 E に現在 北 0 力 の鷲羽嶽を指して居る。 東鷲羽嶽を聳立して居る。 三國の境の鷲羽嶽と東鷲羽嶽のことは時を同じうして書か 然かも鷲羽嶽頂上より東鷲羽嶽 0 方向は申十五度と書き記 n

た加

居 點羽 越能 る。 嶽跨:飛信? 一州 が是は如何なる譯か。思ふに三國々境の鷲羽嶽は大いなる山容と堂々たる根張りを見せては居るもの 地理志稿にも圖籍と同じように記されて居る。「上ノ嶽、 東鷲羽嶽黑部川水源。」との權威ある二書に文政の頃より東鷲羽が兀然として出現して來て 鍋嶽、 鷲羽嶽共在:本郡(新川郡

K 0 0 命名するに東鷲羽ケ嶽としたものでないか。鷲羽の名を變へずして東鷲羽と命名したことは大いに含味す 峯より發して居ることを知つたのである。 高 度に於ては北の一峯が著しく優つて居る。 於是今まで黑部川水源は鷲羽ケ嶽なりとせるに鑑 然かも詳細に實地調査を重ねる內に黑部 Щ の水 み此 源も 是 0 一 の北

も鷲羽 らる」が、 の池と云 前記より ふ名に呼ばれ始めたのではないだろうか。 推測して東鷲羽と山廻りや杣人足に依つて命名使用せらる、様になつてから、 元祿以降明治に至る間に於て繪圖記錄其 自然に是 他 の古文

嘉永二年の際木有次郎の上奥山日記にも中嶽より龍池ケ嶽を經てとある

0 は

此

0

池を有

明治の山岳家は是の東鷲羽にある鷲羽の池に拘泥して「目標となる鷲羽の池」と云つて居

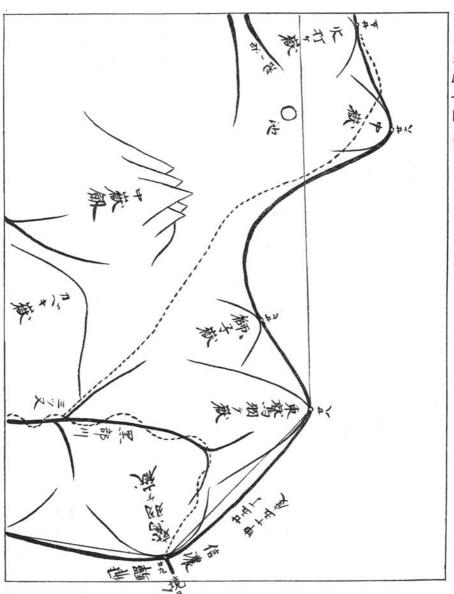
書を探つて見ると、

きととである。

する嶽を指したものではないか。また、天保五年奥山廻役脇坂長右衞門の作製せる新川郡奥山 に鷲羽嶽の東方に 龍池ケ嶽と記入せられある一箇の山を見出すのである。 これを以つて天保頃までは 繪圖に は立派 Ш 頂

火口池を有する現在の鷲羽嶽は龍池ケ嶽と唱へられて居たことを知るのである。

山名にかく龍池ケ嶽とある



ないのである。 \$ 0 ム其他の幾つもの繪圖、 之は一 面に他領と云ふ關係もあり又一 地圖、 山廻記錄を尋ねてもこの鷲羽の池について記載せられて居るのは見當ら 面に三國 々境の重要地區に 池の無い事を意味するも 0)

之に 岡籍 他 33 カン 思ひ誤られたのであらうか不可思議な事である。三つ俣、三つからミは常用語であつて、鷲羽嶽に使用 である。 に於て何處を探しても見當らない。 てこそ正當であるが他山 堪へない の過誤が の測量をも参酌 別 以 個の の是の誤りは實際解し難い。 上各書に於て蓮華嶽なる名稱は片鱗をも見出せないことは了解されたことゝ思ふ。 華 Ш 事 實に世を誤るの甚だしきを痛感せられるのである。 た錯誤を發見せらるるので注意すべきである。 と並ん の様に は測量 取 せられた爲め鷲羽と三ツ俣を別個のものなりと判斷した結果ではあるまいか。 6 圖籍以降各諸圖 鍋嶽 り扱はれ、 に用ひては全く意味を成さない。思ふに之れは鷲羽嶽に使用して居る内に、 (黑部五郎) 信由翁にも受け入れられ繪圖に記入せられ 多分老齢の信由翁が全部との奥山を踏破することが出來す、 に鷲羽嶽の西方に三俣嶽の記入を見ることである。 もし强いて蓮華の西方二五八〇米の一 となるが、 是の間 との過失が後世まで影響して居るのを見ると權威者 に三ツ俣なる地 乍然この測量圖 點 小峯でも謂ふのであらうか。 は た様である。 現在 籍 の現地 確 是は作者 さは當年 然るに此 現に東鷲羽(鷲 は元より 奥山廻り 石 他にも一二 處に Ŧī. 黑翁 如 萬 何時 分圖 せら は何 不 和)驚 沒其 三州 審 n

(59)

多少の瑕

瑾

0 0

如

き

は何等 なる他

の繪画記

優れて居

今に到るも

價値少しも減ぜず益々光揮を放つて居る。

0

IE.

何

黑部奥山

と奥山廻り役

ф

黑部奥山と奥山

この大功を傷けるものではない。

少し 事に依つて起つたものですべからく剪除すべきものと考へられ、それについてもつくづく郷土古文獻の研究 に思ふ次第である せられたならば日本アルブスの現名稱に非常に越中色濃いものが現れて居たことと思ふがかへすがへす殘念 と云ふことが痛感せらるる。 以上の文獻に依つて三國々境は鷲羽嶽と命ずるのが至當であつて、蓮華嶽又は三俣嶽なるものは近世偶然 日本アルプ ス の領主であり天下の書府と云はるゝ加賀藩の古文書に留意して貰ひたかつた。 越中の山岳に越中人が起つて研究しなかつた罪も大きいが、 初期山岳諸 これ に留意 家に今

に奥山廻りの足跡が印せられて居たと見えて、前記にも見ゆる通り「一、 より西に當り申 鷲羽 | 嶽より西へ連る山は鍋嶽である、 候。 此 間道 裡大概貳里程御座候」と里程を明記して居る。 即ち今の黑部五郎嶽である。この鍋嶽より鷲羽嶽までは元禄時代既 飛州境鍋嶽は飛州信州境鷲 33

嶽

集めて居たと見えて、 永、承應の昔から既に山名は諸書に散見する所である。 尙 西方に連る上ノ岳は今も昔も山名に變りはない。藥師ケ嶽、 承應三年の加賀藩士、篠嶋又左衛門の願文は今に存在して居る。 殊に藥師ケ嶽の如きは頂上の藥師様が四方の尊信を 赤牛ケ嶽も現在と位置名稱 の異動なく、

連峯黑部川谷々に付いても述べなければ體を成さないのであるが、是れは更に研究し近く發表の機會を許さ 以上大略國境の主要山頂の今昔の名稱位置の變化移動を考證した筈である。 尚此外に幾多の峯々殊に立山

れたい。

奥 Щ 0 國 境 と出 道

黑部奥山と云はるゝ廣大なる人烟斷絕の地域に隣國との境界は何を以つて表示されたか。

(奥山廻役宗兵衞記錄) 惣而御境目之儀山々峯りを汎り此方は御領後の方は他國領之由申傳承申候也。(後略 元除十年

包 正德二年內山村平三郎手記

同 (前略)

(後略) はりの木谷峯を境信州越中御境ニ而此方之谷川同峯より水之落様を以何れ茂境目に往古より定り來り申

即ち奥山一帶の境界は數十里に渡つて連立する高山大岳の峯々尾根を結んだ一線と云ふ不文律が成立して

居たことが判る。 有無を見屆けた丈けで滿足したものである。又各繪圖も長く是の奧山一帶に聳立する國境の山々の見取圖 故に古來より奥山廻りも能り越し難き深山は相當な御境目見通し場所に於て展望し、

のみを記して居た次第である。

黑部奥山と奥山廻り役

0

中島

六

黑部奥山と奥山廻り役 中島

(奥山廻岩城記錄) 元禄十年十一月

ニ御座候故此峯より右山々峯通り御境目見渡罷歸申候。 有峯より薬師ケ嶽江登眞砂嶽、 火打嶽、 中嶽、 驚ヶ羽嶽、 鍋ヶ嶽、上ノ嶽、 此山々難能越候二付藥師ケ嶽高山

國境線の實地踏査を怠つたが故に將來頻々として越境盗伐者を出した。この盗伐者達は國境の不分明に乘じ 他國より仲々に越境し難い地勢丈けに、 割合に警戒第一義を重じ乍らも簡單なる國境觀念ではある。 この

加賀藩領を信州野口山なりとした事が奥山廻りに依つて發見されて居る。

(奧山廻役宗兵衞記錄) 正徳二年八月

言ひ逃れの爲めに、

に仕文字相見江不申様ニ消能歸申候。〈後略〉 針ノ木谷西ノ方少平成る所ニ(中略)小屋腰之右ニ鋄永八年八月野口山と書記有之候へ共私共砂ミがき

然し此等は幼稚なものであつて所謂國境問題となるべきことではない。實際に於てこの奥山

には般

數十百年間隣國と靜謐を保つて來た。此間僅かに信州より入込む盜伐者や密偵に依る越境侵犯に多少の動搖 は松本藩、 何等人爲的の利益享受地でも無き事故、 飛州は高山幕領に接し、この兩國には奥山へ干渉の手を伸ぶる奥山通の存ぜざりし爲めか、 隣境との葛籐は自然起り得なかつたであらう。 隣國と云つても信州

を示すに過ぎないものであつた。 當時加賀藩に於ては加賀の白山と呼ばれた白山に就いて、明暦より寛文まで長年月隣國越前藩と所屬を爭

Ch 遂に越前領と決定され、 延寶年間高山藩が廢せられて幕府直轄領となるや、忽ち猪谷方面に於て親藩たる 續いて幕領に屬せしめられて解決したと云ふ苦汁を喫せられ、 國境問題に就 て神

富山 經過敏となって居た所へ、 藩と幕領の間に境界紛争を生じ苦境に陷る等の事あり。之の爲め奥山方面に於ては絕對に 然し當時人力もて如何とも為 前轍 0 如き苦

す可からざる奥山は自然に問題の派生を防止して幕末に至つたのであつた。 汁を喫せざらんとして奥山廻りを督勵し境界の闡明に手段を盡したのである。

の間奥山廻りは毎歳嚴重に勵行せられたのであるが、

彼等は如何なる山道を通過したか又其足跡

は如

何。然して隣國へ通ずる大道間道は如何。これ等の闡明に依つて奥山の當時を囘想すれば深々たる興趣 0 湧

き來るを覺ゆるのである。

奥山を經て隣國へ通ずる大道のうちつとに有名なものは佐良越、

卽ち針ノ木峠道である。

此 の峠

道

は何

時

新川郡に 飛驒高原の城主江馬氏が有峯道を通過して千垣 的使者や密貿易者や其他種々なる非合法的の旅行者に依つて拔けて居たものと考ふべきであらう。戰國 頃から抜けたものか知り得べくもないが、 出兵して居た事などより考ふるならば、當時江馬氏と關係ある信濃の國の領有者武田氏など、 戦國の以前より信濃より黑部川畔へ密獵に來る者や盗伐者や (現縣營鐵道の終點) の對岸、 中地山に支城を置いて、 江馬 越中 時代 政治

天正以前の文獻 の無 V 0 は誠に寂寥に堪えない。吾人の目に先づ觸れて來るものは第 一章に詳記した天正

黒部奥山と奥山廻り役

中島

氏と共に

相應にこの峠を活用して居たものでなか

つたか。

通じて事實の真實性が窺はれるのである。下つて慶安の利常侯の命に依る佐良城の調査は其足跡信州の馬留 郎の由緒書中「佐々陸奥守殿御上下御通被成候云々」と書いて居るのを見れば、素朴な地方人士の 九十年前である。 にまで及び今日其測量の成果記錄まで存在して居るのであるが、これこそ日本山岳史上に於て山 十二年霜 の濫觴とし山岳測量の嚆矢として特筆すべき事項ではなからうか。慶安元年と云へば實に今を溯る正 別の佐 成政の通過である。此の大體は多分に傳說的の色彩が加はつて居るのだが、叉芦峅村十三 岳調查探險 口碑より に二百

爾來針ノ木峠道はざら越として奥山第一の主要大道として奧山廻り役、御林伐木者、立山禪定者の間に名

(64)

道 木谷に野口山などの石標など發見してから俄かに此議が成立したものであらう。 點であつた。 此 高く喧傳せられた。 られて今日に到つて居る。針ノ木峠は信越の捷路と云ひ隣國の境界をなすと云ひ、兩國に取つては重要な地 も針ノ木谷の山道相次いで崩壊し遂に放棄のやむなきに至つた。 の峠道を改鑿し牛馬をも通じたのであつた。 故に加賀藩に於て鑑みる所あり、藩末には毎歳境界の制札を峠頂に建てたのである。 明治の初め金澤の士族中との峠道は信州へ越ゆる捷路に當ることに着目して社を建てゝ 今に残る「牛小屋」 其後別段に事なく是の事實等は全く忘れ の稱呼は卽ちこの名殘である。 所謂針 然しとの

(上奧山御境目廻御用方控) 文久三年

(前略) 針ノ木谷御境は東谷へ相登可申事は勝岡氏拙者御境より壹里斗下迄相登候處霞相立迚も登り方六ッケ敷

候ニ付杣之內達者なる者共に札為持御境江為立拙者共暫く待居候處御境より罷歸一統一集ニ八ッ半時頃針ノ木谷小

屋場へ能歸候。(後略

道は、 である。是は年々さら谷が崩壊相次ぐので室堂を據點として一ノ越を下る道の平易なるを優れるとしたが爲 て針ノ木峠以外との擴大な奥山に隣國へ通する大道幾つかある。 めである。然しさら越は立山下溫泉の利用者等の關係に依つて崩壞し乍らも存績せられて居たのである。さ 人に疑問を與へぬものは無いのである。只慶安の時は立山道と途中にて別れ松尾峠を下つて佐良越 元祿の繪圖以降に於てとの大道は明確に記され以來變換はない。又位置其他についてもこの道程明確に諸 文政以降奥山廻り等に依つて汎ね立山一ノ越より中ノ谷ヌクイ谷へ向つて下る道を採用して居ること へ向つた

、奧山廻岩城記錄

覺

新川郡猪谷村より飛州之内茂住と申在所へ罷出申候此道荷付牛通申候。道之名無御座候。

同郡有峯より飛州之内山之村と申在所へ罷出申候。 此道難所二而牛通兼申候。 道之名は無御座候。

同郡小川之湯道より鑓ヶ嶽へ掛り山峯谷を越越後國大所村と申在所へ罷出申候。 同郡芦峅寺村よりはりの木峠へ掛り信州之内野口村と申在所へ罷出申候さら越と申難所ニ而牛通不申候。 去共道と申ニ而 ハ無御座候。

一、猪谷村より飛州茂住村迄道程貳里程內五丁程猪谷村より飛州御境目迄

有峯村より飛州山之村まで三里程之内貳里牛程有峯村より飛州御境目迄。

黑部奥山と奥山廻り役

中島

六五

交

芦峅村より信州野口村迄道程貳拾七里程の內貳拾三里半程蘆峅寺村より信州御境目迄。

、小川湯より越後大所村迄廿里程內拾七里程小川湯より越後御境目迄。

右越中より飛州信州越後へ越道私共覺申通書上申候道程儀山路ニ而御座候丁間難申上御座候得共大槪覺申通書上

申候。以上

元祿十二年三月二十三日

新川郡奥山廻內山村

Ξ

郞 左

衛 門

御 算 用 場

、奧山廻役宗兵衛記錄

覺

牛通申候。馬はから馬迄通申候。 一、越中猪谷村より飛州横山村へ出る道猪谷より御境目之所に而い南ノ方に當り申候。此道飛州東路往還ニ而荷付 越中長棟山ノ飛州横山村へ出ル道長棟山御境目之所ニ而東之間ニ當リ申候。此道荷付牛通申候。 馬はから馬迄

右横山道と杉山道ノ間峯通見渡大概三里程御座候。

越中長棟山より飛州佐古村へ出ル道長棟山より御境目ノ所ニ而へ南ノ方ニ當り申候。此道牛馬共荷付ニ而ハ通

通申候。

リ不申候。荷出シニ通申候。

右杉山道へ佐古道ノ間峯通リ大概一 里程御座候。

越中有峯村より飛州大多和村へ出ル道有峯村より御境目之所ニ而、西之方ニ當り此所牛馬共荷付ニ而、通り不

-候。荷出しニ通申候道也。

越中有峯村より飛州和佐府村 へ出ル道有案村より御境目之所ニ而ハ西南之間ニ當り申候。

元祿十三年三月晦日 元祿十三年三月晦日

天正寺村 重 右 衞 門

御第用場

く幽谷の道迷ひ易く然かも長大なる道程と標高拔群の高山を越ゆるの不利あり、 道と二つのもの許りなることを知る。この鑓ケ嶽道も古來名高き通路であつて、之も針ノ木峠と同じ樣に種 れなかつたのである。この道の起源のことはよく判らない。前田領となつてからさへ最初の記錄は前記二つ 越す通路の山徑は、 6 は鑓ケ嶽 のでなかつたか、 の古文書であるが、慶安の調査の時の愛本の奥「つか山」とは栂池のある白馬方面を指しての道を調査した 々なる人士に依つて利用せられて居た事は想像に難くない。 ぬが、 以上二つの覺書に依つて墨部奥山と稱せらるる部分即ち南は鍋嶽鷲羽嶽より北は鑓ケ嶽に至る間に他國 大所村 Ш 腹 へ出ると云ふ文書より察して白馬大池らしく思はるゝ。 池を畫き 知りたいものである。勿論「つりかね」 針ノ木峠道と小川温泉より鑓ケ嶽を經て信州細野村又は越後大所村へ達する所謂鑓ケ嶽 「信州 へ越す道」と云ふ道形を書き込んである。 は鐘釣のことであらうが、元祿御境目見通 只此 のコースは針 この大所はこの愛本の奥を調査せら この池は大池か栂 ノ木峠と遠ひ通過 針ノ木峠ほどにもてはやさ 池か 0 長池 人々も少 繪圖 to a 41

(67)

黑部奥山と奥山廻り役

究されたと推測せらる」のである。 た慶安元年の年利常侯御國入りの際わざと越後の闘川より道を轉じて此の僻村に止宿され山巒の狀態を研 利常侯の根智越とて藩士の語り草となつたのである。参考までに記して

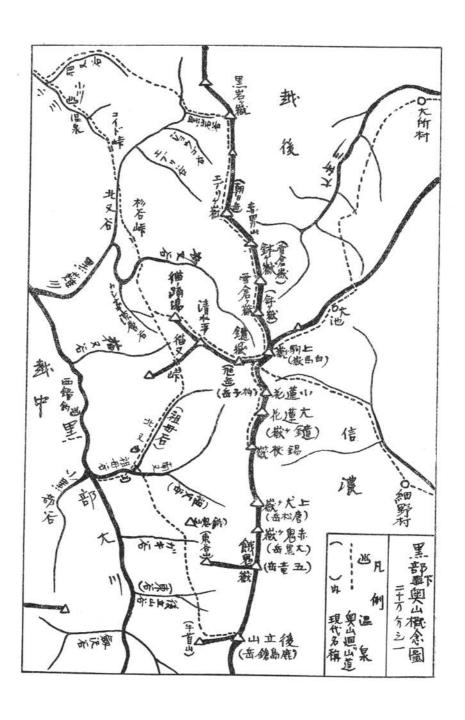
、慶安元年、微妙公根智越とて姫川の上へ御通り被遊候時分、大所と申在郷に御止宿被成候處に山中何も肴無之 候。姬川滿水に候。 仰付候而繩越に仕候へば自由ニ往來仕候旨、中西小左衛門咄承候。 召和田十郎左衞門に矢筈に鷄のへ緒に細き細引を結付遺候而段々大きなる濱引に仕、兩方の岸に留させ候樣に被 河向迄は方々より之飛脚獻上物數多持參候得共、聲屈きながら山川深く故難越候。此段被聞

この根智越の時までに利常侯の胸中に黑部探險の方寸が成つて居たと推せらるゝのである。周到なる侯は

大所に於て旣に之れより鑓ケ嶽を越えて越中小川へ出る道ある位の事は地方人より聞かれた事と思ふのであ

る。

志稿には「鑓ケ嶽、 道なるものは形さへも無い嶮難の山道なる事を告白して居る。此等の文書、記錄が語り傳へられて三州 形 爲めに、 無御座候得共先年三郎左衛門信州江罷越申砌此道を罷通り候併さら越同事に極たる道筋は無御座候」 さて元祿頃のこの道の狀態は前にも記したが、元祿の覺書の 鑓ケ嶽道並に針ノ木道は共に奥山廻の大道としてのみ主なる機能を發揮した如く、 有間道。通信濃州。不有定路」と書いて居る。慶元以來黑部は嚴重なる禁斷鄕となつた 「鑓ケ嶽より信州え越申道之儀御假繪圖 天正以前の様な 地 K



自由な行動は許されなかつたであらう。

越を經 鑓ケ緑へ 祿以前より現在まで大體に於て誤りは無い樣である。只文化奧山圖は柳又谷を深く溯行して現旭岳に攀ぢて に三州測量圖籍 カン 大蓮華 て柳又谷に入り、 | 鑓ケ嶽道の概要を記しこの大道の支線なる各奥山廻の常例道のことを少し記して見たい。文化繪圖並 達したる如く道形を記入してあるも、 (鑓ヶ嶽) に依つて順序を記すならば、小川温泉を起點としてコイド峠を越し、横山峠へ掛り、 へ登るか又は鞍部を絡んで信州細野か越後大所 カシナギ深層谷を溯行して、 之は現地圖のオウレン谷の尾根ではなからうか。 猫ノ踊場 (猫叉岳) へ達するものである。 に登り清水平に達し上駒ケ嶽 この道 昔の人が不 柳叉乘 順 は元 台

得手に柳又の深谷を溯つたものとも考へられない。 今一つ文化奥山繪圖其他にも記載されて居る、 小川温泉より相の又谷を溯行し、

北又谷に入りサル

ノハナ

(69)

奥山廻り役等の常例道で支道とも云ふべきものであろう。文化繪圖までは錫杖ケ嶽以南は罷越し の記入あるのは奥山廻 ケ岩屋とあるは祖又谷祖母 鑓ケ嶽道の支道として祖母谷の黑部大川と出合までの道がある。 嶽と縦走して鑓ケ嶽に達し、 ツキの嶮を經て、 黑岩ケ谷を溯り黑岩ケ嶽に達し國境の連奉ゑぶりケ嶽、 りの道 一谷出合の近在にある岩屋のことで又つりかね山とあるのは鐘釣か奥鐘のことで此 越後或は信州の道と合するものは、 の存在を示して居るものである。 又鑓ケ嶽より不歸、 之は古くから有る道らしい。 純然たる奥山廻りの常例道であらう。 はちケ嶽、 錫杖に至つて居 ゆきくらか続、 元祿圖 難 るも き山であ J. 2 00 は鬼 駒

黑部奥山と奥山廻り役

黑部奥山と奥山廻り役 中島

る。其道筋は上駒ケ嶽道とカッナギで別れ、深層谷を横切り猫又谷の源頭を越え、 つたが、 三州測量圖籍 からは後立山へ見分の定例道が記入せられ爾來奧山廻役の見分を實施して居るのであ 祖母谷に入り、 南越を

(鹿島槍嶽)に登るものである。之れより以南へは別段に定例道は無いが時に應じて針ノ木方面より見分を實

えて、餓鬼谷に降り、東谷山の一角を攀ぢて、後立山谷(東谷)に入り、牛首の尾根に取り付いて、

Ш

施した様子である。

(奧山廻役竹內手記) 天保九年六月

年去道筋より入込人有之茂其義難計御座候。右後立山際より能歸り尚更打返見分不仕候ニ付前文之道筋通り信州路 束義茂見分不仕候。後立山並餓鬼ケ嶽及蓮花嶽迄の間信州路より賊入込義迚も嶮岨通行相成申ケ所ニ而ハ無御座候 へ相移り夫より又候黑部針ノ木峠を越、同落合へ昨夜小屋着仕候。(後略) (前略) 前文之通り小屋跡等道形之義已ニ而相替義無御座候猶更栂谷頂より後立山續際迄罷越候へ共右之外無覺

(70)

往昔の人々は常識として見通の利く率通り尾根の道を採つた事が此處でも現れ、 さて此處で不思議な事は今日黑部奧の大道たる鐘釣宇奈月の川岸の道が少しも現れて來ないことである。 河岸の岸壁を溯行するの不

現在の下ノ廓下と云ふ所の如きは彼等の最も苦手とする所であつたらう。圖上にも内藏助平より下手祖母谷 可能事を試みなかつたのである。隨分な長い年月明治時代まで黑部川岸の道の記入も記錄もないのである。

まで「これより祖母谷へは難所ニ而通路不成」と記入して居る。黑部奥山ではこの下ノ廊下は如何に難物で

0 は峯頭より見渡して異變の無いことを以つて滿足して居をことゝ思ふ。又繪圖上に於ても當路の上官は國 あつたか分る。 谷筯は睾々の如く重視しなかつた點も大いに關係して居ることゝ思ふ。但文化奧山繪圖は流石に奥山 實際上には奥山廻りは役儀上國境の見張りを以つて第一義としたる關係上、 黑部 谷 々川筯等 廻 役 內

的の常識皆無の者故に彼是と混同になるのはやむを得ない。 ノ木峠方面は如何。針ノ木峠大道のことは前記の如くであるが、奥山廻の常例道は何處を辿 つった

當時と云へども下ノ廊下附近も彼等も一再ならず通過した事に依つて相當の智識は有つたらうが、

0

使用のものと推定さる」文けに谷々も中々調べてあり、

十字峽らしきものゝ記入も見るのである。

何分测量

0

(71)

之れ

真砂、 か。於是各手許に存する繪圖を對照すれば、 谷を溯行し太郎 又へ下るか何づれかを採るものである。三つ又より此道は本流に付いて下り折谷の出合にて本流に別 る。鷲羽嶽 又谷を溯り針 を見ないのである。文化繪圖並に三州圖籍に依つて順を追ふて見るならば針ノ木谷の南又を起點として、南 火折と縦走を續け、 へは此處より上下するか、又は中嶽より東鷲羽嶽と縱走して鎖嶽との鞍部十二越へ出てとの三つ ノ木南峯 兵衛平に出て有峯へ入るのである。 (圖籍 中 に依ル) 嶽を横に中嶽劔との鞍部を越えて黑部川源頭に下り三つ又に野營を張るのであ に登り、 御境目見分の定例道として國境山脉縦走路を採り之も長く變化 之より折嶽の峯に達し三吉小屋場にて一泊し再び行を起して 此の道は往古は有峯から鷲羽 嶽迄は拓 かれて居 たと思 れて折

寬保以來上與山に於て頻々と盜伐の事實發見せられた頃より與

るム

が、

ラ木

谷まで

の記録は見當らない。

黒部奥山と奥山廻り役

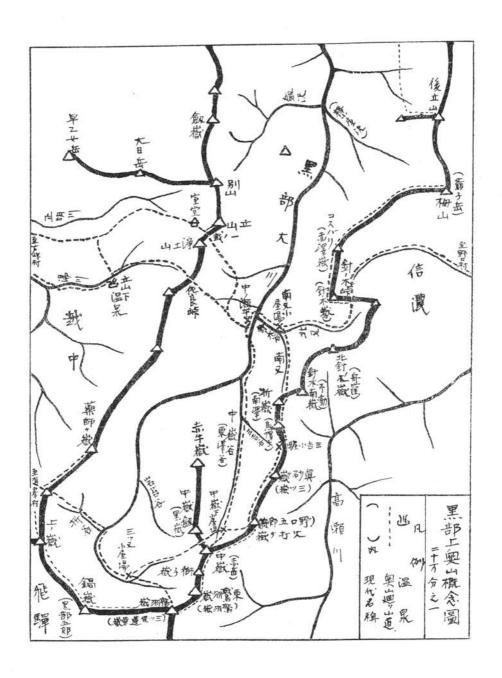
道と合するものである。此道は難路ではあるが、 Ш 行見分に赴い つた場合彼等に取つて重實な山路である。 イ谷出合附近にて本流を渡り對岸本流に付いて溯り、 見分の定例道として拓けた様である。との盗伐見分の爲めに拓けたと思ふ道に中嶽谷道がある。 た由記録に見えて居る。 この道は安永四年奥山廻役三ケ村長兵衛等が盗伐の噂を聞 直に奥山の中心たる中嶽に達するもの故上奥山 中嶽谷 (東澤谷)を登つて中嶽下の小屋場へ達し定例 に異變のあ

邊の地區を縦横して其步道は立派に成り谷々川筋山成の實相も極めて明細に判別して居て、いやしくも不明 割合嶮難の度少く、加ふるに安永以來盜伐者出沒して奧山廻りを手古摺らせた所丈けに、彼等は事 0 個所を有して藩廳より叱責を喫するが如きは絕無を期しただらう事は疑ひない。 以上が上奥山の常例道であるが、 藩政中頃より中嶽道文けは利用少なかつたもの」如くである。 以上大體奧山諸繪圖 上奥山 毎に此の

入せられある山徑について説明したと思ふ。

30 早月川の源流をブナグラ谷に入り、ブナクラ嶽(猫又岳)鞍部に古圖には名のみ存して居るブナクラ峠 つたのである。ブナクラ越は古來黑部谷への捷路として、一說には、 え西鐘釣に塗する道である。之は初め小黑部へ出て祖母谷出合に達して居たものが、文政より西鐘釣 湧出し浴客が出入往來する様になつてから片貝谷より鐘釣へと立派な道路ができ、 には無いが、 文政以降三州圖籍等に記されて居るブナクラ越のことである。 佐々成政もこの峠を七月(十一 却つて其方が本道 此の道は伊折より 月に非 K 溫泉 にな を越

K 記





あらば此の捷路を取つた事は一奥山廻りの手記に「寛保元年七月二十二日に在所罷立早月谷より罷登り 越えて、 内蔵助平の岩窟に一泊して針ノ木峠へ掛つて行つたと説を爲す人が在る位である。 奥山に 劔 異

東方越をぶなくら越と申也」と見えて 居る。 又安永四年の奥山廻役の覺書 (奥山廻役の研究ヲ参照) にも

(前略) 私共三人杣人足多召連劔嶽ヲ越黒部谷後立山之腰罷通りはりの木峠

の嶮難を物ともせず、 山内を至細に見分しつつ急行調査に赴いた真摯なる様子が彷彿として敬意を表せらる

と書いて居る。

共に奥山に盗伐あり、

奥山廻役等がブナクラ峠

の道を越え平素能越し難きなどゝ云

ふ後立山 (後略)」

へ能越御境目見分仕候

るではない

次第であるが之は何づれ適當なる他の題目にて發表する機會を得たいと思ふ。 尙 此 の項に於ては有峯道、 長棟道、 立山溫泉道或は又立山参拜道の事を記し今昔の異動を辯せねばならぬ

(73)

四、 林

奥 Щ 0 森

は、 人の覗ふを許るされ ふ「黑邊」又は「黑檜」と云ふ文字にふさわしい限りのものであつた。 古來奥山は林木森々として繁茂し、 御林山として林制上より、 なかつた事は奥山の濫觴で述べた通りである。 又隣國の境目として戰略上より諸人出入禁斷の地として斧伐の音を聞 原始の儘に幾千百年を經過し、其林相も黑部と云ふ字の依つて來るて 藩末に至つて伐木のことあるも、 以前は兎も角藩政時代となつてから 奥山廻 かず常

七萬

黑部奥山と奥山廻り役

七四

り等は一致して、其秘境の濫りに開らかるべきで無いことを力説したのであつた。其爲めか奥深く伐木のこ

其大学は利益せぬ所である。さりとて信州へ伐り出すは利益なるも、盗伐常習者に山内の様子を知らるるの とは無かつた。尤も奥山御境目筋の山々には四時雪消えやらぬ高嶽峻嶺連つて、伐木は越中側へ運輸しては

は實に不用心極ることである。これが釣り合つて長く林相を保持して來たと云ひ得やう。

(奥山廻役竹內記錄)

就御尊小紙を以申上候。

御國方案內相知不縮にも可有之候哉と率存候。(中略) 渡候得ば可然様率存候。尤本川より御國の方伐取不申様被仰渡候得は可宜と率存候、本川を打越候得ば立山

侯て可然哉と御蕁に付申上侯。上みの方は中嶽谷を限下の方は猿飛邊を限黒部本川より信州の方御林請負に被仰

黒部奥山御杯御材木、信州手寄之方同國之者へ請負に可被仰付義有之候はド山境之所何を申場所請負に被仰渡

は谷峯切所、 右就御尋申上候乍併其刻御縮方手配相考仕方可申上義も可有御座候哉、難計率存候旦又他國へ請負に被仰付候得 道方宜仕可申と率存候左候得ば御國方不縮に茂相當可申哉と率恐察候將又請負年限相濟跡賊伐縮方

月

卯

七

六ケ敷可有御座候哉、

右兩樣乍恐深御賢慮可被仰付御義と率存候。

古左流

太郎右衛門

奥山廻りの主張する所尤なりとした事は論を待たない。新川 御郡 御奉 行 所

しも面倒臭いもの故、 奥山の木材は黑檜を最上とし、五葉松、はだ等がある。然し前記の如き次第もあり、藩直轄地として伐出 結句濫伐を避けて年月を関したと見るべきである。林相については記録甚だ少く何れ

奥山廻役の項にて詳記するを便とする故一二をのみ掲げよう。

企 伯記 錄

覺

黑 部 川谷 杉、 機 五葉、つが、松はた、槻。

片貝 早月川谷 111 谷 杉、 杉。

常願寺川谷 同 档、 斷。 五葉、

松はた。

上市川谷 同 斷。 白岩川谷

杉、

機

五葉、

松はた。

右新川郡御材木御座候山々谷々如之候。

享保十一年十月二十六日

新川郡山々五葉松はた一ヶ年に三千本宛御用木に爲伐候而茂減り目も見申間敷設と御尋ニ付其通り委細

(佐伯記錄) 享保十一年十月

(前略)

黑部奥山と奥山廻り役

中島

= 郞 左 衞 門 善

右

衞

門

1

(75)

尖

COLUMN CO

で減り目を論じて居るのは一寸異とする所であるが、之は當時の伐木の幼稚と他に理由が有るのである。理 右の二文書は只一つの例に過ぎぬが、黑部の林木を槪記して居る。倘後段の文書の如き一ヶ年に三千本位

由は奥山廻り役の研究で述べたいと思ふ。

明治以降は營林署の管理となり、時として良材のみ伐採し、又頻々として盗伐のことあり、 些少林相の悪

化を死して居ることで有るが、大部分は原始の姿態を存し、日本稀れに見る境地を形成して居るのである。 昭和十一年大阪營林局の職員一行、黑雉川上流原始林を調査して人跡未到の嶮絶せる地勢を述べられ、埋

れたる寶庫と讃えられて居らるゝが、以つて往昔の黑部奥山の林相を偲ぶの 資料として 此の記事を掲げた

Vo

(大阪朝日新聞) 昭和十一年八月

おく彩秋の製庫

荒廢の極に達したため倒壞樹の大椎積を整理し水源を涵養し不用材の伐出しを目的とした。 探險の目的は太古以來一挺の斧も入れぬ爲老樹の倒壞腐朽おびただしく雪崩と洪水に依る山崩れ崖崩れ相次いで

簿井氏談「(前略)イブリ山を越えると熊の徑さへ遮斷されてしまふ。ロツククライミングも尾根傳ひも峻拒され

激流は越るが身體を吞む奔湍や離は川から上つて鋸のような岩塊、紙のなやうな壁を滑りつゝ這ひ攀るだけだ、 て居る。そこで小澤の水の流を綱と綱にお互の體をくゝりつけてジヤブ~~徒渉で急流溯行だ。乳のあたりまでの

(76)

黑部奥山と奥山廻り役 中島

唯一の榮養劑だ。毎日のやらに猿の大群に出くわす。人馴れぬ猿はキョトンとして逃げもせずキヤツキヤツとから ずは餅を燒いた樣に腫れ上つて足といふ感覺はまるでない。雜木帶を山刀で切り乍ら這ひ進むも難行の一つだ毒虻 行いづれも一日十里の山路を餅せぬ猛者揃ひだが今度は最大のスピードを出して一日ギリ~~十町だ。足の土ふま の美林だつた。山毛櫸、杉、姫子松、ねずこ、しらべなど殊によく運輸方法さへつけば廢りものゝ木を擇伐した丈 かい乍らついて來る。然しカメラを向けても感じない密林である。(中略)これ丈けの苦難はあつたが山は想像以上 と蝮は間斷なく襲撃する蝮はこつちにとつては絕好の美食だ、片つ端から摑へてり焼にして食つてしまふ。人外境

北叉谷」の記事と比較して流石に新聞の記事だと 思ふが二文共に林相の 美を讃して居らるゝ のは間違ひな い。この北又谷の深奥に殘る人跡未到境の一斑を推し進めて往昔の黑部の森林を想像して頂きたいと思ふ。 この方面は昭和六年八月塚本繁松氏が走破されて居て其「山岳」二十七年第一號に現れて居る「朝日岳と (77)

けでも三百萬圓位ひ樂に出るだろう。

(一二、五、一五 於越中津澤杏子文庫)

東日本に於ける狩獵者こその狩獵

越後赤谷村採訪を中心として一

、その系統と文書

二、沿黴者その他に關する山神

五、赤谷村狩獵資料四、「マタギ」といふ語並に狩獵武具と狩法の變遷

(1)獣の習性 (1)縦師の漁魚 (2)女の仕事 (1)熊の解剖と祭の様式 (2)小屋に於ける捕獲祭 (3)代熊の解剖と祭の様式 (2)小屋に於ける捕獲祭 (3)

(一) その系統と文書

東日本に於ける狩獵者とその狩獵 高橋とは相當大きい問題になり得るが、現在までの所で我が國の狩獵者の系統が幾つに分れるかと云ふこ

高橋文太郎

ギ」の卷物に磐司磐三郎の話の書いてあることは周的に表示すると見られる所謂「マタギ秘卷」の分野的に表示すると見られる所謂「マタギ秘卷」の分野的に表示すると見られる所謂「マタギ秘卷」の分野かな事は云へないし、秋田縣荒瀬村根子と同じ程度かな事は云へないし、秋田縣荒瀬村根子と同じ程度のマタギ生活をしてゐる部落にこの秘卷が保たれて居らない場合もあるのであるから、この系統を具體は尚更厄介なこと」なる。嚢に杉浦健一氏が「マタは尚更厄介なこと」なる。嚢に杉浦健一氏が「マタは尚更厄介なこと」なる。嚢に杉浦健一氏が「マタギ」の卷物に磐司磐三郎の話の書いてあることは周

(79)

七九

知のことであるが、これは日光系統のもので、今一つ

東日 本に於ける狩獵者とその狩獵

高橋

高野 系統 のものがあると云ふ(中略)荒瀬の人々が、

日光や三面と關係深いことを意識してゐるのは、 高

野に對する日光系の狩人の傳統を物語 るものであ

これと並んで、

高野系更には九州の傳統を比較

研究することが意味あることである云々」と述べら れ、次に拙文「山の神とコダマ鼠の話解説」を評さ

て、隨分努力したが遂に見られなかつた。 れた折に「筆者は高野派の卷物と云ふものが見たく 日本には

ないが、高野派と云ふものがあつたとすると色々面 白 狩の二系統があつたかどうかと云ふことは未だ分ら い問題が展開 する事になる。 或はないのかも知れ

くである。私はコダマ鼠の話の中においてシゲノ流 野系の卷物について更に疑問を持たれてゐられる如 肯定され ないが今少し精査して見たいものである」と記され 前文には略々二系統があり高野系のあることも た如き記述であるが後文においては尚 も高

得た談話の中、

派とコダマ流派との對立を秋田檜木内 マタギの傳

コダマ

二つを大體是認はして置いたが、之はむしろ行過ぎ なかつた。そして日本の二系統として日光、 が直ちに高野系統に屬するか否かといふ事には觸 る口碑には見られると説いて置いたが、 高野 0 n

の想定であつた。秋田マタギ特に荒瀬村根子の人々

が下手であつたためか、こゝの人たちは自分達が日 て話上手な點に釣られたためか或は私の聽き出し方 に會つて聽き得たところでは、 當地 のマタギが極め

且つこれについて優越感をもつて話して吳れ 對手側として高野系統のあることを意識して た反面

には、

は日光派に屬するが獸への引導だけは特に弘法大師 ゐるかのやうであつた。併し根子のマタギから聽き 光系統であり然もシゲノ流儀に属することを是認 特に私の注意を惹いたのは、 自分達

から教はつたのだと力説し且つ之を證する記録とし

T 導を教 詞章が唱ひこんであることであつた。然も注意 當地 て貰ひ獣を殺すことの罪障消滅を得たこ のマタギが保管する卷物に空海上人から

10

に値するのは萬事萬三郎と日光權現との關係を唱

0

のではないかと思ふ。と云ふのは、

實際には

口で云

た普 海上人引導に關する詞章が載せてあることである。 通 K 云 はれ てゐる日 光派の卷物 の結尾にこの空

ば高野派臭 派を信じてゐる根子マタギにも弘法大師云ひ換 この點はマタギ自らの口述とよく合つており、 味の或る影響が如實に見ら n 3 0 日光 であ へれ

儀 如何 る何々派とい ふのは、 禮、 併しと」で一 程 武 の生活的 この の使用 種 ふ流儀が、 應冷靜に考へ な根據をもち、 0 法或は 卷物なりマ 所謂 實際の Ш なければならないと思 タギ自身が信奉 狩の際の作法とか 7 言 葉 タギの狩獵生活 など 12 2 L 0 てわ 系 K

> 武器 のだと云ふが、實際にはこの點 されてゐるかの點である。 シゲノ、 の使用法、 アヲ バ 熊祭りの作法儀禮などが異つてゐる サルマそれぞれの流派によつて 土地の者に聽くと皆一様 の比 較は仲々困 な

り、法だしいのは奄美十島孤島群の或る島における ふ程、 である。平家落人傳說を信奉する部落に家系圖 行為にはその差が現はれ て居ないと思 3. かい 6

品といふ類のものを保管してゐるが、 やうに、 脉相通ずるものがマタギ部落にもある やうであ 何れ の家 々も立派な家系圖とか先祖 その氣持と、 の記

(81)

業として居らない特殊な山 は、 マタギとか木地師とか鑛山關係の人たちの間に、 に共通した人情ではないかと思ふ。 30 恐らく山間 自分の職業や家柄に歴史的 僻陬 0 土地 に住 HI に於ける職業者であ む人 な箔を 唯特に農耕 2 VC 0 限らず け た を主 S 般 0

本に於ける狩獵者とその狩獵 高橋

東

流儀による如何なる區別

が現はれ

てそれ

が實行

2

村の外観と對照して著しく總でが異つてゐる場合が

東日本に於ける狩獵者とその狩獵 高橋

推 懷 限られた傾向ではない。野に居れば普通の農耕者と 卷物が各々現存しその人達が之を大切に保管してゐ 九 より ねばならなくなり、 け一般農人から見れば極めて特殊な生活方法を採ら して生活して居るであらう人々が、 るのは既 段として何人かに作成されたと思はれる幾種類かの じやうに、 假定が許されるやうに思ふ。所謂平家の家系圖と同 て極めて古く純朴であるといふ一般説は或程度まで しいやうに聴いてゐる。 の狭 らの先祖と高貴な方々との繋がりを保たしめる手 0 或 氣 気持から、 い土地 は家寶により誇張するやうになつたと一應は に認められてゐる。從て之は狩獵者のみに 7 タギ に定着したために職業 どうしても自分達の - の持 他から卑しめられると云つた邪 つ秘密も筆寫による傳搬 平家の落人部落が他に 偶然限られ 血筋柄を窓物に 的 K も制限をう た山 比べ が著

> 多いから、 どの點も開けた村とは比較にならぬ程 ども遠ふ様であるから、 ふ。併し外界との交通が永い間鎖され通婚の れ共さう容易に推斷が許されない 大きいので、よく云はれる年代的 印象として吾々の眼が眩惑される部 言葉、 習俗、 のではない な古さの 人々 0 純粹性を保 の容貌 點で 狀態な かと思 は何 分が な

來やう。 歷史的 大きい問題で今後の調査を俟たねばならない。 殊な生活手段を保つて一 たかの問題である。 では確かに古式を永く保存してゐると云ふことも出 つてゐることは爭はれない事實である。 秋田 マタギの生活を解剖しても判る如くに、 な傳統をもち傳説をもつて 其れならば何故、 斯の種の純粹な山 般の農村人には見られ 秘卷の如きもの ゐる根據は恐らく 中生活者が さら云 が作 或る られ ふり な

肯定することが出來るが、

これはもつと平野に近い

部分には大きい傳説の信奉が保たれ、

もう一つの部

分は らくとの 極めて現實的である。卷物とか流派の問題 傳說 0 部分に入れ てよい 8 0 であらう。 は 後 恐

12 異つてゐる部分がある。 も記す 如く、 7 タギ 0 Ш 武器 言葉も土地 の種類も越後三 K よつて可 面デ 0 な

やうに寒中の羚羊 3 0 が 原則だと傳 狩には今尚鐵砲を用 6 n る所も あ るが、 ひず槍を用 他の 多く 0 15

士: 地 では銃が最も 重寳がられ、 手槍類は殆ど使用 さ

前見られたとするも、 れなくなつてゐる。 假令、 之を使はなくなつては、 手槍の使ひ 方に流儀が以 そ 0

L

又は唱文などは若し も自然失はれてしまふ譯である。 流儀の異なるために著しい差異 只、作法儀禮

L

長野縣北安曇郡大町在

流儀

と云ふよりも一つは他 から あるとしたならば、 すものとならうが、 之等が餘程後までその傳統を よりの移入傳播もう一つは土 之等の差異が流派の違ひ から

た場合は、 の事 情による偶然的發生とい むしろ流派の如き形式的なものは ふことを考慮に 口 「では 入 22

東

H

本に於ける狩獵者とその

狩獵

高

地

然的 唱 へられても實際には殆ど行はれず、 經濟 的 な事 情に よる發生の差異を多分に認め その土 地 0

自

\$ よい ので はなな 5 かと思ふ。

東日本に於ける秋田マタギの影響は非常に

やうである。

例

へば根子の佐藤正夫氏より

0

告に

大きい 報

に出た場所を御紹介致します、尚當時此方より移 よると、「今より百二、三十年以前に此 たその祖先もあるのです、 現在も附 近 力 は此 b 方の 又鬼* 又

鬼と變り て明らかになつて居ます。 無い のは全く此方の 又鬼 の指導し た事實と

(83)

百二、三十年以前、 富山縣下新川郡羽入村山峯(西磯波郡墳 山田福太郎なる者 が移住 してる 地 へは

六 Ŧį, 四 ₹ 新潟縣魚沼郡 新潟縣西頸城郡小瀧村山ノ坊 富山縣下新 川郡愛本 (八海山) 鹽野 附近

全

東 H 本に於ける 狩獵 者と その 狩 高 橋

八、 九 七 越中、 富山縣婦負郡 山形縣 信州、 西置賜郡小國村 越後境 (黑陪、 (白馬山附近 立山附 (飯豐山附近)

となつてゐる。

尚、

實際の根子マタギ

の活躍地と

處 近 T 地 同 分言 らか から しては 清策氏が上京 は草 の山 おり、 氏 0 狩 は十 でない。 ñ 狩 中に 付 獵者は秋 氏 青森縣界又は遠く奈良縣にまで及 獵技法等の傳承をどの程度まで残し 2 の家 七 の岩場で恐らく 秋田 0 歳の時初マタギとして出かけた。 過般、 の折、 は 7 タギ 0 H Ŧī. シラミガリと呼ぶ所があつて、 0 六代續 0 7 親しく同氏から伺つたのである 新潟縣北 宿 タギが來て仕込まれたと傳 秋田 が富 いって のマ 魚沼郡湯ノ谷村 永氏の家であつた。 おり タギが鑞がなく虱 代 2 狩獵をされ たかか h 然も當 0 の富 は明 る 此 附 永 る

> 伊1 流

を唱へて居るとい

ふが、

同じ地

方である南會津

那

サ T 居

ル

7 6 站 祭 T 力 0 け、 際 K 銃 椈 П 0 とか 枝 K 槍 Ш 神 の穂先をすべて上に の御札 をつけそ n むける定則 に武 を立

n る金子總平 南 あると云つ 一會津檜枝 氏の談によると、 岐 T ねる。 の狩獵者生活を丹念 當 地 0 に調査 獵 師 は L

る。 獵者氣質とも云ふべき氣持から、 相當古い傳統をもつた狩獵者があり 北村田子倉 流と唱へてゐるとのことである。 2 金子氏の調査が發表されたならば、 0 流 派の名稱 の皆川 が 幸壽 唱 られてゐる 氏の談に 兎に角そ よれ Z 0 前述した は ば、 0 との 注意 流 當 0 n 南 如き狩 をナン +: K 地 會津 値 地 VC \$ VC

バ

種

ギと そこで此度探訪した新潟縣北浦原郡赤谷村 0 連 繋の有 無の諸 いいい 明らか V なつて來ると思 0

とり

を

して過したことからの命名であらうと話

され

群

0

狩獵者が果して如何なる卷物を傳

秋

田

7

H

る。

併

し湯ノ谷はその流派はアラバ流と云はれ、

熊

れにしても秋田獵師

0

影響の見られ

る所であ

30

公

< であるが、 が釜伏山中熊澤附近で大きな雌熊を射止めその夜は 森縣下北郡大湊町字宇曾利川の獵師杉村久治外四名 の程度までか判らない。 影響あることを少しほのめかして居つた。 の外門宗六老人の話によると、 部落を擧げてオカベトナヱと稱する熊祭が行はれ、 何 2 流 當地では卷物の所藏を聽けない許りでな の流派の 唱 へもなかつた。 又過般の記事によると、 當地も 併し同 秋田 事實はど マタギの 村 龍谷二 青

あつた。 くの獵師が續々入り込んでゐる意味の事が記されて 之に據つても、 秋田の獵師が 他縣に 於いて り得 卷物を所持するために關所又は渡船の通行票とも するのでマタギの總本山秋田根子を始め縣外から多

0

卷物の他に、

日本國中の狩獵權を獲得し

然もとの

一動いため熊の穴入が遅れ餌を求めて各所に出没

活躍して居ることが知られ、

特に又、

熊祭のオカベ

雪が

葬ひ祭る意味が表はされて居る。 ナヱに相當する語も秋田ではケボカイといふ名稱 なつて居るが、別にオカベルといふ用語があつて、 熊を祭る用語に同

日本に於ける狩獵者とその狩獵

高橋

K

7

藤正夫氏の報告にもあるやうに「秋田 で判つて居る部分だけで云ふならば、 派系統のもので、 らないとの事だけで、之は卷物によつても明かです」 より授けられた獣に對する引導で射殺しても罪にな 聊か長い説明に入つてしまつたが、 高野派系統のものはただ弘法 秋田根 要するに マタギは 子の佐 今ま 大師 日光

じくオカベルが現はれて居るのは注意したい。

權現に關する萬事萬三郎 と云ふことが述べられるに過ぎない。 の功績を唱つた所謂日光派 若しも、 日光 (85)

いふ附帶的な役割をもつて日光權 とすれば、どうも高野派の影響はむしろ ふべき卷物が別に發見されず尚且つ實在しなかつた たと同じ項目を唱ひこんだ全國旅行手形とも 現系統の 「引導」と 卷物 K 喰

八五

ひこんで來てゐるに過ぎない

のではない

かと推測

3

關する卷物或は其他が今後發見されるとすれば新た n V る。 ふ類の日光權現系統の卷物に匹敵する弘法大師に しかし、 日 本に於ける狩獵者とその狩獵 日本國中山々嶽々の狩獵權を獲たと

れた話者の談では、東山の大獵師と西山の小獵師と 始末を説くものが存したことを説明せねばならなか 表されてゐるが、 居るのは柳田國男氏著 に問題 その一方が榮え、一方が山の幸を失つたと云ふ迄の 由來を說く言ひ傳へには、 か趣きを異にしてゐる。然もその著に つたのである」と説かれ、 南 獵 この種の卷物以外に九州の山村椎葉又は西米良で 師 0 が展開される譯である。 物 西 前記秋田マタギの持つ卷物とは聊 山小 獵師一流」 山 西米良で倉田氏が發見さ もと狩人に二流あつて、 の神とヲコゼ」に既に發 などが發見されて 「山の獵師 0

を助けなかつたため山の幸を受けず然るに後者はそ

るが、

大男神宿男神の呼稱が見られまづ山神由來と

神之祭文」がある。これは極めて判り難

い詞章であ

根村で「大ナンジ小ナンジ」の話として見出され、

之より後に尚同氏により同じ村から發見された「山

0

對立が

あり前者は山神の化身であるお産をした女

した「山の神とコダマ鼠の話」と非常によく似た點 なつたことになつて居る。この談話は私が嘗て報告 は各々山に入つて山ヲコゼ、海に入つて海ヲコゼと 獵師の連れて居つた大ブチ小ブチと云ふ二人のセ の女を助けた報酬として山の幸を授けられ、

れるものが既に早川孝太郎氏により三河北設樂郡豊 のものと大分異つてゐる。西米良の話と同型と思は つ狩獵者に關する全般的な生活權の表示といつた類 そして此の種の西米良のものは前述秋田マタギの と關聯を保たせるには多少の無理があらうと思ふ。 に大きな分野の意味に於いて日光、 があり、二つの流れを暗示しては居るが、 高野兩系の對立 之を直

(86)

罪 が料オト シ」の條項が讀める。 私がこの 度飯豊山 麓

12 い赤谷村瀧 谷で見出 し得た 0 は 1: 地 C は 狩 0 卷

が、 物と云つて居たので、 手にして見ると秋田流の卷物ではなく、 見るまでは期待なも つてねた 呪文の

に卷 記録とい は筆寫な 如 きも 物叉は のと山言葉の ふのは興味が惹かれ ので判讀 口 傳書と唱 に骨 記載であ が折れ へられてゐるものにも諸種 つった。 た。 3 が 何れに 今残つてゐるの Ш 言葉を載 しても

內容 0 \$ 0 のあ ることが 判る。

川東村 凍死し タギであり雪箆までを焚火にたいて 叉と 南叉の T 赤 から今年は 谷村 獵師須藤七太郎が山中で大吹雪 0 狩獵者 七年忌に當るが、 から 彼は祝詞 聽 VI 同行 た 彼は有 が、 0 子供を 北 10 名 浦 遭 原郡 な 力上 7 74

> 狩獵者の先祖になつたとい 谷の如きもの 6 あつたか、 土地 ふ類 の綴師 かのもの か或は前 に聴いても

或は らなかつた。 而 して、 前述の九州又は三 一河に於ける發見の卷物

らない。 内容とは著しい差異があることに注意しなけ 口傳書とい 前者は陸中の方にも發見された説話 つた類の記錄は前 記 秋 田 流 0 形式 秘 礼 ば 卷

せた

0 П

K ものであり、 もつと大きい系統を意味す との大きい 後者はマタギ生活權の標目といつた、 系統の分野の何 る 8 n のである。要する カン VC 前 述シ ゲノ、

(87)

ルマ、ナンバ流儀等の諸分派は統轄されるものと

來たが、 へられるが、一 ても 私は兹に秘卷に據る系統の分野を大體說 亦二つ 此の見方が果して安當であるかも今の處 0 流 方に於いてこの説話形式の傳承 れが 暗 示され T わ る と見られ T

し銀ねる。 眞に系統の確然たる分野 かい あ 3 なら

るも

0

東

H

本に於ける狩獵者とその

豹雞

高橋

であつたか。

叉视詞

ふの

は

萬事

萬三郎

から な

斷

保管しておつたといふが、 ばひ哀れな最後を遂げた。

この 7

卷物は果

して した卷

如

何

を記

物を

30

於い

考 サ

高橋

ば、 器使用等に何等か其を區別し得る根據があつてよい この秘卷を離れても、 狩の習俗、 儀禮方式、武

わけである。 註 新潟縣東蒲原郡豐實村實川の獵師は日光系の卷物

を所持すると云はる(森谷氏談)

註 1 日本民俗」第

2 民間傳承」第三卷第五號

3 山岳」第三十 一年第一號

4

5 拙著「秋田マタギ資料」八三一八四頁 東京朝日新聞、 昭和十一年十二月三十一日記 「山立由

6 民族」第三卷第 一號

7 S 佐々木喜善氏著「東奥異聞 民俗學」第三条第二號

 \equiv 狩獵者その他に關する山 神

北蒲原郡赤谷村瀧谷の古老外門氏を訪ねて、 山神と

はどんな物かとの問ひを發したところ、早速嫁に命

を聞いて下るのであるから、

どうしても此の日は餅

は岩組の上に逞しい男が腰かけ傍に二匹の狼が侍つ じて奥から山神掛圖を出して見せて吳れた。この繪

D. 秋田檜木内のものの女像が省かれたとも見られ てゐるものである。

この圖によると確

かに

男性であ

る。 人々の話では概して山神は女性と るものとなつてゐる。併し外門氏又は上赤谷部落の 尚當地 の人々が信じてゐる山神は山や農耕 П では 傳 へて の仕 わ

配力をもつてゐる如くに考へられてゐる。 て關係してゐる神で、 事、云ひ換へれば、 狩獵、 山及びその産物につい 炭燒、稻作などに主とし 之は次の ての支

諸例の幾つかから判る。 1 Ш 0 神が田 の神と な るとと。

舊二月十六日

山神となる。 舊十月十六日 (新三月十六日)に 山から下りられるのはキネオト(杵音) (新十一 山神は山 月十六日) から下りて に再び山 田 の神となり へ還つて

のアラレには焼いて膨らませる ため に大豆を入れを搗かなければならぬ。餅と共にアラレも作る。こ

「中つ号ら号がよと交り氏って優で、こつらうよがられるので餅を搗いて祝ひ、當日は農仕事を休む。 る。又、山神が山へ還る日にも杵晉について山へ登

點、嶽の神と普通の山の神との區別がなされてゐには何か山の不思議があると信ぜられてゐる。この山神の居る場所は比較的低い山懷で、そのやうな所

當地では山神を普通にはヤマノカミサマと呼ぶ、ないやうな高所に居るものと考へられてゐる。尙、

る。

緑の神は飯豊山の如き里人の山仕事とは關係の

上赤谷、農耕者談

前項と同様なことが炭焼の間にも信ぜられ、

3

當地

の狩獵者は山神をヤマノカミ又はヤマノ

東

日本に於ける狩獵者とその狩獵

高橋

たが、山の神さまに竈の中へ引張り込まれた。このた。家計に困つてゐる者で、休まないで來たと答へ

といふ話が傳へられてゐる。當村上赤谷、瀧谷など事あつてから當日は山へ誰も入らぬやうになつた」

者は一二の地主で、農業を主業となし得る者も從てが多い。耕地が限られた山村であるから、田の所有の部落では狩獵をなす者には炭焼に携はつてゐる者

尙、舊十月十六日は炭焼に限らず、山稼ぎは全部が作られ、多く豆類などが栽培される。 地主である。田の外には主としてカノといつて焼畑

(89)

休む。既に山に入つてゐる場合も當日は山中で休業

つてゐた。從て、當村から六、七里離れた狩場に到時聽いた範圍では、山神を主としてダンナサマと云カミサマとも云ふが、私共が同行して狩獵に入つた

過ぎると林道の傍に第 見られる。 る間 く樹木を山神樹として祀 の路 傍とか これは朴又は椈の形のよい極めて目 山間には、 0 つておくので、 多くのダンナサ 山神樹が現はれる。 瀧谷新田 7 の木が 數株 につ を

1

力 は 狩獵に向 の朴の木で(第 0 御燈明をあげ 11 つたが私共の参加した一行は之を略した。管林署 屋 (常盤新田官山製炭事 ふマタギ連中は て獲物に預かることを祈願するらし 圖) 根元に との 前で禮 務所) 山神の小祠が安置され に達するまでに 拜する。 正式に

狩場である勘 でダンナサマ もので祠はなく樹が直接に崇拜の對象となり双物 などの 左衛門グラ 神樹が 標識が刻みこんである。 (一一六三、三米、 (第二圖)は椈 これが 地 の三幹 形 圖

神事が行はれ

るの

0

旣に三、

四株

0

Ш

であり、

K

Ŧi.

は後述する。 狩 獵の際、 Ш 部落のマタギの家には前述の如く、 「小屋で如何なる形式で山神を祀るか Ш

五萬分一

飯豊山参照)

の直下にも見出された。

は山 棚に た家、 地に居住した人々の創建と云はれ、 迦御魂大神の三柱を祀る。 三社合祀となつて、 神掛圖を保管するが(瀧谷新田 カン ジンシヤ H は には山 の神様と申上げる神で、 ムり又山を支配なさると云はれてゐる。 例へば上赤谷の井上平次郎氏の如きでも、 山神の御札を供 大將 (山神社) (當日だけの) 天御中主大神、 と稱され妙見、 る。 この中、 叉、 山稼ぎする人々 の例)、 から 赤谷村 司 この大山で 大山祗大神、字 會となり 山神社は赤谷 農耕を主とし Ш 神、 の氏 胴突 二月十 の信仰 孤大神 稻荷 神 は 神 0 +}-

山中 者は喰はれてしまふかと思つたが、暫くして音も止 起りその音と共に山の神が現はれて來たので、その た。 4 の樹間 還らうとすると俄 部落の者が山 に假寢をした。すると、 0 かに 神 日が暮れ 0 Ш 0 芋を掘りに行つ 風のやうな音が てしまつたの

隱しかばつて吳れたので、幸ひに無事なることを得 VC たのだ」との話を上赤谷で聽いたが、この話の起り たのであるが、 み朝起きて見ると、自分の宿つてゐる木と木との間 メ縄が張られてあつた。之は所の氏神がその者を 山の芋を掘つたので山 の神が怒られ

は東蒲原郡三川

村古岐である。

5

に白

ンサ ると荒れる。(上赤谷、井上英橋氏談 い。又、蒜場山(一三六三米)にも天狗がゐる、 熊を捕りにか」ると山が荒れて どうしても捕れな 熊が現はれると天候が急變する。白熊ではなくゴヒ 7 烏帽子山(一五七三米、飯豊山西南稜) (天狗)ではないかといふ者もある。その白 登

から ゴヒンサマが棲んでおり、この山の物を取ると祟り ので決して入らないが、 あると傳へる。附近の者は此の事情を知つてゐる 6 御神樂岳 (一三八六米、岩代越後界) 或時岩ヒバを取りに入つた には

東

日本に於ける狩獵者とその狩獵

高橋

者があつた。 たが、之は事情を知らないで入つたので命拾ひをし 圖したはずみでローブが切れて裸のまゝマクレおち つた。夏だつたので裸になつて登つて居つたが、不 たのだ。(上赤谷、同上氏談 た。運よく身體は舟の中に落ちたので怪我は 雨岸絶壁の川を舟に乗つて近づいて行 なかか

行衞不明になつたのを傳へられたことである。大分 たことがある。それはこの女性が里でもつと若い時 熊を連れて來て遣さうが、私は元との下の部落から と尋ねた。そして、 た。三十歳位の美しい女性が出て、何用あつて來た の岳へ入つた者が仲間の磯師にはぐれて獨りになつ この山へ紛れ込んでしまつた者だ、しかし今は山 さまになつてゐると言つた。この男に不圖思ひ當 7 同じ御神樂岳にあつた話である。 熊が欲しいのなら自分が生きた 熊捕 りにこ

(91)

その間年月が經つてゐたが依然若くそのま」の姿で

東日本に於ける狩獵者とその狩獵 高橋

談)。 5 あった。 連れて下りられなかつた。(上赤谷、同上氏 熊は出して吳れたが、生きて居たものだか

断られた。供し一人で出て熊を見付けその妻に相談 あつたので一人の獵師は熊狩の仲間に加はることを 氏から聴いたので之も序に附記しておく。「お産が 8 夫婦者であることを暗示するか或は全く關聯のない と云ふ。之は同地の富永清策氏の談である。それが ミサマと山神を呼び、 者との考へをもつてゐる。 E K の芋などを支配してゐるとの考へ方が上記の各實例 のか直ちに判らないが、「十二ガクラ」由來談を同 北魚沼郡湯ノ谷村折立の獵師達は、 ンサマと山の神或は白熊との關係も注意したい。 よつて大體判り、又この地方で信じられてゐるゴ Ш が山 の物例へば熊、 里の部落に於てはジフニサ 岩ヒバ 獵師は山に於いてはサガ (俗稱岩松)、山 山の神は夫婦 7

ると、

山神は男と思ふと云ふこと、そして當地では 南會津郡伊北村田子倉の皆川幸壽氏の談によ

尚、

なかった」。

二匹の熊であつた。大勢で出かけた組は一匹も捕 廻つた。クラを熊が登つてくる。鐵砲は確 をした後、妻を加へ「見當」となし夫は ちて死んだ。二人が下りて見ると驚くことには、十 つといふ工合に之を何度も繰返す中途に熊は谷にお して熊はクラから谷に落ちたが又上つてくる。 「鐵砲」に かに命中 叉射

(三)「山言葉」について

女の夢を見ると獵があると云つてゐる。

使ふ言葉の幾つかが一 てゐる。この名稱の可否は別にして、 狩獵者の仲間が里では用ひず狩の際 般に「山言葉」と既に云は

の山

中でのみ

谷に保管された記録にも、

この種の言葉に「山言葉

此度赤谷村瀧

る。越後三面部落は後者に屬すると云ひ得やう。秋依つて此の言葉を他人に話す所とさうでない所があなる呼稱が附されてゐるのを見た。現在でも土地に

田根子の獵師も仲々語らぬ方である。

探訪者の側から云へば聽き出し方の悪い點もあらうが、事實その傳統が保たれてゐる土地では容易に 語らないと見るのがよいであらう。併し一般から云 へばこの十年乃至十五年前までは狩獵者間で實際に なだこの十年乃至十五年前までは狩獵者間で實際に ではれ若いマタギは古老から習つて古い慣習が保

此度、赤谷村瀧谷新田及び同村上赤谷の狩獵者に加鑑團が尠くなつてしまつた。現在では吾々が聽いて話して吳れと云つた場合、年老から聞いておくから話して吳れと云つた場合、年老から聞いておくから

られた。

界も、 その區別が殆ど出來ないやうに赤谷での經驗では思 工合に形式的には指示し得るにしても、 際にある前述朴の木の山神樹の祀つてある所といふ 祀つてある所、 界ひが有り之を過ぎると山言葉を使ふといふその 持して居るやうに話されるが、 から獵師達は緊張し つた。寧ろ狩場に差し懸る直前、 度ではないかと推測される。 あつた。恐らく秋田でも部落で聽くと大分古式を保 でも狩場でもほんの僅かの山言葉が使はれるだけ 南會津郡伊北村田子倉でデドと呼ぶ山 赤谷村で云へば瀧谷新田を過ぎた山 三旦つ嚴肅な氣持になるやうに見 叉、 事質はこの赤谷 獣の出沒する地 所謂部落と山 事質は最早 神 社 0 限 程

(93)

でも狩獵團といふ一つの任意な選拔による仲間の結谷村での經驗から云ふと、山言葉なるものは何處ま

東

つて熊狩に從ひその行動を見せて貰つたが、

小屋內

東日 本 に於ける狩獵者とその 高橋

之を用ひる心理 成 間 に於ける狩 獵を中心とした特種 用 語

で、

この山の幸を獲得することに獵師

0

主

目 T

的

が

あ

どの獣類は山

神の支配下に在ると

解

され

ねる位

て貰つた感じか 如く見られる。 との獵師 ら云ふと、 には比較的嚴肅な氣持が入つてゐる 團 如何 體 に参 K 加 \$ して 種 0 仲 であつて、 狩 崩 獵の に入れ 秘

見られ 密團體とも見られる。そしてこの仲間同 同時に作業の協同乃至 一は統制、 或は食料 志の結束 が

れた。 關係 渉と獣の捕 見なくても、 の平等と分配 併し之は獵師自らが痛切に意識しての行動と 獲等の諸條件か 狩場 0 などの事項 限定、 ら自然に 危険を犯して につい ここの種 T の嚴 の峯谷の跋 心守が親は の團 體 食事 的

そして言葉の限定と共に、 行動とその協同 のは當然であらう。 が必要とされるのは云ふ迄もな 併しこの言葉の 行爲の制肘 發 生. 分言 から 現はされる しは、 5 0 種 50 0

社

會經濟的

な觀點

0

みかか

ら解釋出

來

ない

0

理

0

神をも信じて居らぬ

た

めで

あらう。

何

K

宗教的

な部

分が

見られ

ない

0

\$

Ш

窩

の信奉が深

Vo

當地

の説話には

Щ

の物、

特に熊

な 神 あ

對する禁忌又は佛教的な齊戒の意味が、

どの

程度ま

Ш

神の條に述べた如く特に獵師達は山

\$

獵師

の山言葉に於

いては、

Щ

神

1

0

それ る以上、 る。 忌詞として解釋されてゐる根據が注意される譯 と云つて、 へ働いてゐると見られる。 山神へ この言葉の發生根據が悉く宗教的 の信奉は可なり深く、 との 點 嚴 力 肅 6 Ш な氣 であ 葉が 持 な 妙

速斷いたし難 ふから、 含まれてゐる つて前述の如き結團に於ける一 部分にあると解するのも、 語學の方面 この言葉が如何なるものであるかの解明 S 如く見られ から S はゆる の檢討も大いに要されると思 る 一山 多少の疑が感じら 0 C 種 窩 ある。 の隠語的 隱 語 併し之には な な性質 3 n 8 は 從 0

尚、

言

信仰と之に 族 n K から して 何等



第二圖 椈の山神木



第一圖 朴の山神木



第三圖 スリズエ



第四圖 スリズエに倚つて構へたる獵師



第五圖 熊穴の燻し

でその言葉の作成又は發生の根據に現はれてゐるか の點は注意を要する。 併し宗教的な根據 のみに 重 點

を置くのは偏頗であるかも知れない。

つてゐると、 赤谷村瀧谷の外門宗六老人から山言葉を話して貰 獵師仲間 の發明語であつたといふ感じ

を深くする。

勿論發明には違ひないが、

それが割合

來の言葉の上に附ければ大抵出來上るのだとさへ言 n やさしく考へ付き易い法則から、 つて居た位に、 たといふ認識を深めたのである。サイとかナを在 **獵師自身は比較的平俗にその言葉の** その多くが作 成さ

古老は話上手な點があつたから、 性質と作成を解してゐる趣が看取された。 之を考慮する必要 併しこの

礼

る譯である。

の移入が敷へられ、 雪崩とか その少部分には里言葉 地形 0 語 10 至つては里

に今少し廣く範圍をとると、

はあると思ふ。

山言葉を狩の際の特種用語といふ風

言葉と同じものを採り入れてゐる場合が多い。

東日本に於ける狩獵者とその狩獵

高橋

點、純然たる山言葉の限定とその拾ひ採りが紛らは

L 地々々に依つてこの言葉に大變な差異混入のあるこ S 又特に赤谷村のものを聽いて知つ たのは、 ±

とである。

IC, 併 アイヌ語と同じ發音のものがこの .し又過般の學會で金田一京助氏が話 Ш 言葉の中 さ

机 た様

5 ら幾つか拾ひ得られることである。 該語の全部が單なる發明的な造語といふ見地 5 の點から見る

(95)

らないが、 アイヌ語との みからは解釋出來ないことになる。 日本語としての古い言葉の混入が考へら 同音同義語のものについてのみとは限 そして必ず L

より聽取した當地の「山言葉」を掲げ参考に供して きたい。 次に赤谷村瀧谷の磯師外門宗六氏(當年七十一歲)

鹽

20

7

デワイ

な

上層雪崩 (純然たる山言葉ではなく アマブタ

地方語であるが狩の際にも用ふ)

石

イワカル

アヲザイ

鍋の蓋 大人、自分より目上の者にいふ。

イワッラ イシゴキ イシカル

オーマタギ) ウカシ

松杉等の薬

斧(よき)

大繩(綱)

オーネジリ

オータタキ

オビキ

杓子、柄杓

カイアゲ カイナメ

米耳

クバイ(クバリ)

熊のしょ(熊のこと)

スタッテ來た

ーレイ

山から

ステ

セッ 77

ゾ ヨ ソョギ

犬、この酸音はシェダとも聞える。

コアデ コマタギ

コタタキ

コネジ(リ)

小縄(麻紐なども云ふ)

サイ サイモッコ

水

サイクグリ サイワラジ 著物

手桶 熊の血、人間の血 雪沓(藥沓)

サイオケ

死ぬ 能(又は人間)の腹仔

ジンキチ

サンゴ サジラ

シーズヱ

シャヂナル

棒、杖。マタギが持参する。 スリズ

ヱである(後に詳述する)* 雨が降つてきた。

(96)

カス

ツキガラ	ツヂカル	タルベ	タキ
突いて投げる棒へ如何なるものか不	土、粘土	泉、水垂れ	焚き不
	ブジル	ヒラマタギ	ヒロシマ
(動詞)	獲物の肉又は	女	人間のある里

ツキガラ 9 突いて投げる棒(如何なるものか不

(辨當を入れる繩編囊などをさ

ナブクロ

ナシバ テラシ ツタイ

柴

トリ

ナネコ

猫 す

×

槍(狩獵用)

ナデ

底雪崩*

雪崩。ニオチル(動詞) 頭(能及人間の)

ナメヅリ

フルシ 3/ カ 7

ス

寢る(動詞)

飯などを分配すること

年寄つたもの(獣叉は人間)

乾物する(動詞) ヒロシマに同じ。

牝熊 人間(總稱)

メジカ

タギ ッポ

ル

モモザヤ

V

1

熊の仔。

ど。* ツヤレィ、二ツヤレィな

風(總稱) メンパ(曲物の辨當入)*

熊の仔

ワカメ ヲジカ

" 7

せ 19

次には赤谷村上赤谷の獵師より聽取したものを掲

げるが、前者と重複するものは省く。 當部落では尚

この山言葉が嚴肅に用ひられたのは明治廿四、 五年

東日本に於ける狩獵者とその狩獵 高橋

ヒカリ ハナザヲ

バイマタ

ッケカラマ

牛

手拭

九七

W	シメス	シラミタカリ	シガミ	サイムクリ	サゲチョウ		サッカエス		サジラ	クラ	カル	カッ	カナテコ	カナヤマ	オーガタ	オネジ(リ)	エデコ)	ウタイ	アヲケラ	頃までだと云つてゐる。	
と。	(動詞) 山神へ供へた 燈明を消すこ	山鳥	羚羊の糞へどんぐりの實に似てゐる)	魚	爐鉤	サッカエス」	(動詞) 里の家へ歸る、「ヒロシマへ		熊、羚羊の血、サはシャにも競音す		險阻な岩場 *	お椀	鐵砲	金襴	長い著物	大きい郷	羚羊の仔*	酒	羚羊	つてゐる。	
	ŀ	テコ			タッ					タヨ		タデ・タチ	タマリ			ス ノ (1)	ス テ)	スタリ		シシオヤカタ	
又大きくない春期の上層雲崩をもい	雪橋、動詞として「ト	鐵砲、カナテコの略稱。	ろ。大きいのをオーダッ。	ドとはいはぬ。多く雪溪をなすとこ	側稜間の窪み。ヒドに當る所だが	へる場合もある。(後述參照)	澤底に著くやうにと、タ	獲物を雪溪上に轉がす場合、	な目出度い時にも唱へる言葉で、又	太夫、神主の意、熊を射止めたやう	いふ贈嚢のこと。	レンゲ膽(肝臓)の脇についてゐると	贈汁(贈襲中に含まる)	等で上を蔽ふう	の小屋、多くは雪中に穴を掘つて柴	假小屋(狩の際山中にかける露營用	能、羚羊の糞	雨	大將ともいふ。	狩の際の親方。ヤマサキと同じ。	

(98)

	ジカッギ	
Jan. 1. 1. 10	シシャマ(熊狩)の荷物擔ぎ。自分で	*
プラーフノレ		ヒロシマ
つめ司ンテナー・・しい。	含む。前項參照「ヒロシマミエル」。	山から見て自分の部落といふ意味も

トモジ ٢ アト ボ 燈明 名き据くこと ブンジル フシラ グレリ く重言し分けてくれる。 ジル参照。 (動詞)分配する、平等割り。前項ブ

獸跡*

タナ木(春木)

ナメヅリ ナガシゲ 熊、羚羊の舌

荷)かつぐと死ぬ」といふ。

ノタッテ

キタ

に腹まで摺つて步行する形。 能のノダリ」。能が雪の降りからり (動詞) 雪中を困難して來たの意。

熊の仔、親離れした年の一匹物。四 尺五寸から五尺位に成長してゐる*

ハッケ

人間の頭

ハッヤマ

ハハパナレ

能のあばら骨 岩者の初獵、一年の中の初獵*

年寄り(フシカ参照)。

山大將(狩の)、親方、年長者をさす

意味がある。

ヒシカ ヒシカ ハザネ

雪崩、動詞「ニ

金重

ボヂ

炊事

1 7 ・タク カホイ

水

石

キタ」「オモニ

ホドカル ホドムシリ

ボーシ

モギレタ

炊事掛の者

熊、羚羊の頭。後述する如く狩の際 の大將をいふ場合もある。 (動詞)獣が逃げてしまつた。

マサキ

熊の仔三歳のもの。

ヤライ

熊の仔一歳のもの*

熊の穴、熊の寢る所。

前項ヤレイ参照*

ヤス ワカメ

南會津郡伊北村田子倉の獵師間にも次の山言葉が

傳へられてゐる(同所、 皆川幸壽氏談

東日本に於ける狩獵者とその狩獵 高橋

本に於ける狩獵者とその狩獵

熊の血

ントー

短い刀

=

=

ソヨギ 及

> 簑 風

パッカリ) グサ

ティ

斧(よき)

とゝで上記の言葉を説明すれば、

卽ちサイ、ナ、

て、

ナの接頭音、

タタキ、カル、ネジリなどの接尾語

シ マ '(3) を基底としての造語が見られる。又、ヤマセ、 ホティ、 ワッパなどの里言葉の轉用が目に付 E p

3

秋田縣由利郡上鄉村では雪原のことをホテハラ

詳かにし と云ふが、このホティと直ちに關係するか否か未だ と云つてゐる。 ない。 越後銀山平 ホティの方は古い言葉のやうだ。 地方では山言葉で雪をシ

く現はれてゐる。

他の大部分は物體の觀察から來る氣轉の造語が著し

には忌詞又は隱語としての要素が見られない。之と 而して富士卷狩の主として鹿を對象とした「狩詞

師の忌詞といはれる「沖言葉」と山獵師の「山言葉」と

Ŀ

述

山

言葉」との差異は注意される。

併し、

海

獵

はその對象は各と異なるにしても、發生的な根據と

か造語法の點に於いて比較が要されると思ふ。

そし

櫻田氏の研究はこの點から見るも一つの示唆が含ま の狩師と海邊の漁師との文化的聯繫を記されてゐる 親縄といふ民間漁具による一つの開聯から山 뽇

れてゐる。

註1

東京人類學會、日本民族學會合同第二囘大

會講演。 日本山岳會第八十一 囘小 會

承」ニノ七。

2

「旅と傳説」九ノ六、

笹村氏記事。

民間

傳

「民族學研究」第三卷第二號〈鵜繩資料

3

(100)

9

四 「マタギ」とい ふ語 並 1=

狩 獵武 具 と狩法の變 遷

て記し 狩獵者をマタギと呼ぶが、その語源的な根據につい B が國の一 たいい。 柳田國男氏編 部主として秋田北 「山村語彙」 部、 津軽の一部では にも マタギ

も謂つた。之を携へあるく行旅人は獨り步荷持の 條に「……マタッポ古くはマタブリ、或はマトリと 源は日本に在ると思ふ」と説かれ又「マタッ 此以外の地にも行はれ、 の語が牧録せられ、「……獵人をマタギといふ語は アイヌ語でもさうい ボ ふが語 2 0

だらう」と述べられてある。 しくは地下の寳を尋ねる者が、俣になつた木を持あ いた例は至つて多い。マダギの名の起りも多分是 **共後、** 秋田 の武藤鐵城

では無かつた。外國でも金銀鑛を探し水を求め、

\$

氏が誌上に、從來の諸記錄に表はれ

たマタギ

の言葉

落つくとしても、

尚一段と汎い部面か

6

考證の必

要

東日本に於けを狩獵者とその狩獵

高橋

ギと普通人を呼んで狩獵者と區別する)の語 錄して紹介されており、 を意義あることとされ、 7 タギに對するセタギ (鳥海 阿仁のマタギが「タタク」 **尚且つ武藤氏の説として、** 山麓百宅部落ではセタ

の存在

又は「マダ剝ぎ」説を菅江眞澄の「十曲湖」から摘

5 といふ語を獲物を得ることに使用 尚アイヌ語のマタク (織の意) して居ることか と此のタタクと

て早川孝太郎氏は別の誌上で「武藤鐵城さんは、或 殘る事になる」と考證を試みられてゐる。之に對 タクやタクで解釋出來れば結局セとマ の間の闘聯を想定せられ「タギの語が若し前述のタ の解釋だけ Di

(101)

れたが、之も土地の傳承だけでは無理らしい。 はセタギの語と對象的 に解釋する道があるかと解 力

資料的根據が未だ薄弱である。 又鬼、股木、まだ剝ぎ説等共に示唆的ではある 假りにその何 n か

0

るだけ窪めてあることに自分は嘗ての採訪

の際氣付

見されてゐる。それは「コダタキ」の解説として があらうと思ふ」と述べらる。 併し早州氏は一方で非常に貴重な一つの資料を發

こなげべら(雪箆)にて、マタギは常に之を携ふ。

時、之を地上に立て、銃身を上端に握えるといふ。 上端即柄の末端は水平でなく、 羚羊等は之を以て打殺す。 亦鐵砲の視ひをつける 內 側 K 稍窪めてあ

る。之に大小の二種あり、大は約六尺、小は約三尺

正夫氏採集の山言葉では「こなぎ」はテトリと呼ん 五寸、一般語として、前者をオナガヒ、後者をコナ ガヒといふとの説もある」と記す。秋田根子の佐藤

で居り又所謂

「秘卷」中に記す名稱は大長柄、小長

とも呼ばれてゐる雪中步行用具としての櫂狀の雪箆 でもある。 同じ物であるのは云ふ迄もない。之は根子でサッテ 柄となつてゐるが、早川氏の採集によるコダタキと この用具の上端が銃身をあてがふに足り

> かず、 るが、その全部が窪めてあるとは限らぬらしい。 今度私は前述赤谷村の獵師等と山に入り狩獵の有 後に早川氏の採集記事を讀んで知つたのであ

りのまゝを見せて貰つたが、其の節出かけた獵師 (擢り杖)と呼ぶ山用の單杖を持つて

又は雪の斜面などを登降する場合に、之を手に持ち 中はスリズヱ わた。之は特にタツと呼ばれる雪溪(ヒドに當る所)

要缺く可からざる杖である。然しよく氣を付けて見

膝を折つて所謂制動をなしつゝ降る時に役立ち又必

其れが動かぬやうに押へるためで、 凹みを刻みこんであり其より少し下部に紐がつけて ある(第三闘)。 つてゐた。卽ち射手のものは上端において「蛇口」に ると、射手のもつてゐる此の杖が他の者のものと異 上端のこの凹みは銃先を當てて且

へるためと常には手に下げる便利のためであると云

紐は銃先を結

(102)

つてねた。事實、 第四圖のやうに 此の杖を利用し

特に澤向の斜面等では構へるのである。

この際

つており、

斜させて立てるのが常である。之に用ひる材は主と は發射した後の反動を考慮して、杖を内側に少 し傾

してミヅキ、ブナ、 のは長さ一二〇糎、丸み九・五糎上端の 一・五糎であり尙尾端には ホフなどで第三圖の中右端のも 石突が 取附けてあつた。 凹みの 深さ

との石突は無いものの方が多い。 イヌは狩獵に向ふ場合、 エキムネクウァ Ekim-

nekuwa

といふ單杖を持つて行く。Ekimne は「山

狩に行くこと」Kuwa

は「杖」を意味する。

杖の

つてゐることは知里真志保氏から伺つて旣に記して 獵に出かけることを日本語で「マタギに行く」と云 のもあり、上部には家印しなどを彫刻する。又、 長さは一八〇糎以上あり上端が杈木になつてゐるも 狩

> 端の叉になつたものがあることから、 をもつものも尠いやうである。 も权木を訛音する言葉許りでないし、宗教的な匂ひ り廣い範圍にあることが知られる。又呼名も必ずし に权木形がその使用目的は各々異なるにしても可な 述赤谷村獵師 そこでアイヌには狩獵用として根木の杖があり前 他の山村に於ける背負梯子用の息杖に上 の射手がもつ杖が稍杈木に近 秋田根子の部落で使 との杖の 形をと (103)

部博士の著に S く者が权木を持ちあるい が何となく勸請といつた宗教的臭味を傳へるが、 用されており、呼名をカンジョウといふ。この稱 用されてゐる荷橇の取手は自然木の叉のある木が使 は同じ類である。或は全然他の意味のものか知 にはまだ解釋のしやうがない。 前述「山村語彙」には外國の金銀鑛を求めて 「是(神枝)ハ獨逸ニテ祈願ノ棒、 た事が 示され 併し根木であること てあるが、 佛 れな 渡 步

日本に於ける狩獵者とその狩獵 高橋

聯せしめるのは資料的にも尚多くのむらがあると思 といふ言葉は之を日本語なりと意識して、即ち日本 は 作ら秋のある杖が宗教的呪力又はその 0 る。 材 牛、 つと假定せられるとしても、 的なものであつたことが知られる。 V y 恰 料 れる。そして、 中に棒を神枝と云つてゐるのは注意したい。併し カラ降ツテ十八世紀 E テ鑛夫ノ棒、 モ羅馬字ノY字形ヲ成シタルニ股ノ木ノ枝ヲ切ツ 外國に於て、 ニ用ヰラレ 中 ノデ榛ノ枝ヲ最上ト 古ハソレ 日本に於ける 英國 タノデアリマス云々」と述べて ガ變化シテ遺失物ヲ探 二权の木は一種の呪力のある宗教 アイヌが用ひる「マタギに行く」 ニテ 狩獵者とその ノ終リ頃ニハ終ニ鑛脈發見ノ シマス、 ハ神ノ棒 直ちにマタギの杖と闘 太古ハ禮式上ニ用 下稱 狩 獵 赤谷村の山 他の威力を持 ス スルモノデ、 高橋 = 用 + 言葉 あ 7

語でアイヌが話をする際にこの語を用ひるといふか

知里氏談、

金田

一博士もこの意味のことを學會

氏談)。そとで、當地の山言葉では「マタギ」を基語と 呼んだこともあると云ふが確かでない(井上平次郎 在では普通に「鐵砲打ち」と呼び、

以前はマタギと

か; たものかを考へる示唆となる。「山言葉」の幾つか 有のものか或はアイヌのもので日本人に嘗て残され と思ふ」と符合する。そして之はマタギとい で話されたと記憶する)、この點は「山村 ふ「……アイヌ語でもさういふが語源は アイヌと密接な關係あると云はれる日本人の固 日 語 本 ふ言葉 K ある K V

れが獵師であれ普通人であれ總て人間はマタギと呼 て當地の山言葉では、 は人間(一般稱)の意に用ひられ、之に大小又はヒラ んでゐる。 をつけて大人、子供、 ついても同様なことを確かめたい 前記赤谷村採集の語彙の中、「マタギ」があるが之 併し獵師以外の第三者は獵師 山中にて人を稱する場合、そ 女を表はさしめてゐる。從 のことを現

して種々の造語が見られ、秋田に於けるやうに、 7

タギとの對蹠語としてセタギを態く設ける必要がな

といふのは意義がある。 5 との 點から百宅部落でセタギを唯の人に用ひる 倘 四國山間の一 部では狩

の「マタギ」との比較が考へられる。 東北

阿波美馬郡西祖谷、

東祖谷雨村では獵師をマト

ギと 地方

つて居らぬ

(武田明氏談)

などがあり、

獵者をマトギといふ語があり(櫻田氏談)、

併し乍ら

要するに、秋田、越後の各

部に於けるやうに前述

されたことと解してもよい。「まだ剝ぎ」説の提唱者 れたのは、「股木」語源説に對する一つの示唆が附加 の、上端に細工のしてある杈木形に近い杖が見出さ

條にも本説を詳述してゐるが、直ちに賛意は表 菅江真澄は「筆のまにまに」の「つゆくまやま」の しかが

ておく。

たい。「又鬼」説も傳説としては面白いが根據が薄弱

である。

或はセタギとの

對蹠説も尚多くの考究の餘

東日本に於ける狩獵者とその狩獵

高橋

地があるとすれば、今迄の處では「股木」説にまづ

生れるに至つたとも考へられない。そして同じ权木 比較的實證的な根據がある如く見えるが、 つてねたからとの理 由から直ちに獵師にこの呼 权木を持

が

杖の所有者であつた山民の中、特に獵師のみにこの

まで宗教的事實とこの权木杖が尠く共發生的 呼稱が何故に使はれ殘つたかとい å 點 どの程 は關 度に

K

れる事實が赤谷村獵師の成年式行事にこの度見出さ て又、マタギ語源を別の角度から暗示するとも思は 聯があつたかの點など尚よく考へていきたい。 そし

(105)

れたから、後章に述べることとする(五章七参照)。 次に尚との問題に關して参考までに二、三を記し

ては、 るのを見受けた。この木は多分マタギ又はマタヅ 1 兵隊が叉のある木を鐵砲と共に 明治戍辰の戰の際、越後新發田町附近に於て に肩に擔 いでね

タギ 三日 と呼 は狩獵者のみに限らないことが判り、 反動を防いだものだつたであらう て活躍したことは既に根子の佐藤富松氏から聽 ばれ、 連が銃 市古老談として新發田町 此 の談話によると权木を用ひて 銃を射 の上手なる事から同じ戍辰役に徴發され つ時、 銃先をその叉にあてがつて 金塚友之丞氏が (北浦 銃を射つたの 秋田根子のマ 原郡加治村 話され いて

カン K 木の如何なる形をしてゐたか、 常に参考になる。 おつたが、 入つたのか或は其れが兵士の單獨の發明であつた 九 力 之に新發田附近 當時 との資料 の兵士が持つてゐたらしい权 のみでは判明し の例を考へ合はせると非 狩獵者の方から兵士

参照)

の如き櫂狀雪箆との二つが數

76

九

る。

そと

の杖や雪箆が

處では、

銃身臺として應用されたものに、

越後赤谷

の如き杖状のものと秋田荒瀬や福島川入

K 營の際の支柱としての效用の一 於い 係 併 がある。 L ては特に登山 何 九 K 杖の使命は銃の臺としての他 して も銃器使用とこの収木杖は密接な 校とし又は秋田に 面をもち、 おける如く露 ic 若しもそ 獵師

藩

岩藏

何

0

判

斷は

な

つたかが最も問題となる處である。 で銃器使用以前において、どんな形

され ば、 凹みを加 銃器を使用する時代になつてから、銃身豪としての から保たれてゐたかの疑ひが持たれる。 の形が同じ様に以前から傳へられて 銃器使用の時代に至つてこの杖の利用 た譯である。 工したかも知れ が、 斯う都合よくその ない。 兎に 角今迄に 居 ったとすれ 或は獵師 形 狀 價 が以 値は 判 つた 地 奶 前

川氏の採集記事によれ をもつて獣と戰ひそれを捕獲し つて居るが、 2 の安井要之助氏から贈られたものであるが、 7 タギ 銃器を手に入れる以前 の武器に ば「家に傳へて ついて私は以 たか 0 は 前 から 如 居る鎗は秋 點である。 何 疑 なる武器 ひを持 早

(次項附記

氏 (秋田萩形部落の山田岩藏) の代になつて、 熊に

何度か嚙みつかれて柄を損じ、 今は二ケ所程蔓を以

典。

て総 を許さないにしても、斯様な經路は考へられる。 全部との種の徑路を辿つて手に入れられたかは斷定 いて居る」とある。 現在 マタギの保管する槍が

範圍は、 そこで北浦原郡赤谷村獵師によつて知られてゐる 次の如くである。 最も古い武器としては槍

銃を一般に使用するやうになつた。當地に於ける槍 は主として若松方面から移入された。 時に槍をも持参した。 (ナメ)で、明治三十年頃までは火縄銃を使用し又同 同三十六、七年頃よりは村田 (同村、佐久

據ると、 間 が天文十二年(今より三百九十四年前)で、その後 新平、 種子島 井上平次郎兩氏報告)。歴史の傳へる處に へ荷衛人によつて銃が傳へられたの

たと思はれる

於ては恐らく現在見られる卷倉などは行はれ

なかか

(107)

が、 銃が何時頃から獵師の手に渡つたかは未だ判らな 獵者には想像することが先づ難 の當時の年代においては尠く共武士に非ざる山間 何れにしても其れは天文十二年よりずつと遅 とすれば、

東日 本に於ける狩獵者とその狩獵 高橋

維新の當時、

幕府の兵制改革の時に新式鉄器が輸

までの

「種子島」

5

はれる火縄銃は

逐 入

た時期である。さうすれば、之以外に於ては獵師

104

は後に詳述したいが、槍を主として使用した時代に とは極めて密接な關係があるので、 窺へる。そして之等獵師の武器の變遷と獸の狩獵法 中央に於ける推移が山村に入り込んで行つたことが の變遷とを比べて見ると、 之に改良が加へられて今日に及んでゐる に廢されてゐる。その後、村田銃の發明があり この歴史的經緯と前記獵師等が手に 餘程後になつてこれらの この事項に就 した銃器

又、富土の卷狩に見られた如き弓矢の使用は、そ 火繩

東 本に於ける狩獵者とその 狩 獵 高 橋

IC 譯で 銃 器 0 使 用 何 は れにしても、 なく槍又は 其 の他 の武

具

から

考

られ

法 は誠 に幼 ある。 ギ 生業の 稚 なものであっ 古さの問題も關聯して考へ たと思はれる。 銃器をもつ以 前 られる 之と共 0 狩獵

12

7

3

時代に 0 で、 武器の使用變遷と共に考 於 それが生業として 5 て秋田 根子の獵師 の基礎を確立した時代はこ へられてよい。 達は藩製築所 俳 し舊藩 熊の 膽

當狩獵も行つてゐたと見なければならない。又、 鐵砲 をも つてゐたことは古文書に も見えてゐる。 當

を献上してゐる。

2

0

當時は既に鐵砲も所持して相

から下賜され

たものであ

b

熊

の贈り

皮はそ

礼

献

それ

から前述

心

卷

などの傳搬時

期と經路等にも

3

牛

ヘラとい

ふ構

状

の雪箆を獵の

際に

持参し

時

け 注意を要するといふのは、 n ば之等の卷物 も敢て手に 相 入れ保管する必要もな 當に獵が行は n て居な

附 記 力

0

たであらうか

らである。

福 島縣耶麻郡奥川 村彌平四郎の獵師は火縄銃と槍

T

を並 行して使ふ時期を永くもつた。 叉、 この槍は 米

澤の孫六で作つたものである。(當地赤城 同 郡 1 木村川入の 獵師は明治三十七、 氏談 八年頃

して銃器以前 を使ふやうになった。 に多く使用 槍は現に した。 との 殘つてゐるが、 槍 は若 松の 殿 È 樣

で火縄銃を使用

Ļ

大體日

露戰役を堺として村

HH

銃 ま

る者は若松鶴ケ城へ徴發され 上した。戍辰役當時、 木地挽きて且 た。 叉以 ′ 鐵砲打ちであ 前 0 獵師 は

(108)

の上 一端は凹みが附けられ、 そこに銃をあてがふこと

が出來た。(當地、 小椋長太郎氏談)。

6

部落を採訪 經 考 5 路 の二項は昭和 たい。 とか、 の途次、 戍辰役の際の徴發など秋田方 狩獵法においても槍鐵砲以 十二年九月初旬 聴い たものである 2 かい 九 前 面と併 武器 K 0 木 \$ 入手 地 S T 世 屋

豆



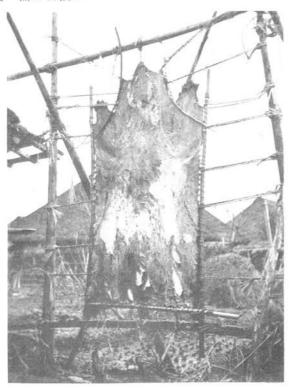
第六圖 解剖のお祭り



第七圖 解体に從事する人々と柴(右方)



第八圖 熊の皮張り



第九圖 熊の皮張り(背面)

は當地方で 0 種のオトシ、 秋田におけるヒラ、 オ

チ 3 は秘事に屬するから餘り書くことは避けたい。 は れるものがあつたらし 50 併し此法は

3 7 タギが先立となつて村を開き、即ちマタギ

が開墾には先立となつてゐること(「秋田マタギ資料

國中嶽々へ山立を被成ける也」(同上著二二頁) 二百页)、 萬三郎は山達の先祖なること並に 「日本 など

獵方面 が根子狩獵者の間に信奉されてゐるのは、 てすべてマタギが教導の役割を果しておつたといふ の他に、 山を歩くこと村を開くこと等に於い 尠く共狩

その行 傳統的信念が窺ひ知られる。 に承認されてゐる。そして山伏は錫杖をもち或は他 杖をもつて然も之にその修業の等級に從つて金剛 法のために山に臥して艱難を嘗めたことは既 又一方で修驗の山伏が

> る 。(8) を果しておつたことが知られてゐる。 山伏は又、山達として精神的にも衆生の教導役 マタギが獸射

に述べた。果してマタギと山伏の場合に於ける、 師との關聯にそれを求めてゐる傳説のあることは旣 殺の罪滅についての安心立命を得やうとして弘法 Ш 大

聯を見出し得るかは今の處解明されないにしても、 又は山中を對象としての教導的役割にどの程度の

關

注意したい。 との兩者の山 て居たこと並に狩獵精神 歩きに關し佛教と杖が或る役割をもつ への佛教、 修驗道 の影響に

(109)

思ふ。 確保し得たのは恐らく舊藩時代の熊膽献上の仕事 は古いが事質問題としては、さう遡り得られ 聴き得たとするも、そしてマタギの開村は傳説 説的な根據については秋田根子に 併しマタギの先祖がヤマダチであるといふ半ば傳 之は前 述の如く、 狩獵が生業としての位置 \$ いてその幾分を ぬ様に 的 K

東日本に於ける狩獵者とその狩獵

られ、 杖、

之等の杖に各々佛法的な意義解釋を施してゐ

檐木の三種の規定をなしてゐることが見

檜杖、

H 本に於ける狩獵者とその 狩獵 高橋

以前においては、 その時 同じく藩から生活的な保護を受けたと見るべき時 期を考 るからである。 假令山間を漂浪して生活の安定を 同 時 K 木地 師等 2

獲やうとした期間が永いとしても、 のみを事とした一種特別なる種 族 とも考へられな 昔から山 中漂泊

平野 たと思ふ。 前にも記したやうに、その環境によつて彼等は から山に入り或る地を得て定住するやうになつ 勿論之も今の處なほ推測に過ぎないが、

を離れ 吾々農民の系統と血筋においては全く別個の種族と は思はれないからである。 T の隔離された生活の爲め、 只永い間 自然に開けた村 の平野 又は Ш 村

べて見たい。

昭和十二年四月十三日

(晴)

の午後四時頃

前

2 「方言」第七卷第一號一二頁 旅と傳説」第九年第七號「マタギの話

方、

Vo

人達から白眼視されるやうになったのは疑ひな

- 3
- 4 「秋田マタギ資料

5 日本山岳會「會報」五四號

6

「東西古今ノ山相學ヲ論ズ」一五一一六頁、

7 博士講演筆錄

「方言」第七卷第一 號一五頁

8

「修験三十三通記」乾の卷

五 赤谷村狩獵資料

師達が行つた熊の解剖とその祭りの様式について述 次に北蒲原郡赤谷村上赤谷並に同村瀧谷新田の獵 1 熊の解剖

谷國有林內の營林署小屋より約二里奥のミノクラ澤 ノ又グラ ○米の一側稜南面)の穴に入つて、(內倉川と勘左衞門グラ澤落合點 0 東

を獵師達 約八〇〇米の (總員十一名) が漸く見付け出した。穴熊 の穴に入つてゐる熊

の捕獲法として當日行はれたのは先づイブシ(燻し)

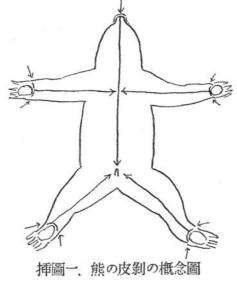
(110)

東 日本に於ける狩獵者とその狩獵 高橋 面

の上 解剖は許されないので、 やうに銃を發射する。 手が待ち構へてゐて、 に堪へかねて柵に寄せてくる處をヤマサキである射 入れる。 松葉等を焚き烟りをその穴へ笠などによつてあふぎ をかけるアヲリダシであつた(第五圖)。 が含まれてゐる。 かける。 を要した。轉がす際にタヨタヨタヨー んだ。穴のある澤向きの斜面は傾斜がありこの場で の限定はない)をもつて、 く似てゐるが、まだよく判らない。 にち 同 を轉がして落した。 時に完全に手中に入つた目出度いと云ふ意味 かに仰向けに寝か 同時に穴入口に留木の柵をする。 危い物に打ちつからない爲めだと云つてゐ 秋田マタギの唱へるショーブとよ 二酸、 頭部即ち耳から耳を貫通する この その直下の澤底にまで雪溪 Ļ 下顎の眞中から生殖器へこ 射たれて熊は完全に死 アヲリ 山 刀 (短い ガ 熊は雪のある澤 と獵師が聲を シは約四十分 穴の直面 もので種 熊が烟り C 類

> 先の 最初の準備がなされる。掌には所謂アリノスが厚 生殖器の處に合はせる(挿圖一)。斯うして皮剝ぎの 熊は牡) 々手分けして前肢、 第 線 に向つて直線に第一刀を刻む。 に向けて切りおろし、 後肢の各々掌 特に後肢のものは の下 カン 他 6 中 0 央に から

各 0



秋田根子又は秋田檜木内で矢釜しく云はれてゐる皮

剝ぎとり之には爪を皮につけたまゝ殘す。の 爲めか或は斯の如く旣に形式が省略されてゐるの 5 で繰り返し 向ける)を兩手にもつて、千匹萬匹と二度許り小聲 瀧谷新田)が(第六圖)の如く皮部 手)に向けて仰臥せしめ、 部が終ったところで、俯向けにして背面を剝ぐのは 附 えらび汚れた雪を拂つて、 た。斯うして全部剝ぎ終ると、その傍の別の場所を 云ふ迄もない。 分けして皮と肉を剝がし、徐々に背面に及ぶ。 は全部くるりと剝ぐ。 の骨は肉の方に残すが、 の時は旣に いてゐたが、掌は全部肉につけて殘す。 日本に於ける狩獵者とその狩獵 司 H 時に皮を振つて祭りの儀式を濟 生殖器はそのまゝ が暮れやうとし時 腹面は前述の線から各人が手 指の皮は指形のまゝ上手に + 肉部の頭を澤のエリ (上 マサ 間 丰 肉 (頭は澤の上手に の都合があつた (須藤新平氏、 K 高橋 つけておい そして、指 頭部の した。 腹面

> なるものであつた。第六圖で傍の一人が前肢 の願ひであると云つてゐたが、 へ言葉は、一匹が千匹にも萬匹にもなる様に山 れたことで、行事とは關係がない。「千匹萬匹」の唱 た麻紐をもち上げてゐるのは、 の振り違へ等のことも行はず、唱文も斯の如 ミレと唱へる。オドはオトミで未だ獲れるや 時に又、 撮影のためにして吳 オ につけ ミレ

皮

解剖して内臓全部取り出すことをフワケ と云ふ。 分けしてフワケにか 肉體は又元の皮剝ぎの場所に戻して各人手 ことろ (腑分け

臓の解剖になる。

皮を剝ぐのをカワメタツと云ひ、

略の形であつたと思ふ。この祭りが終ると、

愈女內

肉

へかけるといつてゐたから、

右の場合は恐らく省

かい

何れにしても、

肉に皮をかぶせることもなく、

(112)

うにとの言葉である。先に部落

(上赤谷) で聽いた

話によると、この「解剖の祭り」の時に、

皮を三

囘

オド

にも見える如く四肢の肢首を結はひる紐に

0 はすべて豫め用意してきた新しい麻緒を用 時 方では附近から柴を切り出 し第七圖のやうに ひる。 2

てて、それを麻緒にて結はひ、里へ運ぶため 傍に積んでおくが、 之は解體後、 各肉片の周圍 の準 にあ 備

である。 この柴には クロ モジと山 サ ル シ は 撰 ばな

ち、之は山神のオシメの木叉は使用木であるから尻 てねる。 に敷くものでないし、 い。この二つの柴に對しては獵師が一種の信仰をも 解體後の肉は適宜に切り分け各々をこの柴 又使用してはいけないと云つ

込む。

そこで私共が普通にクマノイと云つて見せられる

五本 る。 山言葉でとの麻緒はコネジリとも呼ばれる。 (原則の數) に包みその上を麻緒で三ケ所とめ

され、 自の手分けに 爲めか、この方式の順序としては殆ど見出されず各 そこで解體であるが、 後に腹 面の切 よつて、 開 頭部、 10 日が暮れやうとして急いだ J 0 四肢が て、 內 胴體から切 臓が摘出され り離

> た。 との熊は六、 七歳と獵師によつて鑑定され體重

が、歳をとつて居つたため脂肪が尠かつた。 三十貫と推定された。 の狀態によつて獵師は所謂クマノイ(熊膽)の このヤロウジシ (牡熊) 熊穴がよいと體の毛 の毛は極めて良 が 月の輪 大き カン 切 つた n 約

S

大きくても輪の色が赤くさびてわればイはよいと見 く小さい、半月で白いのはイが大きく良い、 を推定する。 即ち月の輪が眞白で巾廣ければ ιþ イが極 廣

る。 熊の胆嚢内の脂肪 は如何なる原料から採取して製造するかと云ふに、 ものは、 當地井上平次郎氏談並に報告に據れば、 硬くかたまつた黑色の固形であるが、これ (胆汁)を乾しかためたものであ 解剖後

(113)

その膽汁をワッパ

(辨當入の

曲物)

0

中に納め里

東

日本に於ける狩獵者とその狩獵

高橋

方法として炬燵の中へそれを下げて温度が他に漏れ 持参する。さうして、 乾し上げるのであるが、 其の

日本に於ける狩獵者とその狩獵

高橋

ない様に装置し普通五十度より七十度迄に保温 して

置く。 稍々かたまると二枚の板の間に挟み厚さ二分

0 か居らない。 を要し、 程に扁平のものにする。全部乾し上がる迄約一週間 割合に分量が尠かつた。 この仕事に從事し得る者は當村にも三人し 上述の熊のイは乾し上り十匁あり、 普通、 乾上げるとその量 體

した串

(クロモジと山ウルシを避ける) 三本をアマ

は各々分擔して背負ひ、ヤマサキ(シシオヤカタ、 ないで棄てた。 解 剖の際、 生血は多く流れたが、 前述柴に包んで荷造りした肉の各片 獵師は血 を飲ま

かい

[[4]

分の一になる。

Ш

大將とも云ふ)

が先頭に立つて歸途に着いた。

柴

にさし、

はこの際、楓(モミジといふ)

を使用した。

る。

註 2 陸測五萬分一、新發田、 民族學研究」第一卷第三號、犬飼哲夫氏「アイ 飯豐山參照

小屋に於ける祭

ヌの行ふ熊の解剖」

參照。

2

め、こゝに燈明(蠟燭)、 た祝ひをする。小屋の東隅を假りに山 Ш 小 屋に歸つてから、 神酒を供へ同時に肉片をさ ヤ マサキが司 會で熊 神の居處と定

の獲れ

(シメスといふ)供物を下げて、爐邊に坐し た 一同が 師が獲物の御禮を申上げる。暫くして御燈明をけし

ブタ(笠)にのせて上げる。之は山先が行ひ續

いて獵

神酒の分配に預かる。三本の串を爐火にて焙る。

(肝臟、 の串にさす肉は舌(ナメズリ)とタチ(胆嚢)とキモ 一名レンゲ)である。タチは三つに切つて串

即ち、マストリクラ(桝取倉)、オドカクミバ、 各々にヤマサキ がクラ (狩場) の名をつけ

音を立てる。音を立てた順に從つて明日の狩場を取 ゴンケッと。焙つてゐると膨脹してきてボンと軽い

b 極める。 この占ひが濟むと、 串にさした各々の肉

は、 0 るのでオミコク されるのが原則である。之等の串の肉は山神に供 肉は山 此 處に居合した者の數だけに切つて各人に分配 神の オカラコ又はオフグ (神饌の意)と呼ばれ、特に叉、

れる。 煮て食べられる。 方で背肉の一部分、其他頭などが小屋でこの晩 ヘセニク(背肉)は骨のつい たまる

(護符)ともいは

舌

け興 の骨は別に保存せず棄ててしまひ、 合せた全員に分けられるのが原則とされる。 刻まれる。 16 n 頭の全部が丸のまる煮られ、 る智はしである。 歯は希望者に分 この肉は居 併し頭

この際、 は之が修了後その場でモチグシ(持串)が行はれる。 東 根 H 子 本に於ける狩獵者とその狩獵 0 は 心臟、 背、 其他 の肉、 高橋 上檜木內

た(第八圖、

0

秋

田荒瀬又は上檜木内に於ては、

前述の千匹萬匹

須藤誠多、

栗原源兵衛、

阿部松之助、

他二名が各

熊祭りに相當する儀禮はケボカイと呼ばれ、

多く

供へ焼いて食べることになつて居る。 寺村では膽、 て食べる。 谷村地方では熊の舌及羚羊の舌を必ず人數だけ分け 行ふ際も必ず小屋に歸つてから解剖後の肉を山 必ず用ひるとされてゐる。 この際の祭りをホドマツリと呼ぶ 脊、首の肉、 赤谷村の場合は、 同下戸澤では心臓の肉を 北魚沼郡 野營を (富永 神に 湯

清策氏)。 3 皮及び肉の處分

前項

小屋内で食べた残りの肉及び皮は村に出

佐久間新平氏方にて張られた。 乃至四十錢にて希望者に分けられ、 た後、 直ちに處分される。 この際は肉百匁三十五 カワハリと云つて、 皮はヤマサキの

半日の手間で完了した。この熊は皮に張つて丈 の先より尻部まで)が六尺八寸、 第九闘)。イ (所謂熊の贈、 巾三尺五寸とな

(115)

され

乾し固めた

もの)は一匁五圓位に賣買される。又この熊はマへ エグ(前肢)一本二貫二百匁、同一本二貫二百匁、ア

背肉五百匁と處分のため記録された。皮は張つた儘 トエダ(後肢)一本二貫五百匁、 同一本二貫六百久、

され のもの約三十圓位と云はれ、この後に剝製料が附 へ供へる清酒一升が買はれてゐた。之は恐らくヤ る譯である。 一方で皮張に關 し出費としては山 加

サ 皮張りの方法としては全く特別な技術は要しない キの家で説はれる爲めの支出である。

らしい。 ら皮を剝がす時の傷はこの際に補綴される。 手際の優劣が、皮張りの場合に現はれる譯で、肉か 幾分でも慣れて居る者が営る。 解剖の時の 又或る

部 分配する。 斯の如く金錢に代へて、狩獵に参加した獵師が平等 分は縫合せられて、 頭堅め アタマカタメは獵師が狩山へ出發の 岡の如き恰好になる。 獲物は

4

明と神酒を供へ、後にその酒を酌み交す。この場所 備品を相談の上取り極める。 集まり、こゝで狩場、 際に行ふ。一團に参加する者が全部、 日程、食料、 この際も山神棚に御 服裝その他の裝 山大將の家に 燈

嫌ふ。

六人一人 山小屋などから狩山に向ふ場合、

5

を變更して他の家に移すこと(スノカへ)は忌み

獵師の數が七人の際は七人と云はす、 特にロクニン

ヒト

リと云

3.

附近の北蒲原郡川東村で七人の獵師

(雪崩)になつて落ちて來て、七人が雪崩に打たれ (斜面)を通つたところ、犬のケダチ(蹴立)がアエ が熊を獲り澤で皮を剝いで居た。時に犬が山のヒラ

氏談)。上赤谷、瀧谷新田の獵師も七人と 云ふのを んでしまつた。之以來七人と云はない (瀧谷、 外門

夜籠り(ヨコモリ)獵師連が山へ入つてから

心む。

6

女が集まり、 三,日目 及び七日目 Ш 神 の前晩に山先の家に各々獵師 神酒を供へて後、 酌み交はし の妻 獲

り歌 物の有ること無事 など唄つて賑かな集まりになる事がある。 であることを祈る。 時に餘興 に入

7 7 タギ祝ひ

初獵に山へ入つた新参者のため

の祝ひである。

Ш

1

屋内で行ひ、

アブラモチ(油餅

た。

る。 噌をつけたものを作る。之を山神に供へてから食べ 即ち米飯をつぶして練つたものを串にさし其に油味

查

同

將がからかつて、弟子にするので一 との時、 \exists マタギ (若い獵師、 種のマタギ團體 新参者)を山大

見られる。又之をマタギにカケルと云ふ。行事を濟 禮 世 入りとも云ふから成年式又は宗教的な要素も含むと を暗 た後の若者は一人前のマ の入團式である。入團年齢には制限はないが、 示すると思はれる作法があり、 タギに 成るのである。 山神への弟子 割

0

際

の唱へ言として、

オー

7 ラ t

才

1

、ラヤ

才

0

事

が見えるから其

一部

を 5

くに記す。

「始て流木

ح

東

日本に於ける狩獵者とその狩獵

高橋

行ひ、 の祝ひは山へ入つてから尠く共三日間を過ぎてから クヤマノ コマタギの年齢としては十四、 グーランと云ふ(瀧谷新田、 シシノコハ アタマヲ 須藤氏談)。 ワラレテ 五歳が多か 尙 グル

ラン

物)を著て小屋から出てもよいとされ、又如何によ び、此の者がマタギにかかつた者から色々な事を聞 い晴天でも一同休業する。(瀧谷新田、外門氏談)。 此の行事の親方をタイフサマ(太夫様)とも呼 時に教へる。そして當日はナガキモノ (長い 著

(117)

るらしいのである。 は、 或はマクギにかいると云ふ事には意味がある。如 須藤氏の云ふ唱へ言を云ひ乍らマタギ(梶木)に なる行事をするのかと聽いても教へて 吳れない 前述、 其が頗る剽輕なものであるが爲めらしい。 小マタギを山大將がからかふといふこと、 瀧谷の星龍吉氏所藏の文書にる 前

二七

祝ひである。この行事には山先(山大將)

は加はら

(筆者註、マ) と云は高き物に腰を掛け火木に雨足をかけさせ、前 日本に於ける狩獵者とその 山え登る時は橇木にかかるべし、橋木 狩獵 高橋

文をとない、への子のかりに縄を付けたるを雨人で に大火を焚き、 よも木の箸にて男のへ のこを挟み唱

引也」とあり、この際前述の唱文がとなへられ、小

であると思ふ。

前記唱文の「……奥山の獅子(熊)の仔は頭を割られ

タギが斯うして一人前になる洗禮を受けるので、

て……」と云ふ文句はよくその割禮を暗示するもの

度同村上赤谷獵師の間に以前行はれた同 はれたか否かに就ては尚疑問の餘地が残され、 この文書に見えるマタギ祝ひの方式は此の通り行 種の行事に との

見たい。 ついて報告(井上平次郎氏) タギ脱ひといふのは、 里の人(里マタギ) を得たから弦に記して が始

> b, 世、

めて山に入つた時、

山の神様の御弟子に付くといふ

(木製、

高一尺五寸、幅一尺程)の中をくぐらせて、

のことを云ふ。行事を始める前に、参加者は皆裸體 ず、次位の者が行事一式を司會するが、この者をタ (太夫であらう、 筆者註)と呼ぶ。 H 3 とは神官

3

といふ。而して小屋に戻り持参の綿入を著る。 となつて川に水浴する。之をコーリトル(垢離取る) y 3

上し、ビクといふ縄編奏 此の際タヨは獅子皮(熊毛皮)を裹返しに著て上下 様の御弟子に付くから皆様宜敷お願ひ申すと云ふ。 は式の始まる時、 同に向つて、 (山行の辨當入)を冠つて 今日何某が山 の神

(小屋内に於いて火を焚き居る所、 烏帽子とする。次に、マタギにカ、ル者をホドカル の中を通したその縄を對ひ側の爐邊に安置した鳥居 爐に懸つた自在のカギ その者の生殖器の先へ小さな縄をかけて軽く縛 (山 山 言葉、 爐緣)の側に坐ら サ ゲ チ /ョウ)

(118)

炊事掛りの者 (山言葉、ボーシ)が持つ。 同 時に、

タヨ 先づ火中に入れ、 は火箸 (山言葉、 出してからワッパ ホドムシリ)二本を手に持ち (飯入の曲物、

てその者の生殖器を挟む。そして「ヨイマラヤ 3

方言メンパ)に入れた水の中で清掃して、それを以

云ふと、 グラリ」と唱へ、尚「オビキ出セ イ ムの着衣で山の神様 マラヤ 炊事掛りの者が其の縄を曳き、一同そのま 奥山 ノ獅子ノ仔 へ参詣する。 1 頭 而してこの式の始 ワラレテ オビキ出セ」と ガ ラリ

れた。 して式を終る。 徑一寸程)を山神に供へてあるが、それを皆で頂戴 この行事は今から三十年前まで行は

まる前に参加者の數だけオミゴクとして握り飯

(直

槍が最も古い用具とされてゐる。

章)の如き狩獵用武器の過程が見られ、ナメと稱

こと、 ふことは共に注意すべき行爲で、 この行事に見る爐鉤(主として木製)に縄を通す 前述文書に記す「火木に兩足をかけさせ」と 東日本に於ける狩獵者とその狩獵 7 タギにカ ル

> に與 時にマタギ語源に といふ語の出所がこの邊に在るのかも知れない。 のはよくないが、 へられる。 語源の探究に 種々の角度からの觀察が必要であ 關して一種の暗示を例の杖とは のみ入り込んでしまふ [ii] 531

8 當地赤谷村獵師の談並に報告に據ると、 狩獵の方法と變遷

前述

るのは之を以ても判る。

(穴見)と云つて穴熊を探りに槍 に打ち倒された羚羊を拾つて捕ること、或はアナミ はアイエジシヒロヒ (アイ獅子拾ひ) と云つて雪崩 一本で出かけたと傳

寸程、長さ六尺の木を巾五尺程に組 シによる捕獲があつた。それはヒラと稱する直 へる。(佐久間新平氏)。 又昔時の狩法として、 合せ、 この 上 徑四

(119)

する (m)

併し、大昔に於て

数百貫もする石をあげ、

その

內部

は縄を張り

獣が

高橋

ラ、桝取倉などがある。この中二つを卷くのを私共

その縄 に觸れると石の重みで木組が落ちる仕掛のも 高橋

カン 前 のであつた。 に屢 ら見るに、 一々行は 欠熊の捕獲は相當古い形式であること 卽ちこのオトシは槍を多く使用する以 れたものである。 (井上平次郎氏)。 之

では全く當村に於ては槍の使用が見られない。 が 個人單位であり尠く共數人の仲間によつて行はれ 器であつたことが のであるが、 Ш 先の統制 銃器 下に行はれる迄に發展して來た。 の使用と共に卷倉 知られる。 同時に、 の如き團體 人員が以前は 次に 現在 狩 獵 た

は が

n

てゐるが、

當時は銃器

の代りに槍が主要なる武

7

窺はれる。

現在でもこの方法は卷倉と並行して行

卷 を狩りに山へ入ることで、クラ(熊を卷く場所) くのと、 般に「シシヤマへ行く」といふ言葉がある。 穴熊を捕獲するのと大體二通りある。

を 赤

熊

谷

磯師の狩場の一つに前述勘

左

衛

門グラ、ミノク

T

のオービキ

(ミネより下つた中腹の位置をオホ

挿圖二の如く、 た。併して」で本式の卷き方を見ることが出 出て遊んで居らずこの卷狩には一つの獲物 は見たが、 雪がまだ深かつた爲め熊も羚羊もクラに 澤から上つて一番奥の側稜をエリヤ もなかつ

のをデドノコバナと呼ぶ習はしである。 のコバ (山言葉、 ナ 中央をオ タツ)が入つて雪溪狀を呈してゐ ホバナ(又はホンバナ)、 その間 手前 に各

線 のハナより奥の澤上流に待つ。射手はミネ を傳はつて登りミネのブチバ (射場) に待 (尾根の 箇所にメアテ

(總指揮者)

が構へ、

ウケはエリヤ

る。

澤一つを挟んで對ひ合ふ即ちムカヒ

ヤマ

0

或る

々ヒド

の上に構 假定されてゐる。多くの場合、 出た獣はこの三つのハナ へる。 デヤマ 0 ハナをからんで、 の中 山大將は中 何れかを登ると 勢子とし 央のハナ

(鼻)

(120)



第十圖 メアテ (卷倉)



第十一圖 双眼鏡を手にせる獵師



東日本に於ける狩獵者とその狩獵 高橋

Ξ

最後の號令)

ホー

ラ

ホラ

ホーイ

(オービキの聲)

オナ

ービキ

ナレー

(同)

2

工

ネーカホ

ラ

クラホゴシ

3

1 (メアテの

オし

v

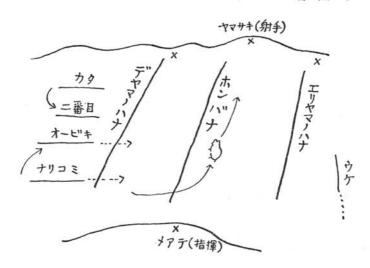
1

(メアテ)

に見えるメアテの位置は八百米許りの地點で、右端つム、時を見計らひ號令をかける(第十圖)。この圖かは高する。メアテはこれらの陣形を一眸の中に收めすに向つて進むもの)と之より尚下つてナリコミが

側稜はクラの一部である。

オー 號令は左の様な順序で掛けられる。 ナリタケ オーイ IJ 1 才 = オ 3 1 (ナリコミの答) ナリコミ デレ デ 1 ホーホホ(ナリコミの聲) 1 (成る可く出よ、メアテ) ナレ (メアテ) 3 (メアテの號令)



挿圖二、勘左衞門グラの卷狩概念圖

(121)

日本に於ける狩獵者とその 高橋

最初にナリ 11 11

狩獵

から鳴らせるのは獸を下から成る

と思ふ。エイリヤマ鼻、

デヤマ鼻各三人、

オービキ

號令としてクラホゴシ られる。之を聞くと各々の部所から豫め定めておい 可く上に追ひ上げる爲めで、之より後にオービキ 遂に獣の影が見えない時には、 (卷きグラをほごす) がかけ 最後 0 站

鳴り始める。

が、卷く當日の前日頃澤下へ獸がモギレテ(逃げて) た場所に集つてくる。この場合は澤底が選ばれ このクラは可なりの見込をつけて卷い た ので ある た。

しまつたと推測され た

份

る。

7

卷グラについて附加して置きたい。 典型的なク

選ばれる。 側稜をもつ一つの斜面 ラとしては、上記の様なミネに通ずる三つの並んだ 又原則としては中央の側稜 (南向き)が良い卷場として へ熊を上げる

> けもたせ、一人二役を果させる。この者は多く勢子 カタの者には「二番目」の役割も普通には受

の上部に氣の利く者を一人位置させ之をカタ(肩)と

呼ぶが、

ぬ様に錠をオロス役をつとめるので、 に追はれて來たシシ(熊)に對してこのクラを出られ ヂ Ħ ウ マイミ

ネといふ言葉がある。 狩に加はる人數は 定の極ま

りはないが、九人山がよいとしてあるから、 デヤマ各三人には射手も含まれてゐると見られ イリヤ

双眼鏡を持つてゐて隨時、 れない若衆でもよいとされてゐる。 (獵師)であつた。ナリコミとしての勢子には山 私達が見學させて貰つた卷 之を使用して獣の有無や クラ 叉、 は 獵師は古 都合十一人

面の工合を眺める(第十一圖)。

拇指をかけること、足を投出すこと、雜炊を食べる 行爲の禁忌作法として、山小屋では椀の縁に

に達者である爲めと幾分名譽をもたせる意味もある

ホスと云ふ。之は中央のハナの上に構へる山先が銃

他のハナから之へ追上げるのをシシをナ

斜

9

に慣

(122)

こと、長著物を著ること、歌を唄ふこと、歩く時銭

項であつた。が、十年位お以前から段々と廢れかかいへる)、出だしに猿の話を することなどが その事心を肩に擔ぐこと(紐にて背に負ふか、脇の下にか

離)をとらせられた。

死火、産火二十一日前は狩獵に出ない。

10 獣の習性 羚羊はモチギ(もちの木)の藪に隠れてゐて、この新芽とか葉を食べる。モチ木又はヒルを食べたものは肉に悪臭があり、特に内臓に接した肉がこの臭ひをもつ。

おく。アヲバヘ(青蠅)が出れば又はナガムシ(蛇)がの巢、蟻塚などを食べ、春期には蝮を殺して投げて熊はワカモエ(木の新芽)、木夷の花、椈の實、蜂

出れば熊も出るといはれてゐる。

熊は叉、樹枝を折

について云ふのだが、

獵師自らも云ふ様に、「自分が

日本に於ける狩獵者とその狩獵 高橋

東

まげて木の上に寝所をつくるが、之をミボシ

(身

ふ。之等のミボシのある附近には穴があるものだと(楢など)を集めて作つた 休み場に 身を乾すのをい乾し)といふ。ツチミボシと い ふ の は、地面に柴

11 獵師の漁魚 赤谷村瀧谷新田に須藤誠多と云

云ふ。

獵師すべてが一方で魚釣りにも堪能であることは聽ふ魚釣の名人がゐる。この者は狩獵もするが、他の

をなすことの多いのは、純然たる農耕者と自然に異

けなかつた。併し獵師は狩獵期以前、

炭焼とか魚釣

(123)

タギ商賣をよく現はした語である。そして之は現狀の手間を取つてしまふむち狩獵は獲れる時には一日の手間を取つてしまふむち狩獵は獲れる時には一日なる點である。瀧谷の外門老人の談に「千日一日」と

4 - 2 - 1

好きでなければ獵師は出來ない」といふ言葉には

むのは秋田檜木内でも聽いたことであるが、當然のある管みと云へる。獵師が一方で魚釣りなどを好のある管みと云へる。獵師が一方で魚釣りなどを好のある管みと云へる。獵師が一方で魚釣りなどを好るるが、他の堅い農耕の仕事に比べれば餘程のむら

ば、多くヤマバイ又はアマメ(山魚女)が釣れる。 他 としてはイタドリの莖に棲むドンゴロ虫といふ小さ 最も多く、 おく。針は小さい賣品のものを使ってゐる。 い裸虫や蚯蚓などを用ひる。 ズキ(夜突き)といつて二十年この方はカンテラ 當地附近の谿川では四月半 盤出 鮎、鱒等も捕れる。捕獲法としては釣りが 網、 簗、 ド(致)などが用ひられ、 この莖は秋に牧納して から 五 月初旬 叉時 になれ 20 餌

石油使用)を用ひて夜分に銛にて突く。

12

女の仕事

當村瀧谷、

同新田などの部落では

では、10年では、10

(何れも地方名)等がある。

傾向だと思はれる。

北 陸 游 記 ょ h

-明治中葉に於ける白山・立山登山誌-

登り、廿四日より廿八日まで立山に登つた。そして九 り越前に出で、八月十八日より八月廿一日まで白山に ず……」との書出しで、それより東海道を經て米原よ 古關俊吉を從へ、午後四時四十五分新橋發の汽車に乘 載で、未だ世に出でないもの。明治二十三年八月十五 月一日中仙道を經で上野に歸着した旅行記であり、こ 本文記事は故宍戸昌氏の稿本「北陸遊稿」よりの轉 「夏期の賜暇に際し白山立山に登攀せんと欲し、

> 故 央戸**昌氏について**――氏は所謂登山家では無かつた

たのであつた。汎く博物學其他に關する厳書家であつ の觀察又はその標本採集の目的をもつて山岳を跋渉し が、本草の研究家であつたが爲め、時に主として植物 宍 戶 昌氏 遺稿

(125)

も宍戸氏蔵書印と蔵書番號が記入され、總でが同氏自 らの筆寫ではないらしいが、その筆寫本の卷末には多 は其他から藉り入れた原本よりの筆寫であつた。何れ 士山關係のものに就て見ても、錦窠翁とか縣廳とか或 なども、實に多くあつた。その藏書の多くは、特に富 て、その中紀行に關するもの或は富士山に關するもの

する部分である。

北陸游記より

宍戶

ムに抄録せる部分はそのうちの白山及び立山登山に關

蒐められ又所蔵されて居つた。その蔵書の中「出羽三 山記事」と題する小さな稿本が未完に終つて居るが、 峠採收植物腊葉」などもその一つであるが、實に丹念に **腊葉も敷多く所蔵されて居つたらしい。「飛驒國坂下** く氏の朱筆による書入が述べてある。山岳地帶の植物

重な價値の見出されること多いのは宍戸氏の所藏であ あつた如く窺へる。併し何れにしても、その蔵書に貴 に關する記事を集録して置いたといふ好事的な一面も かざるを得ない。併し氏は實際登らない山でも、それ んな所にまで精密な關心を寄せられて居たのには、驚

れて居つたことに據ると思ふ。 つたと云ふ以外に、各々の書の質について相當吟味さ

もつて次の如き事項を傳へて異れた。 ねて聽いて見た所、當家主人の吉田久兵衞老は筆談を 宍戸氏の經歴につき先づ東京淺草の老舗淺倉屋を訪

店され、総舌江戸子辯で話された。當時大藏省權大書 明治二十二年から三十年頃まで屢々馬に乗つて來

記官の職にあつたらしく、本草及珍本を蒐集された。

はなかつたので、新しく仕入れる度に御覧に入れた。 先生以前この時代には本草物に關して宍戸氏以外買人 又蝦夷物を澤山所有して居たらしかつた。白井光太郎

愛知縣出身の人らしく、當時は市谷瑠璃淨坂に御邸が

あった。」

に居られるとの事であつたから早速、宍戸氏の事につ き問合せた所、篤太郎氏より左の如き御返信に預つた

(126)

あつた伊藤圭介翁の令孫に當る篤太郎氏が東京瀧野川

この淺倉屋で尙聽いた所に據ると、宍戸氏の恩師で

ので掲載させて頂く。

云々ノ趣委曲拜誦致候、就而ハ宍戸昌氏ノ在世當時 ノ趣ニ而同書ヲ日本山岳會ノ機關誌「山岳」へ御掲載 「……宍戸昌氏ノ遺稿 (立山及白山紀行)ヲ御入手

ト親交有之卽祖父ノ門人ニシテ若年ノ頃ヨリ祖父之出 百了承致候、宍戶氏、御傳聞之通拙老之祖父伊藤圭介

於ケル登山ノ履歴又ハ登山ノ際ノ逸話等御承知被成度

- 3

タリ、拙老ハ幼少ノ時ヨリ宍戸氏ハ東京本郷眞砂町ナ を明幕府ヨリ蕃書調書出役ヲ命ゼラレタル時ハ門人田中芳男(元老院議員ヲ經テ貴族院議員トナル昨年男爵中芳男(元老院議員ヲ經テ貴族院議員トナル昨年男爵中芳男(元老院議員ヲ經テ貴族院議員トナル昨年男爵・世秀明付ラレテ文部省ニ入リ文部省教授トナリ爾後引任ヲ仰付ラレテ文部省ニ入リ文部省教授トナリ爾後引生地名古屋吳服町ノ邸へ出入セリト承リ居リ候、當時、生地名古屋吳服町ノ邸へ出入セリト承リ居リ候、當時、生地名古屋吳服町ノ邸へ出入セリト承リ居リ候、當時、生地名古屋吳服町ノ邸へ出入セリト承リ居り候、當時、生地名古屋吳服町ノ邸へ出入セリト承リ居り候、當時、生地名古屋吳服町ノ邸へ出入セリト承リ居り候、當時、

温泉宿ニテ休息シ植物ヲ採集シテ歸京セリ、是ハ宍戸山へ登リタリ、吉田口ヨリ登リ須走口へ下リ箱根木賀リ、明治十五年八月ニハ宍戸氏ニ伴ハレテ初メテ富士

ル祖父ノ助へ屢々來訪ア

リタル

爲メ熟懇ニ致シ居タ

職ヲ退キ兩三年前途ニ病疫セリ、

一郎氏在世ナラバ昌

(127)

(地方) ヲ務メ最後ニハ上京シテ大蔵省ノ局長トナリハ拙老唯今モ保存シ居リ、且其際用ヒタル金剛杖モ亦ハ拙老唯今モ保存シ居リ、且其際用ヒタル金剛杖モ亦氏ノ最初ノ山嶽跋渉カト存候、當時採集セル植物標本

北陸游記より

宍戶

以上で共三氏上交系の一位 という司氏の専己を全 車ヲカ、へ立派ニ生活シ居タリ、拙老モ同邸へハ屢い 訪問セリ、其後砂土原町ノ邸宅ハ岩崎邸トナリ宍戸氏 、新宿角筈へ廣大ナル宅地ヲ購ヒ邸宅經營中、牛込ノ の新宿角筈へ廣大ナル宅地ヲ購ヒ邸宅經營中、牛込ノ

氏ハ多年京都ナル第三高等學校教授タリ、病氣ノ爲メ郎ト云ヒ東大出身ノ動物學專攻ノ理學士ナリシ、一郎以上ハ宍戸氏ト交際ノ一班ニシテ同氏ノ傳記ヲ筆ニ以上ハ宍戸氏ト交際ノ一班ニシテ同氏ノ傳記ヲ筆ニ

バ執筆出來可申ト存候、宍戸昌氏ノ著書稿本ハソノ蒐ハソノ便利無之爲メ旅行シ或ハ奔走シテ材料ヲ蒐集セ氏ノ履歴ハ同氏ヨリ報告ヲ得ルノ方法アリタランモ今氏ノ履歴ハ同氏ヨリ報告ヲ得ルノ方法アリタランモ今

集セル博物關係ノ書籍類ト共ニ一郎氏ノ歿後散佚セル

ハ遺憾ノ至ニ不堪候 (後略)」(高橋記

八月十八日 晴 小原越

午前六時三十分勝山を發し袋田町より右折して數町

ぎ田 間に出づ、 売谷村を過ぎ河合村に至る、 カガラ 勝

山より三里也と云、 勝 Ш より一ノ瀨溫泉に至る小原越と谷越の二道あ 田間記すべきなし。

谷越 云 出でゝ一ノ瀨溫泉に至るを以て十二里餘りありと 谷峠は此河合より北に方りて大杉の立てる山 は牛馬の通ずる道路なれば平坦にして牛首へ 小原越甚だ嶮なれども十里にして達すべく、

白山、 しと云へば同氏は谷越をなせしなるべし。 立山に登攀せし頃、 牛首に出で一ノ瀬に至 べし、

出發前小森賴信氏に面せしに、

明治十七年

頂を過ぐると云へば登りは大凡一里許に過ぎざる

余輩は道嶮なるも里程の近き方然るべしとて同村の

b

HI Ш 行くに隨て路愈險に山阪數十を超て小原村に達す、 追分に 間 の新開菽田を經過し、 の僻邑なり、 至り、 右折し 村落を過ぎて田間を行く數町、山 て田間を過ぎ草叢中を上下す、 山麓に人家三戸あり、 小原

ぎて樹林に入る際、

忽ち雷雲四合し烟霧吹來る、

叉

里許にして早内森峠に至る、

從來此地に休憩小屋

村の支村にして早内森と云、 此に至て午飯す、時に午前十一時十分なり。 小原より半里許なり、

して着すべき席なく、漸く緣側に腰を掛るの餘 葉を此邊にて買集むる中買の家にして全家桑葉に が憩ひし家は牛首風嵐邊にて、 夏蠶に用 ゆ 3 地 桑

余

唯日に曝らされて立てるのみ、 あるのみ、是亦既に人ありて腰を掛たれば余等は 既に半時許にして

先の者去りたれば漸く腰を掛るを得たり。

原 一ノ瀨に輸送するなり、 故に權衝を執て 買目 を

にして殊に南に面し暑氣燬くが如し、 午飯了て午後零時半出發す、 改むるものあり、 葉を採り來るものありて甚だ維沓なりし。 俵薦に詰むるものあり、 是より 大凡 漸く草間 里 程草山 山間 を過 よ

は此所にて俵薦に包みて人足數十人をして直に小 此桑葉 (128)

此地に暫憩ふて喫煙す、桑葉を育負たる人足十數人ありしが雪に壓せられて倒れたる儘木材散亂せり、

く下て谿間に至れば、其水皆北して一ノ瀨の方に向怒ふに此地は越前加賀の分界 stmm となるべく少し

此

地

10

憩

U

たり。

過ぎて一川を超ゆれば六萬山南に出づ、山麓を巡れ村に出づ、是より廿町許にして一ノ瀨也と云、村をなす、又暫く憩ふに雨又到る、漸にして能美郡水谷上下し二里許を下れば諸所の谿水合して旣に一川をつて流る、此際雨到る、路險惡愈甚しく谿に沿ふて

Ш

の繪圖を購ひ溫泉場を發して一の鳥居より

直

K

登

(129)

至る、是も同じけれども都合せんとて一席を割て泊んとせしに饒席なしとて謝せしかば、山田屋末間に入る、人家數戸あり、溫泉の前薩摩屋に到りて泊せ

ば一ノ瀨柳橋の前に出づ、小阪を上下して溫泉場に

北陸游記より 宍戸

する事を得

たり。

夕同氏は社務所に移りたれば幸に余輩一室を恣にに來れりと、幸に登山の事を問ふの便を得、併此て年々夏季に此地に來る事にして兩三日以前此地

するを得たり。

浴せり。

八月十九日 晴 登白山

午前起出天晴れたり、早飯を了へ社務所に至りて白

ば人足を傭ひ、 此山は富士などと異なり山上の室堂には山上条内 し動八等に叙せられたりと、 て登る、人足は一ノ瀨村の【原本ニ する神官附屬のものあれ にして曾て明治 飯米食品を備へ、 十年の役に近 ども 故に言語も判然とし 衞 食事は霊 兵にて戦闘 草鞋數足を齎 缺ク」なる者 く自辨 に從事 な

カ

て大に便を得たり。

は六萬山にして長阪をハンサ阪と云。一の鳥居より直に山阪を攀るに頗る長阪なり、此山

ハンサは木の名にして樺に似たれども大樹にして

り。
詳査する能はざりしが案內者は樺にあらずと云へ

大樹間を行く事数丁にして檜ヶ宿と云所に至て暫く

憩ふ。

切りスゲと答ふると共に旣に手を切りたり、成る内に問ふ、未だ答へざるに余之を採らんとす、手

此間岩モ、多し、スゲの藪あり、何と云ふやと案

程手切りスゲなりとて一笑せり。

を上るなれば少しく下りては又登る、漸にして山巓なし、一ノ瀬より一里許なりと云ふ、此邊凡て山脊と云、「白山御記」に其内に 石像ありとあれ共 今は夫より少しく下りて又登る、一の敗社あり、一ノ宮

道と云、又登る數丁にして左方に禿兀たる大岩裂けに至る、字サシ尾と云、是より下り盡したる谷を六

て尖角あるもの數十重りたるあり、刺刀ケ窟と云、

中に石佛あり是まで二里也と云。

登り窮めて平行し稍下りたる所に室あり、

慶松室と

あれ共贅せず。 此室は慶松なる者開きたるものにして種々の俗説云、既に午前十一時過なれば此室に入りて午飯す。

る所に大岩數個あり、最大なるを仙人窟と云、南に

過ぎ坂を上る、【原本ニ缺ク】と云、登り窮て平行す暫く休憩して正午此所に出づ、夫より平坦の原野を

して路傍に大小の空隙所々にあり、就中仙人窟前其面したる方に窟あり、故に名く、此邊は盡く石山に

朝絶頂の日出を看て其日に下山すると云、假令松因て想ふ信者の登山するや多く夜間に登攀して早

大サ四尺許にして其深サ測るべからざるもの

あり。

1110

れ共未だ空隙に陥りて困難せし者無しと、實に不明あるも是等の空隙に陥らざるは保しがたし、然

思議

の事と謂つべし。

是を過ぐれば下る事數丁にして兩山の間に出づ、恰りて越前名蹟考に「大きなる三段に落るなり」とありて越前名蹟考に「大きなる三段に落るなり」とあ

云ふ。

是より一山を攀ぢて少しく下れば一場の平原あり、

り、名蹟考の所謂權現の御池なるべし、暫く爰に憩藜蘆最も多し、此間を過ぎ小山を 巡 れ ば 右に池あり、共穗長く垂れて 桃紅色其花愛 す べ し、拳参、御花畑と云ふ、此邊地楡の一種「カライトサウ」あ

北陸游記より 宍戸

. Š.

れば全く高山源黒魚の子なるべし。

で腮間羽毛の如きものを垂る、蠑螈子にもあらざれば全く高山源黒魚の子なるべし。

所謂真砂阪なるべけれども案內者は真砂阪の名を傳る、五色ケ濱なり、此阪和漢三才圖會及び名蹟考のる、五色ケ濱なり、此阪和漢三才圖會及び名蹟考の夫より數歩にして蛇塚あり、小石塊を高く積重ねた夫より數歩にして蛇塚あり、小石塊を高く積重ねた

五色ケ濱を上れば彌陀ケ原に出づ、「白山の記」の

へざりし。

田の原なり、

此平原は凡十丁餘にして長大の草木な

し、黑百合あり、太閤秀吉公へ佐々成政が献ぜし黑月土用に百花一時に開きて美しき事たとふべくもなンの屬恰も草席を敷きたるが如し、「白山の記」に六ンの屬恰も草席を敷きたるが如し、「白山の記」に六

(131)

今も越前候より獻上に及ぶ事ありと

百合缓より出、

是より阪あり五葉阪と云ふ、左右千歳松のみにして 云 3. 或は 此 原 なるべ L とあれども恐くは非なり 原本は室の邊脳き順云々

所々磊石あるのみ、

凡一二丁行きたる頃五七間

前に

别 b 松鶏の雌雨雛を率ひたるありて案内者頻に余輩を招 きたり、 は稍大にして雛は既に雌鷄程ありたり、 て頻に追ひたるも遂に松樹間 諦視するに母鳥は客年駒ケ岳にて見たるよ に没入せり。 三人手を

出する所あり、 暫休憇して室を出で一丁許東北に至れば飲料水の涌 あるべし、先づ室に入て衣服を更む時午後! 石垣を設けて中央に室あり、 清冷なり、 爰に至 間許の水櫃を設けて之を貯 つて水浴し室に歸て此日採集せし 奥行五間、 長さ十間許 三時。 å. 頗

の平なり、

室前大約一丁許磊磯たる石を除き左右

VC

凡四五丁にして松樹道に盡き一の砂場に出づ、

是室

日將に沒せんとする際室を出れば又松雞の雛を率

草木を整頓せり。

て五葉阪 雌鶏に似て白所多し、 より上り室邊に來るを看 3 其 形恰もク

三

追はんと欲するに又松樹

Ch

間 に去れり、 時寒暑針五十 ·四度。

古 みにして他に室堂ある事なし。 八室ありし事越前名蹟考にみへたれども今は此室 は室も多くありて越前室(此室)、 美濃室など凡

八月二十日 晴 攀三山 歸 瀬

なり、 余等も亦早飯して續ゐて室を出づ、室の平は山阪 導者二人なり、 聲あり、暫くして松明の光燦然、是信者の夜登せし 午前四時起出るに星辰燿々全く霽たり、 既にして室前に到る、 彼等は須叟憇ひて直に上り去れ 美濃、 越前 五葉阪邊人 のものは人 D 者 去

歳松林に入る、 々にあり、 此林を過ぐ二丁許にして高天原と稱し草 ミネバリ、 ホツ、ジ等雑りて岩石所

丁右の方に小社あり秡殿と云ふ、又一二丁にして千 で大約一二丁左右は凡十丁許あるべく、平を行く一

許を經 D, る、 御前と云ふ、 木全く盡き燒石重疊せし石山 垂木の金物は盡く菊花なり、 白木作りにして鍍金 て絶 頂に至 社は北に向ひて建り れば石 壁を筑き 0 葵 なり、 0 絞附きたる金物あ 維新前 此際寒暑針を出 たる中に 嶮なる登途二丁 の建築に係 社 あ リ、 L

別

本

Ŧī. 分間過ぎて之を檢する五十二度なりし。 養老元年登岳果感妙理大菩薩 り、左に掲ぐ、 さて此神社の事は白 一行者相隨餘無人後漸有蕁來者 但 泰溢 登. 山比咩神 岳 の事 は 泄: 仙事 傳見 神 和 字天二年實 大 漢三才 務 居嶺 所 歸越知山と 岩 圖 0 終三年 略記あ 會 IC は

是東方なり。

(133)

略記ヲ省略 ス

b

T

能登の

諸 Ш

あ

b

叉此 越中 脈は越前以東に於て高峻を極めたるも 0 大 心 日 山は越前美濃飛驒に跨りたる大山にして此 つどけ 經 ケ Ei: IC 0 70 きて別 山本山 前御 大汝となり の多く飛驒 Ш

北陸游記より

り飛驒 八岳見ゆ、之に續きて飛驒乘鞍岳天に冲 州御岳高く鋒、 五百六十八尺なり、又此山よりの眺望は も立山は九千三百七十二尺にして立山 尺 ・山の高さは八千八百〇四尺 加賀地誌に八千四百尺、地 Ш は七千八百四 書同 の高山打續きて其中間鎗ケ岳高く尖れ と云ふ、 其東に駒ケ 古來立山 + _ 尺 書同 岳 よりは高きとしたり あ 大汝は八千七百九十 b T 共 間 より低き事 遠く甲 南 東に 是よ b 信 州

東北に方りて越中の立山近く屹立し、 も亦峭然たり、 %が

が

が<b 其左に Щ 西に方 劔

又「白 士の見ゆると云者あれども富土は八ツ岳 も遂に見る能はず、 たれば本山、 山 0 記 大汝共に諦視する事 及名蹟考など富岳の見ゆる如く記 案 内者に問 ふに、 數分間 此 0 Ш にて ZE. なりし 10 富 あ

と答へたり。 たれば乘鞍岳の 後にありて絕頂にて見へざるなり

拜し了て奥宮即大汝岳に至らんとして原路に下らず

か下に地獄谷を見る、本山、 して社右に折れ北の方に下る事數町 大汝の間、一大谷をな にして右の方遙

し事 Ш 薄黑なる等あり、 自燒、後奈良院天文二十三年五月亦自燒出而麓地 ありし故に山頂の石凡て燒石にて色赭なれ 和漢三方圖會に四條院延應元年白 ども

騰上し風に隨つて硫氣來ると云へり、

此山は度々焼

岳東なり、

紺屋、

油屋に比すれば頗る大なり、

怕寒地獄と云ふ、

昔フョウ院なる山

伏此

池に入りて

將 L

VC

雨ならんとし若

しくは驟雨の此際に濺げは濃烟

0 T

たる所なり、

此日は霽れたれば騰烟を見ずと雖

\$

獄出云々と見へたり。

屋地

獄

油

屋地獄あり、

一池共

K

沸

騰

するを見

T

N

Ш

より験

なり、

大凡石間を攀る四

五丁に

L Ш

て絶 たし

なり、 ず、 とするに中央に寳藏と稱する、 此上に劔峯屹立せり、少しく迂曲して下らん 瀦水にして其色藍青なると赭黄なるとの二池 高サ百二十尺、 濶五

> 十間許の大岩突起する、 名くると見へたり、其右の下に緑の池あり、 其狀恰も大倉庫の如く故に 之を視

下らざりき。 るに水色綠碧其深測るべからずと云へども池 呼に

は

此續きにフコウ院 又其左は千歳谷にして千蛇の池あり、其中央を下り 如 雨岳の中 く大石ありて甚だ歩行に苦めり。 間なる谷に出 名蹟考には不孝屬とす つ 續きなりの 地獄あり、 恰も大河 0

河

死したりと云俗説あり記するに足らず。

是より西北に向ひて大汝に登る、

此山

8 亦

石

なる社頭に至る。

信者の此所に至て草鞋を新にする爲なり、 此所に草鞋 の敗れたるもの積疊して山をなせり、是 山神

Ш

0

大汝

卑からんを厭ふと云俗説の爲めにするものなりと云 森賴信曾て此 頂上に蒲公英四五株ありしと云

ひしを以て搜索せしが遂に見當らざりき。

社前に至るに此社も亦石壁を築きて中に神社あり、

本山 に比すれば微少にして建築は新なり、 其面する

方向も亦同じく祭神は大汝命なれば大汝と稱するな

十丁には過ぎざる可 本山絕頂より此絕頂まで半里と稱すれども大略

此 所より北に下る道あり、 加尾添口より上る所に

して一里下れば四塚と云ふ、

より り終れば二橋あり、 なく殘雪多く下り終て大猿かはなとて坂あり、 白山の記」 里つどにさゝ小屋と云ふ宿舍あり、 里にして中 に加賀の 小屋に至る家あり、 白山より流れ出る川なり、 尾添に 至る道程九里八丁あ 中小屋より 尤人跡 夫 下

北陸游記より

里にして尾添に至ると見へたり。

其方に向はずして直に千歳谷に下り 千蛇 夫より下る事又一二丁にして右に采女の社ありかは社 面して傾きたる形恰も一大圓鏡の如くなり。 の映ずる如きものにはあらざるなり、然れども南 に架上に掛けたる形あるを以て名けしものにして影 にして鏡石に至る、 さて拜し了りて原路より右に折れ下る事大凡一二丁 花崗の大石にして恰も圓鏡を斜 ケ池に至 10

あり、 穴をなしたる所二所あり、其深さ約二丈許もあるべ 中央に至れば噴口と覺しく下より積雪融解して大洞 3 經年の殘雪風の爲め恰も波濤を生ぜし如く高低 此池經 一丁もあるべく池に入り雪上を過ぎて

(135)

室後に出づ、 信者の砂石を重疊したるもの往々あり、 上に登り少許にして又谷に下れば所謂賽河原なり、 上り本山の麓を巡り寶の平に出で數丁にして 此邊、 ツカサクラ、 ガンコウラン、 之を過ぎて

く其穴中又小穴數所あり、一見了して其西南なる丘

又丘に

恰

漆姑草の生じたるの看を爲せり。 も蒼苔の如く中 K 黒ウスゴ 水 ツ、 ジ等ありて苔中に

室に歸る午前十時三十分、是より別山へ登るべき準

坦を過ぐる三五丁にして漸次に下る、 備をなし午前十一 時室を出づ、室後直 此際千歲松間 に右折して平

に入り下る事數丁山の半腹以下は約山水の流るゝ水

餘にして一川あり、是犀川の源なりと云ふ、又少し 道を過ぎて下る事なれば滑脱して頗危殆なり、 く巡れば又一川あり、 らざれば岩石突兀足を嚼て甚苦辛なり、 龍川と云ふ、 川を過て山下に 下る事半里 若否

里なりと云ふ。

四五丁の平原あり、

是龍ケ馬場なり、

室より爰まで

此平原を過ぐれば又川あり赤谷川上なり、

川を超。

ゆ

Ш

此山

を吐き辛ふじて頂に達して憇ふ、夫より又登る聊か れば油阪峠に 委を以て油阪と名附けたるなるべしなど滑稽 して甚急阪 なれば油汗迸りて流る」が

の下りなきにあらざれども約ね登り

0

みにして六兵

衛室に到りて憇ふ。

此地に天の池あり、 室と云へども今室なし、 大さ數畝濁水あり吞むに足ら 御前室より二里也と云ふ

ず。

方は懸崖にして時に崩壊して砂を下す、 風に至る、 是より小山を迂囘して登り一二の大山を超へて小屏 如前萬花地丁、 にして底には積雪あり、數丁にして大屛風あり、 左右皆深谷にして南は樹木あれども北 1 ハキンバイ多し。 其谷數十丈 叉

ざるに至れり、 の前山なり、 漸に 此際濛霧を吹來りて忽ち咫尺を辨ぜ して 别 山 に達す。

大屛風を過ぎ一二山を登れば御舎利山に至る、

社は約大汝の如し、 より千歳松林あり、 は御前、 大汝と異りて頂上小草あり、 然れども社ある地は草木なし、 又石壁を築きたり、入て一拜し 數步の下

(136)

とあれども祭神は大山祇命なりと云ふ、 社は和漢三方圖會、 白山の記など菊理姬を祭る 社傳略記

一の高山あり、 に大御前の南小屛風大屛風等の峯に【原本ニ缺ク】 昔は小白山といひ、今は別山と號

ば泰澄大師こゝに祀りて此山の鎮守とせり云々、 て大山祇神の社あり、 此神は山岳主宰の神なれ

て別山の室に出づ、池は室の後にありて此室の飲料 丁にして左の方遙に池あるを見る、猶下る數丁にし 暫く憇つて左に下る、霧稍霽れんとす、下る事七八 の瀨より四里、石徹白へ四里八丁ありと云ふ。

b

水なり、 岩石あり、又黑魚兒の游泳するを見る、 平原にして草花如春咲亂れたり。 池邊に至り見るに甚だ浅くして池底は盡く 池の向ふは

室に至る、 導者一人此室にありて午飯せり、予等も入 室はあれども守る人なし、 今朝登山せし

北陸游記より

央戶

りて午飯す、時に午後一時【原本ニ缺り】分なり。 道より登ると云ふ、又飛驒の麓にも社家ありて道 此室より東南に下る道あり、 美濃飛驒信濃の人此

暫憇ふて室を出づ、一二丁にして下路につく、 の傍に小祠多しと云ぶ。

半里

下りて八幡阪、次にモミ阪なり、 の登路に比すれば頗る嶮悪にして約岩角を歩みて下 此別山の道は本山

る、是水の流るム溝中を過ればなり。 此間、ミヅバセウの葉に斑あるも

0

多くありた

(137)

下り盡して白山川あり、 里又一の瀨へも一里なりと云ふ。 河畔に憇ふ、 八幡阪より一

此邊、サハクルミ多し

て」左右に三個あり故に名づく、又行く數丁にして 數囘にして三の岩に出づ、 數十間なる大巖、 JII を隔

是よりは大なる登降なく川に付て下る、溪川を過る

萬山 岩山 JU 時十分なり。 谷 の麓を巡りて一 れる際通行したる水谷村の板橋の側 JII 及び柳 谷 Ш の瀨溫泉場に歸れり、 あり、 是を過ぐれば嚮に勝山 へ出 時に午後 で 六 t

中 略

八月二十四日 晴 山麓芦峅 に至る

午前六時

七十三世

富山を發し古關俊吉をして電信を

て砥 搜を囑し辰己町より市街を出づ、 如 沿ふて東南に向て車 發せしめ、 Ļ の如しと雖も漸次に登れるを以て車駛ならず。 此道や客年改造せし新道なるを以て一 余は東四十物町 を驅る、 書 四野平衍稻田恰も海 林 中田屋に至り書類 常願寺川 の分水 直線 10 0 K 索

餘徐に車を駈りしも古關來らず、 より二里 -時猶深らざれ なる葡萄茶屋 ば遂に又發す。 村中ノ K 至 り車を下りて 猶徐にして遂 昨

常願寺川の西岸に達

凡里

12

富

Щ

行く事 想る事

一里半許にして上瀧村に至る、

此地は客年火

災ありて一村四分の三は焼失せるを以て現 て憇ひ午飯を命ず、時午前九時五分なり、 なり、故に人夫の輻接する夥し、 上酒屋 ノ酒 助井 紋 富山 時 建 より K

午前· 新道三里二十七丁也と云ふ。 九時三十分に至り古關俊吉來る、 電信は今に不

ず、 は人車の通ぜざるを以て人夫を傭ひ荷物を負は 上瀧村を發す、 ふを以て上瀧に來れりと云へり、午飯の後此地 ならんと富山の入口に於て暫く見合たるも猶見へ 通なるを以て直に富山を出しが、余の未だ來らざる 徐に葡萄茶屋 街東便路を執り に到りて問へば既に發後なりと云 田 間 の小 道を過ぎて せて より

原道 達せり、 にして本流に達すれば小舟あり、 日の大雨の爲め渡頭を失せしを以て現に人夫の河 を修し 岸上は是岩崎村にて堤防より數步にして直 渡頭 を定むるの 際なれば水を涉る事 漸くにして東岸に 數

三

K 前に到る、 樹林中神 が祠あり、 縣社雄山神社 なり

より八丁許

な

社 は 口の宮にして本社 は立山 の絶 頂にあり、 此

社. は建久年中の建築なりと傳ふれども今其存する

+ 所

四

あ

りて天台宗の無本山

なれ

ば山門寺門

一の管理

は僅々のみ、

岩岬は元來寺號にして此地坊舎二

なり を受けず、妻帶にして立山の別當を奉じ舊藩主よ 百 其 俵の寄附 後神宮の制定まりて今な皆農となれりと云 ありしが維新の際復飾して皆神宮と

ぐる事又數丁にして、 岩岬村を出で常願寺川の東岸に沿ふて原野を過ぎ一 十丁許にして中 野新村 横江、 K 至れ 千垣、 ば 稻 田 の雨村 あ b, 0 田 地 間 を過 を過

> 上を過ぐる數丁にして芦 丁にして常願寺川畔に出づ、 も便路川原に出で行く、 肿 五六丁にして本道へ 村 本道は崖上にありと雖 の庚 申塚に出 出 右杉 崖

に入る、 此間凡三丁許。

一樹ありて下に石碑數個あり、

瞬時休憩して芦峅

芦峅村は元來芦峅 寺にして此地三十六坊あり

て大宮

徒社人等分配せりと云ふ、寺坊の宗旨及藩 等は岩畔 君宮の社家五名あり、 寺に等しかりしが、 舊藩より百俵を寄附せられ 維 新後是亦復 飾 侯の取 今は 扱 僧 (139)

過半は旅店若しくは農業をなすと云ふ、

余は曾

こ 佐

なるものあり、 泉蔵坊にして、 V2 伯忠胤可然との事を聞き置たれば同家を尋ねて泊 時 午後 時 當主 なり、 主人は愛知縣知多 は忠胤に 此家は卽ち三十 して未成年の養 那 邊に營む事 六坊 0 すあり なる 成胤 L

する事なく客舎にもあらざるなり。

て年々冬時は愛智に到るを以て別

に此

地

に於て經營

陸游記より

北

あり る

て休憩す、

又發して數丁なら

すい

L

7 ____

村

茅店

人煙なし、凡一里許にして一松樹の下に

千垣

三大戶上

なり、

村を過て叉田畝に出づ、

十数 に至

庭 前 10 間 K 間半許なる一 小堂あり、 古來立 Ш 2

上にありし古物にして維新の際魔撤せしものなり

が て根續の柱は元鶴、天正の頃のもの數本あり、精巧の 此頃爰に再建したりと云ふ、大永年間の建築にし

ものにあらずと雖も古雅愛すべし、堂中には觀音、

夕も一僧來りて梵聲を發せり。 先の位牌あり、 不動、及び嫘堂にありし仁王の像などありて其餘祖 毎夜寺僧來りて讀經せりと云ふ、 此

午飯後主人と俱に散步して雄山神社に至る、

央北 側 の深林中にあり、 大杉欝 列 世 b 前 村の中 K 華表

あ 0 命を祀れりと云ふ、一拜して社後に至れば佐伯有賴 b 祠堂あり、 入れば中間拜殿あり、 堂守開扉したるを見るに有賴の木像と 社は大宮にして大巳貴

> 銅七年入寂す、三十六坊は皆其後胤にして總て佐 佐伯有賴は大寶元年初めて此立山に登りて 氏也と云ふ、此有賴の事に付ては俗傳あり其事 を創建し後此地に住して僧となり慈興上人と稱 雄 111 を開 神 L 和 加

今兹に抄せり。【本文省略ス】

くに和漢三方圖會 八十初丁に記する所に同じければ

れりと云ふ、巡りて華表に出づ、 祠堂を出で殿背を過ぎ若宮に至る、 此間大杉多く深翠 軻遇突智

神

を祀

開く事にせしと云ふ、 分別し難き程なれども新造に係れるを以て浴するに 々の浴場を廢して混堂を設け日々午後三時 出て混堂に至る、 此村中湯屋なかり 逃だ粗にして湯屋なるや否、 かい より之を 兩年家

足れり、 明日登山につき荷持人足を傭ふ事及び草鞋其他の準 浴了して寓に歸る時午後四時半、 晩食の

らしめたり、盖大寶年間の物なりと云ふ。

頗る古物にして白麻服を着せしめ同じ頭

巾を被

云

いるも

のは高さ三尺許にして僧形にて座

して合掌せ

(140)

掬すべし、然れども維新前は猶多くして天日を見ざ

りしと云ふ、果して伐木の痕あり。

登山 にても今は導者をなすやと問ひしに何方の者にて 持せし者を山上にて見たれば余が中語に他村の者 45 其如くなるべしと思ひし、昨上瀧村にて荷持を傭 者を爲して至るものあれば必云々詞を爲すを以て 請ふて免許を得て之を專業とす、 雌の條に、 Ш 李を負擔す、 此 たるに、 客の好みに任す所なりと答へ にては之を中語と云 地 の客たる導者を缓にて遞傳するを便とあれば は三十六坊五社家の外民戶五十餘ありて農耕 本村及び芦峅寺村 山上まで若干なりと答へしが後に其荷 富士其他にては剛力と稱すれども立 夏期は登山の客の導者を爲し行 à. 竹中國香が立山紀行岩 の賤民曾て富山縣 L 故に他村の者導 10

(141)

あり、 早飯遅緩なるを以て六時三十分芦旿を出づ、村口橋 邮、 坊ありしなりと云ふ、嫘字讀爲姥所見なし、叉岩 古用來之とあり、 爾來此地にて媒尊と稱して此を奉ずる爲め三十六 上人老母ありて江州志賀に卒ず、慈興自ら母の像 相傳ふ帰堂は大寶三年四月十二日建る所にて慈興 今は下新川郡魚津町の實相院に移りたりと云ふ、 を作りて慶雲元年八月彼岸の中日之を祭れりと、 芦峅の峅字も所見なし、 長数間柱なし、 又媒尊像は維新の際之を撤して 橋を過ぎて煤堂の遺迹あり。 和漢三方圖會に、 自

橋に至る、 草莽中を過ぐる半里許にして常願寺川 の常願寺川に落合ふ所にして橋北に一茶店あり、入 慶跡は堂字もなく只**残礎**を遺すのみ。 芦鹏より五十丁也と云ふ、 畔に添 此 地は稱名川 ふて藤

稱名川は立山の地獄谷より發して中途稱名濕 布

午前

Ŧi.

時起出準備既に整ふ、

寒暑針七十三度なり、

北陸游記より

八月廿五日

陰

登立山

泊

溫泉

て憇ふ。

1/1

なりて 3. 其水聲雷 此藤 此 橋の俗傳あれども迂なれば贅せず、 の如し、 地 に來るなり、 其水に橋を架するを藤橋と云 其水清冽石徑碌何として 唯橋

て搦み付けたるなれば藤橋と云ふに過ぎず、 長さ

は大岩上に

丸太を打渡

し薪の如き黒木と藤蔓を以

+ 間 餘廣さ五尺許なり。

暫く憇ふて又發す、

路傍に慈興大師の墓所と云ふ所

なり。

あり石碑あり、夫より直に藤橋を過ぐ、

橋下の水は

直 傴僂して漸くに過ぐ、 奔湍して岩石に激盪す、之を視れば心悸し目眩す、 に菽田を過ぎて黄金坂下に至る。 橋南又一茶店あれども憇はず

ば は日没に達するを得ず、 を以て遂に六時半に芦峅を發したれば既に午前八時 此日早起せしも客舍ならざれば早飯の準備整はざる 垂んとす。 寧ろ此日は溫泉に到り、 今本道を登れば是より 松尾温泉へは 明日本道を降るに若か 九里なれば恐く 29 里半なれ

至る、

に至ては草木なく唯石間に小草あるのみ、

如此

地 を

の準 D. ずと決し黄金坂より右して温泉道に向 備あり、 登れば官林にして雑木を伐采して杉苗を植ふる 此間の土人此地に菽を播して甚繁茂せ 11 坂あ

0 此川は常願寺川 凡十丁許にして河畔に出づ。

は原を対込池より發し湯川を合せ此に來れるもの の本流にして卽ち眞川なり、

眞川

に出づ、 許にして又河原に下る、 河原を行く半里、 此所に溫泉場に到る新道修料を收むる爲め 川の左岸に登り一小坂を過ぎ十丁 如此再四にして字ミヤウジ

に出づ、凡一里餘にして眞 是より小阪を登り草莽中を過ぐる數丁にして又河 此地まで二里也と云ふ、石窟に入て暫く憩ふ。 石箔中に二人出張して人毎に二錢を取る、 夫より左に折れ湯川に沿ふて河原を上る、 川と湯 川と合する所に 藤橋より

過ぐる事十數丁にして一橋あり、橋を過ぐれば上の

湯に至り橋を過ぎずして猶左すれば下の湯 湯御影 に至

3

の道

なりと云ふ、然れども

一昨日

の大雨の爲

め新

湯の 東に至りて河に沿ふて上る數丁にして右の山上崩壊 橋は流失せりと云ふを以て、 直に橋を過ぎて川

十數丁間草木なく岩石禿兀 せし所あり、 是安政年間崩壊せし鳶峯なりと云 た る は 此崩壊の爲なり à.

平原なり、

其叢中を過ぐる三五丁にして右に川

を隔 0

とぞ、是より十數丁にして右の方山上に登るの道あ 一小橋を過ぎ下の湯に到る、 是上の湯道なり、 余等は是より左河原に下りて 即溫泉場なり。

此 地は後に山を帶び前に湯川ありて河畔に石隄を

りて棚を設けたり。

0

小屋に入る、

六疊敷なれども奥に一尺許の敷板

き中に極めて粗なる小屋三棟あり、

余等は最高

此 L は 地 旣 に着する午後一時三十分、 K 一時半 なり、 近傍を見物せんとせしに折柄

北

陸游記より

頓、了すれば既に黄

雨ありて見るを果さず、

入浴の後採收せし草木を整

晴

八月廿六日 室堂に泊 す

れば旣に六時半、 夜來雨あり、 廃五時に至て直に場主を催 此地を發し直に後山に登れ

し早

飯を了 ば

なり、道頗る險惡、初め數丁樹木ありしが夫よりは て上の湯あり、又行く二三丁にして松尾山 の登路

西北 炎燬くる如く漸くにして頂上に達せんとする際、 草莽中の岩上を過ぎ屈曲する數囘なるも、 に向て登攀するなれば、 日光半 面を射照して蒸 東南より

(143)

霧を吹く、 是迄凡一里半。 樹林ありて照射を発る、然れども此際よりして山

此頂上に達せんとする際ツガサクラ、

ガ

ンカウラ

ン、 石南等を見る。

午飯を命じて喫了せ

頂上に達すれば左右皆箬にして其間棒 カシバラ + 7

バ

IJ

之に登れば其北は所謂彌陀原にして南北一里許東西 等あるのみ、 第中を過ぐる四五丁にして小丘あり、

此平原あるは未だ曾て見ざる所なり、小丘より平原 一里許の平原なり、 共間微高低ありと雖も高 Ш 中 如

ンクルマ蔓延して原中あらざる所なし、彌陀ケ原は 水涸れずと云ふ、其邊岩イチャウ多く又箬中にはチ に移んとする邊に生靈田と稱する、方一二間若くは 三間 の溺水ありて繭類生長せり、炎暑中と雖も其

に出づ。 り、凡小丘より十丁許にして追分を距る一二丁の所 盡くチン クルマなりと云ふも誣言にはあ らざる

悪十餘丁にして谿底に達す、 道は姥か懐鏡石 追分は右すれば湯泉に至る、余等の來路なり、 至るなり、 一の谷道は左折して谷底に入り其路險 へ出づ、 左すれば一の谷獅子鼻に 石をつたひ溪流を超 直

て崖壁に至れば鐵鎖あり、

之に據て攀登すれは

鏡石は白山の鏡石に似ず、

唯一丈許の圓石路右に

と云ふ。 像を安ず、夫より又崖壁に登りて鏡石の邊に出 獅子か鼻といふ、夫より大師の窟ありて弘法 2 D, 又一溪あり、之を一の谷と云ふ、 上り盡れば長七八間幅 其端の尖りたる所斗出して深谷に臨む、 二間餘ある一大巨巖あ 其岩石甚 一奇なり 之を の小

抵る、 云ふ一大頭石あり、 入る、平原より林叢中に下る事凡三丁にして澗底 余等は本道を取り平原を直行する事凡半里姥 所々澗水あり、 甚だ奇ならず。 夫より登らんとする際姥石と カン 懷 K

な

坦にして鏡石に至る、 小松阪なり、此阪甚長く漸くにして上り了れば又平 此邊千歲松、杜松多し。

を上る數丁にして叉平原に出づ、行く十數丁にし 登り盡せば又平原なり、數丁ならずして直に碁石阪 姥石も亦俗説あり荒唐なるを以て記せず。

(144)

ハイチャウ多く霜既に降りたるとみへて其葉青黄恰 是室の平也、 是より爪先上りの原野にして三五丁登れば全く平坦 大約半里許にして室堂に至る、 此邊イ

ガンカウランなど多し クラの類あり カナ

も黄花の開きたるが如く見へたり、

洪

間

ツカサ

7

室堂は竹中邦香の紀行天正十一年に再建せしより相

となし南の方の一區は神官及び 間 續 に拾 心き舊藩 間 侯 家加州 尺 あ より修繕を命ぜられし所にして縦四 b 正東に面す、 仕丁等 内を劃し 0 居る所に て四區

に於てす、 許りなる関爐裏をきり米を炊き湯を燂すなんど皆爱 きたるまでなれば甚だむさくるし、 室堂にては山中に生ずる薊を味噌汁にな 區毎に 方 間

充て、餘皆登山の客を容る、床板を張り上に莚を敷

る能はず云々とありて如何にも其建築は古く見へて

尺每 の到る事は佐伯より神官等に報じたれば室に到 間に十間なる室二箇續きたれば廿間あり、 も多くは根續せし柱なり、 に一柱あり、 四間に拾 柱は杉の一尺角にして六 間 尺とあれども、 既に余等 n ば Ŧi.

時三十分、直に中語に命じて齎す所の米を出 吳蓙など貸與へて取もちたり、 室に至りしは午後 して飯

を焚かしめ午飯せり、

前にも見へし如く此室内には

(145)

池ありて其瀦水を用るなれば冷水を飲む能はず、 水は白山の如く清潔ならず、 大小の鍋、 飯櫃茶椀ありて之を使用するなり、 室の右方に方五 六間 飲料 必 0

ず沸して之を用ゆ。

東の池を緑池と云ひ西の池を御厨の池と云ふ、 向て室の平を過ぎ四五丁にして路 見せんとて中語を伴ふて室を出づ、 午飯の後小雨あり、 暫くして止みたれば地 の左 直 右に池 に左して北 獄 あり、 谷 古は を

陸游記とり

して室堂の物を借るを得べく其餘の需用は一も辨ず

して客に供するを例

とす云

鍋叉椀などは貨を出

陸游記より

俗に氷地獄と稱し僧徒等之を紅蓮大行蓮に擬せし所 なりと云ふ。

くして岸斜なり、 アトキンソン氏の立山紀行に二湖を過ぐ、一は淺 他は右にありて岸直立し水色深

緑なり、恐くは「ナウマン」氏の云へるが如く古噴 如何あるべ

火口なるべし云々あり、

缓を過ぎ二丁許にして谷に臨みたる山崖に出づ、是 れ所謂地獄谷に下るの所なり、下らんと欲する中間 に一大巨石あり罪人の油しめ石と云ふ、 其側に小 而

丈許,

雨天には一丈五尺も上ると云ふ、實に地獄

の最大なるものなり。

て嘔せしむ。 て谷を臨めば硫化水素瓦斯騰散して鼻を撲ち人をし 彦父々出見尊を祀れりと云ふ、 此石邊に据し

地獄谷を瞥見するに中 最大なる無間地獄あり、 叉油! 屋地獄 の後丘を超へて遙に東の方に八幡地 央に油屋地獄ありて左の方に 其 間種々の名稱なる地 獄あ

獄

あり、

都て一

百三十六地獄ありと云ふ。

屋地獄、

油屋其他の地獄噴出せしものなるべしと雖

獄に至る、 丘を下れば凡て粘土質なる谷底にして第一に油 るを以て名くるなり、 池水沸騰して其色赭色を帯び 徑二間もあるべく紺屋地獄は 油 0 如く 屋地

藍瓶に似たり、 僅一間許にして池水沸騰して滓沫を生ず、 是亦其名を得たる所なり、 恰も紺屋 夫より無

塘を築きたる如く一方に口ありて陶器の片口と稱 間地獄に至る、 るもの」如し、中は泥水沸々として騰上する大約 其池直徑四五間にして周圍自然に堤 7

夫より一小丘あり、丘山に昇れば眼下に八幡地獄あ は一丈五尺許も騰上するものなれば往て見ず、 り、方一丁許なる沙場の中 央に唯水蒸氣 の二間 此沙 若

丘上は硫黄の堆積したるものにして無間 中にも亦數箇沸煙ある所あるを見る。 地獄

及銀

中

泥土樣 も真の硫黄は少くして白色岩の融蝕したる鼠色なる のもの其過半を占む。

噴口なり、 丘を上りて 前 原路を過ぎ紺屋地 に記載したる如く沸湯中蒼赤なる泡滓 獄に至る凡 間許なる

地

噴口 ありて噴 0 周圍 П 中に 硫黄多し、 充塞せり、 然れども 此邊亦小 採堀して其費を償 噴口數十ありて 3

雖 8 雨 害の際 は の流域となるべ

丘より

地獄中

間

の小

丘に至るの間は全く谷底なりと

や否に至ては覺束なきものなるべ

Ļ

初め下りたる

するに 最後に山 を忘る」如し、 も浸す能はず、 其 崖に 清冷なる恰も手を切 到るに 抑此水たる室の平の一 試に之を否む 一小川あり、 るが に其甘冷なる忽ち炎熱 流に臨て其水を弄 如し、一分間 方なる閻魔堂 を

本

・日採る所の草木を整頓

L 過刻、

地獄

谷

0

涌口に於

歸れば既に五

一時なり

きつ

T

百箇を以て其 口 を塞ぎ水は石間 を經過して出づ

石 0

北陸游記より

0

南下にありて山

崖

伏流なるべ

Ļ

其

口は方二間許に の半腹より突發す、

して大小の

花崗

想ふに平原

b,

川となり、 るなり、 獄谷を一巡了して川邊より山崖に上り 此下流は前記せし稱名瀑布となり降て稱名 藤橋に至て常願寺川に合するの上 閣魔堂に出 流

此際 松繁茂し其下カンカウラン、 一島飛翔して千歳松間に入る、 ツガサ クラ等 中 語雷 鳥 あり。 なるべ

づ、維昔閻魔堂のありし地なりと云ふ、

千歲松、

杜

暫く閻魔堂跡 大なるが如くなれば恐くはミヤマガラスなる可 しと云ひしが、雷鳥より小にして黑く大さ白頭翁の に休憩して緑地 の西邊を過ぎて室堂に

(147)

何なる事 恰も硫黄泉の溫泉場に入り 清洌 既に其場に於て飲みたるは其味甘洌 なる水を飲料 なるかと熟々其事を考 の爲め たる 壜持ち來 るに、 如 き 涌 りて なり 出するまで 種 飲 0 した 異臭あ みし 如

は清洌なるも石間を出れば空中に蒸散

せる硫黄の水

に如此なれば遺憾極りなかりし。しは溺水の口中に入るに任へざるを以ての事なりし中に落ちて此異臭を發する疑ひなし、余の之を齎せ

寝る能はずして同く爐邊につきて談ず。
るに蚤の爲めに睡る能はず、起て蚤を振つて又寝にる能はず、十二時に至れる頃斷然寝につかざる事にる能はず、十二時に至れる頃斷然寝につかざる事に

ぎ、切るが如き寒風を防ぐの備あることなし云前に譲らず云々、��此所にてはゴザにて人口を塞層悪くして室狹く、敷物粗大にして焚炎の苦難亦アトキンソン氏立山紀行に室堂は白山に比して一

とありて白山の室より非常に悪しと記載した

なれば千歳松の薪なりと雖も白山室よりは煙氣を

淨土山に向ひて發す。

室は白山より壯大にして窓の如きも亦大

く其間越年の蚤住居して夜間餐風するは殆どたへの事は絶へてなきものとみへて、其廛は鋸粉の如したるが如く年々山開きに莚を上げて掃除する等とたるが如く年々山開きに莚を上げて掃除する等とあるが如く年々山開きに

八月廿七日 晴 攀岳頂 芦崎に下るき蚤僅に八人に食ひ付たれば眞に言語に絶たり。

飛驒高山の者二人のみなれば、数百人に分與すべ

難し、

加るに此夜は登山人は僅に美濃の者一人、

とす、午前五時十分室を出でゝ直に右して西南の方りて高く聲へ、山足の殘雪燦然として實に奇景なりりて高く聲へ、山足の殘雪燦然として實に奇景なりし、午前四時室中盡く起出して早飯し淨土山に登んし、午前四時室中盡く起出して早飯し淨土山に登ん

(148)

曉未だ徹せず、 模糊の中三五丁を過ぎて秡堂あ D.

を唱 小 洞 へ賽銭を促せり、 なり、 兹に至て夜徹す、 此堂を過ぐれば漸く登路 導をなす神官は に巡 につ 配 詞

き河の 登して暫く休憩す。 如き石徑を攀ぢ上る事數丁淨土山 0 IE. 面

とす、

少く南に偏りたるを龍王岳とし其半腹

に平

面

此 邊 オヤマリンダウも 種 0 1 1 7 7 サ 亦あ 3 テ 50 + ~ = 2 ジン 含方 等

此地 の眺望は 正北に近く白 Ш あり、

憩して又登る、 路彌險惡にして石上を飛躍 して 漸く 伽羅嶽:

あ

b

白山

0

南

に木

台御岳諸

Ш

あり、

暫く休

洪

右に

俱利

より

建てり、 K して頂上に達す、 維新前は淨 祉あり、 士: Ш の阿彌陀堂にして今天日鷲 四尺に六尺、 西に 向 T

此頂上より Ó 眺望は竹中邦香の紀行に能く盡

せり

するものなり、

社 を拜

日

<

命を祀

れりと云

30

JU 方を見渡すに立山は爰にて東北に當てなほ仰 当

北

陸游記より

大日ケ岳、 見るほどなり、 北より西に連りて別山の山 脈

及び

脈は稍遠きを國見嶽とし、次で近きものを天狗 女岳俗には小大日といふ、 早乙岳を見るに皆弟姪のごとし、 南より西に續きたる山 早乙

やム距離ある一 して狀甚奇拔なり、 の地 あるを五色原とい 峯を薬師岳とす、 猶其南に列るを鯉鮒嶽とし、 å. 4 腹以下斷岸峻峭 龍王岳の西天狗

平の南なる直下の谷底に一泓の水色湛 へて藍の如

く見ゆるを対込の

池とす、

眞川の源實に此

に發

(149)

所といふ、すべて是等の諸 早魃にも水増減する事 す、池の徑百弓ばかり其深さ測るべ なく相 岳は皆立 傳 へて神物の宅 からず、 Ш 0 脈胳延亘 する 霖 雨

稍廣く東南に巡れるを以て山背を行く事數丁、 して山 上直 10 東南 10 向 ふて H づ、 此 岳は 石 頂 1:

記

山と立山との中間に出づ、此邊馬背の如く左右數千 の屬最多 行究つて更に北に向つて下る、淨土

\$

のなれば跣足にては頗難澁なり、

大約

Ti.

越 前

半丁許にして絕頂に達す、

此道の半より

Ĺ

社

白砂 より

似の谷あり、 此邊 K 黄花のスミレ、 黑 2 ŋ, 車

1 IJ

庭と稱するまでは神官注意して川砂利を採來て敷

たり。

淨土山を下れば立 種 の玫瑰多 山の半腹なり、 の越に至る間登

を生 る事凡丁許にして一小祠あり、是一の越なり、寸草 せずと唱ふれども所々に黄スミレ 、ミヤマツメ

面は大岩突兀として

り、又上る凡一丁半にして二の越に至る、夫より又 サ等あり、 全山大小岩の碎石にして盡く花崗石 な

7

ありて毀傾せり、 丁餘にして三の越なり、 なる所と云ふ、 にして東に向ひて絶頂の下にありて山中第 此所にて登山人杖を措き草鞋 五の越に至る、 四の越の 問も亦 是僧徒の所謂 同 0 く皆小 を脱 暖煦 九品 洞

頂に登る、

歩する所は細砂なりと雖も是亦灰色の稜角ある

元年の修造にして其費三千金餘を費せりと、

是山

L

前田家の徽號を附

し扉簾も亦頗る美なり、

聞

ならず、

金物は盡く

きなり。

是よりは岩石殊に稜角ありて頗る危險

て社参するなり、

予等も止むを得

ず杖履を措きて絕

此社 5 微近きのみ、 其下雪あり、嘗て數年間尾張のもの發狂して此所よ く數千尺なるを知らず、 其廣さ凡七八疊も敷るべく四面は共に絶壁削るが如 本社は南に面して六尺に一丈ありて社前即白砂庭 聞く共桂は石上六尺餘なりと雖も石層中一丈許あり り飛下して死せし事ありと神官の談なりし、 方は別山 高 は甚大ならずと雖も構造粗 Ш 上風に抗せんとならば左もあるべ の方に向ひて 社後は石垣を築きて 殊に南 Щ

尾あれ

ば谷底に比

すれ

只東の

(150)

顕覆を防ぎたり、

五.

運 機共 他 の費用多きを以てなるべし。

現にして 祀 本 社 L は左、 T 雄 阿彌陀如來と不動明王の垂跡と稱 Ш の神社と稱するなり、 伊弉 諾 尊、 右、 天手力雄命とす二神を合 卽維新前 せし の立山 所な 權

bo

事と思ひ居たるなるべけれども とせり、 質要報には 此 立山 北 陸第 は日本文學には九千三百七十二尺とし、 一の山とて名高かければ其山 (ナルチニ百〇五英尺ありとす)古來越の白山と稱 一萬千七百八十八尺(三千五百八十米) (山に売くと記、又竹中邦(越中地誌略に高艘なる白 よりは 低 地 き

如く白雲四方に敷き共間島嶼

0

如

3

諸山

題は

n

た

るは、 文學には は常念山 連峯 藥師 の西にありて南北に 日本高 却て白・ 脈、 岳 御岳 有拳、 山 山に比すれば五百六十八尺高く地 Ш 中 脈と並行し御岳山 の第十位を占めたり、 王岳 笠ヶ岳等なれ 走れり、 に北は劔ケ峯に西は大 ども皆立山 Щ 脈中 脈 の北最高 本山脈 0 重 1 な

> 後は とも 月の 最多く降る事早くして消る事遅 Ш 訓 間 信濃の に連れり、 ふ可き氣節なり、 のみ登攀す、 國 10 連る、 越中國上新川郡の東偏に位し 余が此日登攀せしも既に最終 其 草木昆虫等を採收せんと 山北 西に面せるを以て雪 故 に例年七八 て背

さて社前より四方を眺めば渺々として大海を觀るが せば七月末より八月上旬最宜しと神官は 云 b

にあるは飛驒乘鞍岳、 D, は龍王岳と淨土山 先づ西南に方りて最近 の上に信濃の 正南に突起したるは槍ケ岳 きは加賀 御岳 の白 Ш あり、 Ш な 9 其左 其

南

て明なり 小なり、 りて見へざりし、 南東に遠く富嶽見ゆると云ふ、 東に信濃なる淺間 北 の方は別山薬師岳に遮られて遠望する 甲州八ツ岳は少く東に偏して遠く 岳は噴煙ありて問はずし 然れども此 日は雲あ

能 はず。

は低い

南

は龍

北

陸游記

より

Ti.

37.

別 眞 山 砂 この背後にありて峻峭として天を刺せり、 岳 は脚 下にあり、 其向 には別山あり、 劔カ岳は 北 より

西に 0 小なる丘垤 方りては大日岳、 の如 きものは多々ありて其名を聞 早乙女岳相列れり、 其他近 Ш

長白

羽神を嗣る、祠畔に池あり、硯の池とい

.8.

徑 天

あ 0

々し難し。

く此

神官は岩崎の祠官にして佐伯

但馬と云

へり。

神拜の後神官は神酒を出したれば談話して數盃を傾

費し今夕又室堂に一泊せざるを得ずとの事なれば余 是より 等は直に下山せんとす、 下を通りて至るなりと云ふ、 別山に向 ふは絶頂と九品との中間より 故に原路を一の越に出で」 別山に 至れば今一日を 社 後の

北

旣に 九時半なりし。 右折して谷に下り浮土山の麓に出でゝ室堂に歸れば

して後日 の参考とす。

别

Ш

0 事

は竹

中邦香の記行に委くみへたれば兹に

追 分より北にさして別山に上るに、 其路立山の一

越以上ほどに急ならざれども巖石と砂礫と交錯

れば地數十弓の間平坦にして爰にも亦祠 て足を下すに艱むことの立山よりも甚し、 頂に 至

は奇なりと謂ふべし、亦是噴火の痕跡ならん、 十弓にも餘りつべし、 斯る山巓にして斯る池ある 池中

がら逆に劔を植たる如く盡く石骨にして土砂草樹 掬てこれを飲むに寒冽骨に沁す、是所より望めば て水となりたる處を見るに底甚だ深からず、 雪猶堆くして淺深を測るべからず、 は谷を隔て劔ケ嶽の全形を見る、 共 **峯狀突兀さな** 隅の溶け 試に

やゝ低きを白兀山といひ、次に遠きを赤兀山とい 絶巓を究めたるものなしといふ、其西北にありて なるが故に足の着くべき所なく終古いまだ曾て其

立に多く譲らざるもの」如し、

たゞ山

0

如く

の肉を着けず、宛然倪黄の渇筆なり、

其高さも 上剱

(152)

砂石鞋底より崩れ落るを以て走らざらんと欲する 下を小走といふ、もとは大走と同く小石のみなり てや、雑草を生じ大石星散する所に至て止む、其 にして止るべからず、故に呼で大走といふ、既にし も勢走らざるを得ず、一度足を走らすれば勢中途 石ほどの砂石ばかりにて一樹一草なく足を下せば りそれより道急にして一直線なる坂を下る、火打 高低を論ずるにも及ばず、山頂を辭し追分まで通 餓鬼、赤鬼等の名あり、其中に後立山最高し、餘は は越中信濃の界をなすものにして針木、栂、後立、 はすべて數千尺の斷崖絕壁にて崖壁の下は黑部 ひ、 の源流の出るところたり、之を隔て東に列る諸 に蔭になりて全體を見ることを得ずといへども固 より立山劔嶽と共に菌すべきものにはあらず、 又其次なるを船倉ヶ岳といふ、劔岳より次第 東 Ш JII

下山の準備既に整ひたれば午前十時二十分室堂を出 り着く、すべて爰に至るを三山をかけるといふ。 とす、是より更に一水に沿ひ南に前めば室堂に歸 紋ありて磚を積み曇みたるに彷彿たり、 れば入るべからず、其ほとりの石は皆横さまに し、一は濶さ少しく譲りて人は匍匐するにあらざ 席ばかりなるべく人は首を挽して立つことを得べ みたる巖の下のかた嵌空となり自然に窟をなすも て地獄谷の東崖なり、崖をつたひ南すれば谷に臨 の二つあり、玉殿の岩屋と稱す、 り、野を越て向ひの山に上る、是室堂邊より續 山の西面の雪の融たるものにて則稱名川の源 の間を縱横す、水は是立山の北面及び真砂岳、 いふ、濶さ三四町の間雜草亂生して數通の細流そ をふみ猶下れば初めて平野を得、是を賽の河 とを得ず、歩を下すに甚だ困しむ、是より谷底の雪 一は内の濶さ十 甚だ奇觀 きに 別 (153)

北陸游記より 宍戸

しが近年水のため大石を流し出し今は疾走するこ

語

ば芦峅までは至り難しと云へば遂に一の谷には巡は らざりし。 でゝ下路につく、 谷越への道あり、 原路を下りて鏡石に至れば右に一 此日時刻遅くして一の谷に巡れ

あるべし、 原路彌陀ケ原の追分まで下りて夫より原中猶半里程 然れども不知々々下るなれば忽ちにして

桑ケ谷の前阪まで來れり、

原中は例

の如く姥か懐を

路につくのみなりし、阪には千歳松と山白竹のみに 出る頃より雲霧濛々として四望する能はず唯 して下り盡せば桑が谷なり。 意下

此 此 所に一 兩日以 地 に盛暑中は茶屋ありしが今は登山 注の清 前下山せりとて其跡のみなりし、 水ありて弘法清水と稱し の客稀なれば 山中の名 然れども

丁にして登り盡せり、又平原あり、最早此邊は樹林と 飯後又下る、暫くして登路あり桑ケ谷の後阪なり、數 水なりと云ふ、 暫く憩ふて團飯を喫す。

> なりて松柏最も多し、 め皆枯れたり、暫くして路右に一大杉、 然れども大半は樹抄雪 蓋の 如く其 風の

根は上りて根下六七疊敷かるべきあり、 の杉下に宿せしと云しは蓋し此杉なるべし、 と云ふ、山人往々根中に泊すと云ふ、曾て小森賴信 之を鍋掛杉 行く事

云ふ、 く路傍の樹根を捫して漸くに下れり、 四五丁にして井中に入るが如き急阪あり、 漸二三町なれども其急且險惡なる足を下し 登る者も亦樹 刈安阪

難

山第一の峻阪と云ふ可し、刈安阪を下り盡せば又平 樹根は登人皆捫するを以て光澤ありて滑かなり、 歩みて上る是を刈安阪と云ふと記 せり、 實に 兩 傍 0

を聞くのみなりしは遺憾なり。

是より平夷なる地數丁にして小阪を下れば山

毛棒阪

所あ

D

此日霧未だ霽れずして見る能

はず、

唯水聲

坦の地あり、

此際路右に少く入りて稱名瀑布を看

(154)

根によらざれば上る能はざれば邦香氏は手足ともに

の上にしてブナ平なり、 此地にも休憩所ありて水を 山に登りたるにつき種々の俗説あり、

美女阪、

杉

賣れりと云ふ、 なければ登攀するものには此等の水賣なかるべから 黄金阪を上りて桑が谷に至るまで山中水ある所 然れとも是も亦既 K 撒 T 其迹 0

ず、 然れども一 椀 の水價 五厘、 白湯は六厘 なりと、

奄々たる氣息のも の五六盃は不 知々々續飲すべし、

> D. 聞

是より路傍の樹木にして天日を見ず、

恰も北

ゆ、

然らば其水價 二錢五厘とは實に驚くに任 へたり、平

安阪の如く險ならずと雖も少く長し、 此坂「ブナ」 夷なる地を過ぐる五六丁にして山毛橡阪を下る、刈

の樹多きを以て名づくる所なりと云ふ。

あり、 下り盡せば小丘ありて數次上下す、 して下垂し恰も小童の頭の如し、 高さ一丈餘にして其関亦一丈餘其枝髦々然と 其名を得る所以な 其間路右に禿杉

亦其迹のみ。

今は亡矣、此所にも岩石の下に水を賣ると云ふ是も

る所往々あり、

夫より からず、 山腰を巡 叱尿と云 九 ば 小阪 ふ、俗傳に昔若杉小濱女僧の此 の側 に一穴あり、 深さ測

3

る大約五六丁阪も亦頗險

なり、

此下少

しく平夷に

て草生阪となる、

北陸游記より

实戶

bo

が今は亡矣、此邊に到て稱名川、眞川の二水聲始て 美女阪に至る急阪なり、 及び此叱尿など是也、 藤橋の遠からざるを想像し大に氣息を復した 此邊美女杉なるものありし 妄説なれ ば贅 しせず。

朽ちて巨蟒の道に横るが如きあり、 熊王に至る熊野權現の小 木上に跨り過ぐ 洞ありしが (155)

道の山中若くは富士の深林に入りしが如く路上老木

て恰も材木の如く所謂材木岩なり、 夥しく其形長短大小ありと雖も四方若くは六方に 猶下れば材木阪なり、 路上岩石縱橫磊硯として其 其在る所を過ぐ

是より岩石少く既にして黄金坂

至れば曲折數十 して遂に藤橋畔の追分に出づ、橋を過ぎて登路憇ひ 山中第二の急阪なるべし、 十數丁に

崎との中間ならんと思惟せる所に佐伯忠胤より馬を 暫く想ふて常願寺川に沿ふたる原路を過ぎ藤橋と芦 たる茶店に入る、

時に午後五時過なり。

牽き迎の者出せり、こゝに於て又暫く憇ふ、一樽及 赤飯を齎して饗せり、 佐伯氏は馬を好みて出入馬に乗ると聞しが果して 所謂坂迎なるものなるべし。

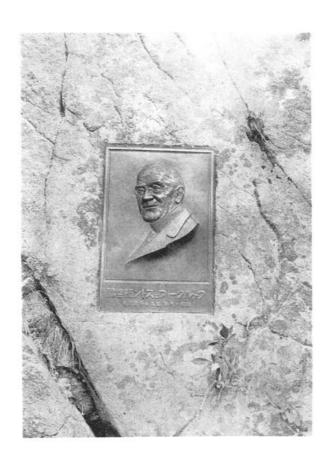
暫くして馬に乗り諸人に先ちて發す、数丁に 能登馬に洋鞍を置て牽かせたり。

して常

十分佐伯氏に入りて泊す。 至れば將に黄昏ならんとす、 漸くにして午後六時三 願寺川河原の便路に出て芦崎の杉の森の見ゆる邊に

後

一类





ウェストン師の壽像

會として何等かの形式で、同師の功績を紀念し永遠に傳

建設について

建設

委

員

會員諸兄の寄せられたる御好意に答へたい。 で、會員諸兄もすでによく御承知のことであらうと思ふ。 で、會員諸兄もすでによく御承知のことであらうと思ふ。 で、會員諸兄もすでによく御承知のことであらうと思ふ。 だのである。玆に今迄の經過を抄録して、この事業のため たのである。 対に今迄の經過を抄録して、この事業のため

た。特に同師の酬ひらる、夢き過去を顧るとき、我々は、あるが、師の病床を見舞ふべく、二三の會員から御見舞のあるが、師の病床を見舞ふべく、二三の會員から御見舞ののとしては、一時的で、小範圍に 止まらざるを得なかつのとしては、一時的で、小範圍に 止まらざるを得なかつのとしては、一時的で、小範圍に 止まらざるを得なかつのとしては、一時的で、小範圍に 止まらざるを得なかつ

があつた。
四月の理事會に於て神河内と關係ある官廳の内意が略
の関介の理事會に於て神河内と關係ある官廳の内意が略
の関系の理事會に於て神河内と関係がある官廳の内意が略
の関系の理事會に於て神河内と関係がある官廳の内意が略

任した。

げ、その後の交渉、製作者の選定、建設の様式の決定を委

(157)

浮彫原型は佐藤氏の苦心努力によつて着々と準備され、

x

ストン師の壽像建設について

要

ウストン師の若い頃、或は最近の肖像などが方々から集め

に承認、直ちにその鑄造に取かふることになつた。十日の理事會に於て、役員の內覽を仰ぎ、原型はそのま、員の意見なども参酌して早くも六月初め原型の完成を見、られて原本となり、また直接同師を知つて居られる三三會

「原型は二尺二寸に一尺七寸の額面型の浮彫胸像で、最近原型は二尺二寸に一尺七寸の額面型の浮彫胸像で、最近の質像を土塞とし、これだけではひどく老衰されてゐるのの背像を土塞とし、これだけではひどく老衰されてゐるのの背像を土塞とし、これだけではひどく老衰されてゐるのの背像を土塞とし、これだけではひどく老衰されてゐるの

次の問題は壽像建設地點の選定であるがなるべく多くとを深く感謝して、原物の完成の日を樂んだのである。

暇に、しかもかくまで早く製作された製作者の苦心と好意

の人達の目にふれる所でしかも自然に露出する岩面を利

内に入つた。清水屋の上流善六澤との間に一つの岩面を發旗、中司、黑田及び製作者たる佐藤久一郎氏の四名が神河方計の下に六月下旬、この建設の現場を實地檢分のため、用し、なるべくそれを傷けないで、嵌入する様式に建設の

見し、これを建設豫定の候補地と内定、たまく、この地に に立寄り、關係各員を訪ね了解を得ることを得た。 に立寄り、關係各員を訪ね了解を得ることを得た。

上高地保護林内土地使用承認願を、七月十七日には、長野心可否を諮り何れも異議なく承認を得た。そこで直ちに提出書類の作成を取急ぎ、七月十四日には、東京營林局に、出書類の作成を取急ぎ、七月十四日には、東京營林局に、

事に着手するので、委員のうち、槇と製作者の佐藤氏が其數の會員の御高覽を得た。八月一十四日より愈々取付け工署長有馬省吾氏の名を以つて土地使用承認の許可が下つた。そこで八月十五日壽像完成の披露を行つた處、幸ひ多た。そこで八月十五日壽像完成の披露を行つた處、幸ひ多た。そこで八月十五日壽像完成の披露を行つた處、幸ひ多た。そこで八月十五日壽像完成の披露を行つた處、幸ひ多た。そこで八月十五日壽像完成され、八月初め長野縣知事近藤駿置許可申請書を夫々提出した。

の日東京を出發、二十五日松本で諸般の準備を調べた上、

縣土木部へ中部山岳國立公園內工作物新築屆を、知事宛學

務部へ上高地史蹟名勝及天然記念物指定區域內工作物設

大堅剛なる部面に融合して宵暗の中に納つた。 取付けるのであつた。六時全く仕事を終り足場を除くこと りさへも愛着に堪へぬかのやうな熱意を以て胸像を努り 足場に飛び上り自らセメントを塗り始めた恰もその一塗 は終日靜かなる溪谷に谺した。午後四時半途に嵌入部分を とは此様な偉大な自然の中での私等の爲し得る最大の努 であった。加工を極限し仕上りを出來るだけ自然に爲すこ 原狀の儘に保存し工事は唯胸像嵌入の分のみを穿つこと やうに苦心した。また岩を園む樹木やその他凡てのものを 寂びが一面を蔽ふてゐる。施工に當つて此寂びを毀損せぬ 裂かれたるものか解らないが、何れにしても星霜を經たる 花崗岩の堅牢な約十餘尺横約七尺の面は、自然に節理に因 子來着し、岩石面に鑿を入れ始めたのは八時半であつた。 が出來た青銅の像は恰も岩石と共に生成せるかの如く巨 刻み取りセメントを付けるばかりに進んだ。此時佐藤君は 力と思はれるからであつた。金子父子の絶え間無い鑿の響 神河内に入つた。二十六日早朝に松本より石工金子榮藏父 つて生じたるものか或は又林道閉鑿の際に節理に沿ふて

つた。私等は或は近く寄り或は遠く離れていろくくと眺め橋な大氣を吸ふて生きてゐる。此岩に魂を得たのだ。限り場に走つた。ウェストン師の温額は突然微笑むが如くに透想に走つた。ウェストン師の温額は突然微笑むが如くに透

入り低徊去り難きを覺えた。

た終始情しみなき努力を竭されたる製作者にも特に深く を思ふ。此仕事の完成に當り會としては何等儀禮的な企は を思ふ。此仕事の完成に當り會としては何等儀禮的な企は を思ふ。此仕事の完成に當り會としては何等儀禮的な企は ではなかつた。此事が却で同師を記念するに何か相應しい でうにも思はれる。終りに本事業に對し諸官廳並に關係各 での寄せられたる御援助に對し深甚の謝意を表したい。ま た終始情しみなき努力を竭されたる製作者にも特に深く

(159)

ウェストン師の壽像建設について

玉九

感謝したいと思ふ。

告

會 務 報 告

月 定 例 理 事 會

恒例の新舊理事送迎晚餐會を兼ねて 一月十四日田町司俱 新舊理事送迎晚餐會

樂部で一月定例理事會が開かれた。

出

新理事 引退理事 西堀、 三田、 中司、高橋、 飯塚、 逸見、松方 加藤

其

他

木暮、

高頭、

息山、

冠、

槇、黒田、

木村、

櫻井

田口、田田 茨木、 何 m 島田、 中屋

、『山日記』編輯の件 、『山岳』三十一年第二號印刷の件

役員事務擔當の件

新入會員詮衡

庶 (田黒田)

計 茨木、 中司 (鳥山 磯野 (松方、

> 『會報』 書 新 評 島田、 中司、 議 員 田口田 中屋 推 (松方) 薦

評議員會は會則第九條第一項により、松方前理事を評議

同評議員を常任評議員 木暮會長よりその

旨報告があつた。

に選任するに決定、十四日の理事席上、 員に推薦し、更に同第十條により、

二月定例理事會報告

木暮、鳥山、 二月十八日午後六時半本會事務所 席 黑田、 松方、 高頭、

出

小島、 冠、 H П 司、高橋、

島田、

磯野、

加藤、角田、茨木(委任)、槇

木村、

津 田、

西堀、中

一、『山岳』三十一年第二號編輯ノ件 一九三七山日記編輯報告

云

『山岳』

高橋、

加藤、

櫻井、

田 П

研

究及調查

(黒田)

(『山日記」編輯を含む) 高橋、

角田、

關西支部近況報告

關西在住理事分擔事務ノ件

理事委員 庶 別宮、

松井

山岳會報 計 今西、 津田、 宮田 加納

圖

別宮、

宮崎

三月定例理事會報告

三月十一日本會事務所に於て開催

出席者

中司、(以下委任)

木暮、松方、鳥山、小島、黑田、

田口、西堀、

加藤、 島

ウェストン氏記念事業ノ件

山日記編輯報告

田、

、『山岳』三十一年二號編輯の件

四月定例理事會報告

四月十五日午後六時半本會事務所

松方、黑田、

高頭、 告

茨木、

角田、中司、(委任)

高橋、

田口、

中司、

櫻井(委任)冠、加藤

木暮、 席

會

務 報 出

、名譽會員ウェストン氏記念事業の件 中屋、木村

六月小集會ノ件 研究會ノ報告 六月定例理

六月十日午後六時本會事務所

事會

松方、 席 植、鳥山、黑田、

出

小島、 高頭、木村、 **茨木、島田** 小島、 冠、木村、中屋、 田 Ц 加藤、

西堀、

高橋

一、一九三七山日記編輯報告 『山岳』三十一年二號編輯報告

ウェストン氏記念事業ノ件

五月定例 理 事會

出 席

島田、

田口、

角田、

中司、

木村、

茨木、

高橋、

櫻井

松方、鳥山、 槇、 黑田、

五月十三日午後七時本會事務所 高頭、

西堀(委任)小島、木暮、

中屋

(161)

務 報

木暮會長病氣見舞ノ件

研究調査費支出ノ件

借室ノ件

ウェストン師壽像原型完成ノ件

山岳編輯ノ件

山日記發刊ノ件

圖書整理ノ件

會員有志懇談會ノ件

七月定例理事 會

七月八日午後六事半本會事務所

出 席

松方、黑田、 高頭、小島、 冠、 木村、 櫻井、

西堀、

製作者)(委任)鳥山

茨木、中司、

高橋、

島田、

佐藤久一郎へ會員、レリーフ

一、ウェストン師レリーフ建設ノ件 一、『山岳』三二年一號編輯

九月九日午後六時本會事務所 九月定例 理 事 會

> 出 席

鳥山、 角田、

茨木、

高橋、

島田、

櫻井、

西堀、

中司

一、ウェストン師レリーフ建設報告 (委任) 黑田、木村

山岳、 會報、編輯係ノ件、 庶務係ノ件

新任理事選考ニ關スル件

一、木暮會長其他還曆配ノ件

小集會(九月) 有志晚餐會(十月)一時延期

グ件

一、會計報告

空

投稿規定

山岳

, 原稿は返却せざるものとす。 原稿の採否は理事會に於て決定す。 の費用は筆者の負擔とす。 別刷所要の向はその旨原稿に朱記せられたし、 ざるとを問はず。 投稿は何人も自由とす。日本山岳會員たると然ら

校正は編輯者に一任せられたし。

に説明記入を乞ふ。

寫眞は光澤印畫紙に焼付けられ度、 紀行には概念圖を添付せられたし。 原稿にはその梗概を附せられたし。

裏面或は別紙

地名及び外國語は特に明確に書かれ度、 振假名を附せられ度し。

地名には

原稿蒐集所

東京市芝區琴平町一、不二屋ビル、三〇七號室 山岳會編輯所

本

原稿用紙所用の向は前記編輯所宛て申込みあり度し。

昭和十二年十一月二十五日印刷 發行所

昭和十二年十一月 三 十 日發行

一定價金參圓

東京市芝區琴平町一、不二屋ビル内 本 山 岳

東京市牛込區市谷仲の町二八 振替口座東京四八二九番電話芝一六四九番

有所權作著

編輯兼發行者

黑

田

孝

雄

1:17

刷

书

植

田

庄

助

東京市

芝區濱

松町一ノ十三

發

賣

所 東

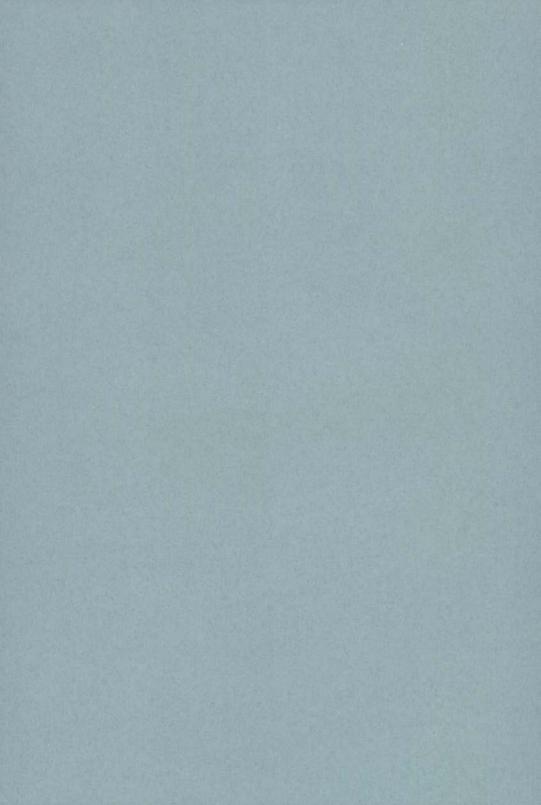
京 東 īþi 神

田 京 166

神 保 [ii] 堂

(166)

一大次



The Journal of the Japanese Alpine Club

SANGAKU

Vol. XXXII 1937 No. 1.